

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告Ⅵ

西 部 遺 跡 Ⅲ

2 0 0 6

新 潟 県 教 育 委 員 会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告Ⅻ

西部遺跡Ⅲ

2006

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市の新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田自動車道と接続し、秋田県河辺ジャンクションに至る高速自動車道です。新潟県内では胎内市の中条インターチェンジまでが平成14年度に完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、日本海沿岸東北自動車の中条一朝日IC間は、旧日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。その後、公団の分割・民営化に伴い、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国幹会議において、荒川一朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。日本海沿岸東北自動車道はこの地域内外の経済的な交通・流通を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送などの「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれます。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「西部遺跡」の報告書です。今回の発掘調査では中世から古代にかけて複数の生活面が確認され、集落間の土地利用の様子を知ることができました。また、最下層で検出した小規模な杭列は、年代測定から6世紀末～7世紀中葉と判明し、7世紀中葉に造営された「磐舟柵」と時期的に近く、当該地では数少ない貴重な資料と言えるでしょう。

今回の発掘調査が、考古学研究所はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元住民の方々や地元区長並びに神林村教育委員会には多大なる御協力と御援助を賜りました。また、東日本高速道路株式会社及び同村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成18年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例 言

- 1 本書は新潟県岩船郡神林村大字半屋字西部1025ほかに所在する西部遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は、日本海東北自動車（以下、日東道）建設に伴い、新潟県が東日本高速道路株式会社から受託して実施した。
- 3 発掘調査は新潟県教育委員会が調査主体となり、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を委託し、埋文事業団の管理・監督のもと大成エンジニアリング株式会社が実施した。調査年度・調査体制については第Ⅰ章に記した。
- 4 整理及び報告書作成にかかる作業は埋文事業団の指導のもと大成エンジニアリング㈱が行った。整理年度・整理体制については第Ⅰ章に記した。
- 5 出土遺物と調査にかかる資料は新潟県埋蔵文化財センターに保管している。遺物への注記は今回の調査地区を示す記号として、「西BⅢ」を記し、その後に出土地点及び層位を併記した。
- 6 本書で示す方位はすべて真北である。作成した図面のうち既成の地図等を使用したものについては、それぞれに出典を記した。
- 7 遺物番号は通し番号とし、観察表・図面図版・写真図版の番号は一致している。
- 8 第Ⅴ章の自然科学分析については報文を含め、株式会社加速器分析研究所、バリノ・サーヴェイ株式会社、宮武頼夫氏（関西大学）にそれぞれ委託した。
- 9 出土遺物については水澤幸一氏（胎内市教育委員会）よりご教示を得た。
- 10 本書の記述は鈴木俊成（埋文事業団調査課課長代理）、吉田 寿、作田一耕、小林貴郎（以上、大成エンジニアリング㈱）、酒井久美子（㈱加速器分析研究所）、辻本崇夫、伊藤良永、齊藤崇人、馬場健司、松本美由紀、高橋 毅（以上、バリノ・サーヴェイ㈱）、宮武頼夫が分担執筆したもので、分担の内容は以下の通りである。
 - 第Ⅰ章 1 鈴木、第Ⅰ章2・3 吉田
 - 第Ⅱ章 小林
 - 第Ⅲ章 吉田
 - 第Ⅳ章 1・2 小林、3・4 作田
 - 第Ⅴ章 1 吉田、2 酒井、3 総括 辻本、C1) 伊藤、C2) 齊藤、C3) 馬場、C4) 松本、C5) 高橋、
4 宮武
 - 第Ⅵ章 1A・B・D 小林、1C・2・3・4 作田
- 11 本書の作成は、遺構図版は小林貴郎、遺物図版は作田一耕、写真図版は伊藤俊治が行い、鈴木俊成の指導の下、吉田 寿が全体の編集にあたった。
- 12 発掘調査から本書の作成に至る間、下記の方々から多大なご教示・ご助言をいただき、謝意を表する次第である。
 - 東 早花 近江屋成陽 折原洋一 垣内光次郎 惟村忠志 二瓶 稔 服部敬史 前川雅夫
 - 水澤幸一 湯原勝美 荒川沿岸土地改良区 神林村教育委員会 村上市郷土資料館
 - 米沢市上杉博物館

目 次

第 I 章 序 説	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査と整理作業	3
A 確認調査	3
B 本発掘調査	5
C 整理作業	7
3 体 制	7
第 II 章 遺跡の位置と環境	9
1 はじめに	9
2 地理的環境と自然立地	9
第 III 章 調査の概要	14
1 グリッドの設定	14
2 基本層序	14
第 IV 章 調査の成果	17
1 遺構概要	17
2 遺構各節	18
A 第Ⅻ層の遺構 (a)	18
B 第Ⅻ層の遺構 (b)	19
C 第Ⅹ層の遺構	20
D 第Ⅷ層の遺構	21
E 第Ⅴ～Ⅶ層の遺構	22
F 第Ⅳ層の遺構	24
3 遺物概要	27
4 遺物各節	28
A 古 代	28
B 中 世	32
C 近世・その他	34
第 V 章 自然科学分析	35
1 はじめに	35
2 西部遺跡の放射性炭素年代測定	35
3 西部遺跡の珪藻・花粉・植物珪酸体分析、種実・樹種同定	36
4 昆虫遺体と推定される古環境について	46

第VI章 ま と め	48
1 本遺跡の集落景観について	48
2 XIII層検出の杭列について	51
3 VIII層遺物包含層出土土師器の編年的位置付け	52
4 珠洲焼を中心とした中世の出土遺物について	54
《要 約》	55
《引用・参考文献》	56
《観察表》	58
別表1 出土遺物観察表	
別表2 石製品観察表	
別表3 木製品・木杭観察表	
別表4 金属製品・銭貨観察表	
別表5 遺構観察表	

挿 図 目 次

第1図 年度別本発掘調査範囲	2	第12図 V層上面で検出した遺構	26
第2図 確認トレンチ位置図（平成13年度）	3	第13図 VIII層出土土師器無台碗分類図	32
第3図 確認トレンチ位置図（平成16年度）	3	第14図 各地点の模式柱状図、試料採取位置 および分布層位	36
第4図 確認調査出土遺物実測図	4	第15図 主要珪藻化石群集の層位分布	37
第5図 平成16年度本発掘調査範囲	5	第16図 主要花粉化石群集の層位分布	38
第6図 遺跡周辺の地勢概念図	10	第17図 植物珪酸体含量	39
第7図 瀬波郡絵図	11	第18図 谷地形の変遷（IV～VIII層）	50
第8図 周辺の古代・中世遺跡一覧	13	第19図 土師器碗口径数量	53
第9図 グリッド設定図	14	第20図 土師器碗底径数量	53
第10図 基本土層断面図	15	第21図 土師器碗口径／器高分布図	53
第11図 遺物出土層および遺構検出面	17		

表 目 次

第1表 平成16年度確認調査出土遺物一覧	5	第5表 樹種同定結果	43
第2表 放射線炭素年代測定及び暦年校正結果	35	第6表 SR4003出土昆虫遺体	47
第3表 種実同定結果（単体試料）	40	第7表 本調査区における土地利用の変遷	51
第4表 種実同定結果（土壌試料）	40		

図版目次

- 図版 1 XII層遺構全体配置図
図版 2 XII層遺構個別図① SR4003
図版 3 XII層遺構個別図② SX4001・4002
図版 4 X層遺構全体配置図
図版 5 X層遺構個別図 SK3001・3002、SD3003・3004
図版 6 VII層遺構全体配置図
図版 7 VII層遺構分割図
図版 8 VII層遺構個別図 P2002・2009、SD2001・2003～2008
図版 9 VI・VII層遺構全体配置図
図版 10 VI・VII層遺構分割図
図版 11 VI・VII層遺構個別図① SK1001・1002・1015・1017・1019
図版 12 VI・VII層遺構個別図② P1006～1014・1016・SD1003～1005・1018・1020
図版 13 IV層遺構全体配置図
図版 14 IV層遺構分割図①
図版 15 IV層遺構分割図②
図版 16 IV層遺構個別図① P0001～0013・SK0023・SX0024
図版 17 IV層遺構個別図② SD0014～0022
図版 18 XII・XIV層の出土遺物
図版 19 X～XII層の出土遺物
図版 20 VII層の出土遺物
図版 21 V～VII層の出土遺物
図版 22 IV層の出土遺物
図版 23 IV層及び近世・その他の出土遺物
図版 24 遺跡の位置
図版 25 遺跡近景
図版 26 XII・XIV層の調査、SR4003
図版 27 SX4001・4002
図版 28 X層の調査、SD3003・3004、SK3001・3002
図版 29 VII層の調査、P2002・2009、SD2001・2003
図版 30 SD2003～2008
図版 31 SK1001・1015・1019
図版 32 SK1002・1017、SD1003～1005、P1011
図版 33 IV層の調査、P0004・SD0014・0015
図版 34 SD0014、珠洲集中出土、SK0023、SD0016・0017・0021、SX0024
図版 35 遺物出土状況、基本土層、作業風景
図版 36 XII・XIV、X～XII、VII層の出土遺物
図版 37 VI～VII層の出土遺物
図版 38 IV・V層の出土遺物
図版 39 近世・その他の遺物
図版 40 自然科学分析 (1)
図版 41 自然科学分析 (2)

第I章 序 説

1 調査に至る経緯

日本海東北自動車道（以下、「日東道」とする）は、新潟中央ジャンクションから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田県の秋田自動車道と接続する高速自動車道である。新潟県側は新潟空港・中条インター間が平成14年度に完成している。中条インター以北は平成元年及び平成3年に基本計画が決定され、本遺跡が所在する中条・荒川インター間は、平成10年4月に施行命令が出された。これを受けて、東日本高速道路株式会社^{註)}（以下、「東日本高速道路」とする）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」とする）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

分布調査：調査は県教委から委託を受けた財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」とする）が平成11年度に中条・朝日インター間で実施した。調査の結果、神林村以北では道路法線上に5か所の遺跡（新発見も含む）と15か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。西部遺跡は平成2年度に県教委が実施した遺跡詳細分布調査で発見されたもので、後述する確認調査により遺跡範囲が拡大した。

確認調査：高速道路法線杭STA408+30～STA422+60間について、平成13・14年の2回に分けて実施した。調査対象面積は93,920m²で91か所の調査坑を設定し、合計3,211m²を調査した。この調査の結果、対象地には古代・中世の遺跡である西部遺跡のほか、縄文時代から弥生時代の遺跡が存在することが分かり、小字名から中部北遺跡として新規登録した。

西部遺跡の本発掘調査面積はこの時点で47,060m²（中世14,500m²+古代32,560m²）であったが、確認調査後、高速自動車道早期供用のため当面は暫定二車線部分に調査範囲を限定することが決定され、西部遺跡の本発掘調査面積は30,800m²（中世10,000m²+古代20,800m²）に修正された。

平成16年度本発掘調査：平成15年10月1日の東日本高速道路・県教委及び埋文事業団との協議（以下、「三者協議」とする）で、東日本高速道路が示した平成16年度の調査要望は膨大なものであった。しかし、この調査要望も「民営化」や「事業の見直し」など諸問題を抱えている東日本高速道路にあっては確定的なものではなかった。10月8日、県教委と埋文事業団は平成16年度の受託事業について協議を行った。そして、日東道建設が決定し要望どおりの調査量が提示された場合、現調査体制ではこれに対応できないことから、日東道建設に限って民間調査機関に全部委託するという方針が出された。翌年の1月8日、国土開発幹線自動車建設会議が終了し、日東道は東日本高速道路で建設することが可能になった旨が県教委に伝えられた。これを受けて2月20日に最終的な三者協議が開設され、西部遺跡は平成16年4月から本発掘調査することとなり、調査は埋文事業団職員の管理・監督のもと民間の調査機関に全面委託することとなった。調査範囲は工事工程に合せ遺跡南側の10,800m²（中世5,400m²+古代5,400m²）とし、残りは次年度以降の調査とした。

註) 日本海東北自動車道の事業は、日本道路公団の分割民営化により、平成17年10月1日に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれた。本文中では「東日本高速道路」と統一して表記する

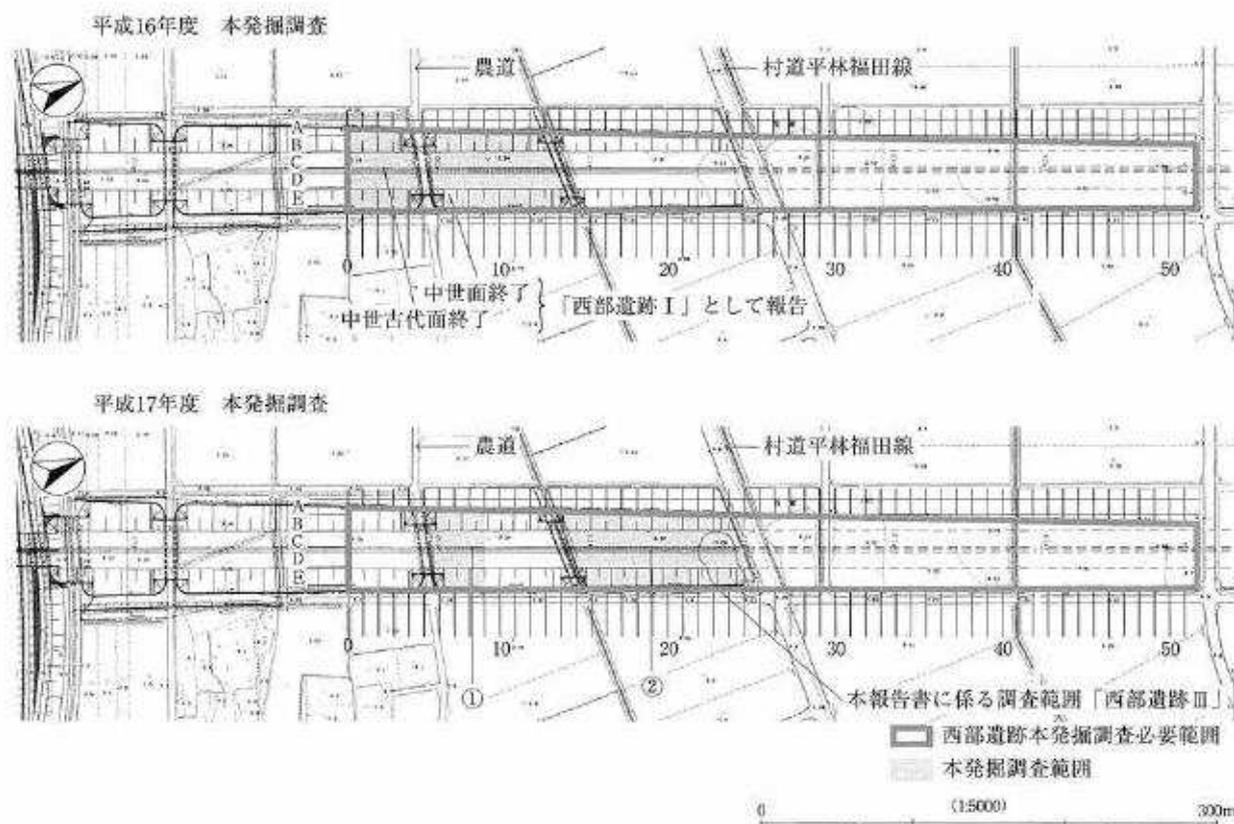
1 調査に至る経緯

本発掘調査は4月7日～12月22日に実施した。中世面が終了したのは8月で、その後、古代の遺跡内容を把握するためトレンチ調査を行った。その結果、古代の文化層が新たに複数枚検出され、当初計画した調査を終了させることができなくなった。

このトレンチ調査の結果を受けて遺跡の取り扱いについて三者協議が開かれ、平成16年度は調査対象全域の中世面と農道より南側の古代面を調査終了することとし、農道以北の古代面は次年度以降の調査とした。また、今回の調査範囲より北側の地区についても、古代の文化層の枚数やその内容を本発掘調査前に把握する必要から、平成16年10月5日～10月15日に確認調査を追加した。

平成17年度本発掘調査：平成17年度調査か所の協議は平成16年9月30日から開始され、平成17年2月17日の三者協議で決定された。調査は胎内市・荒川町・神林村内の9遺跡、面積約76,000m²である。

西部遺跡は、①16年度本発掘調査で終了できなかった農道下の中世面と農道以北の古代面、②村道平林福田線から南側が調査対象となった。調査面積が大きいことから①と②の範囲で独自の調査体制を組織し調査することとした。本書は②の範囲に関わる調査報告書である。



第1図 年度別本発掘調査範囲

2 調査と整理作業

A 確認調査

ここでは本書で報告する本発掘調査範囲に関わる平成13・16年度の確認調査の概要について記し、範囲外となるSTA412+50以北については割愛した。

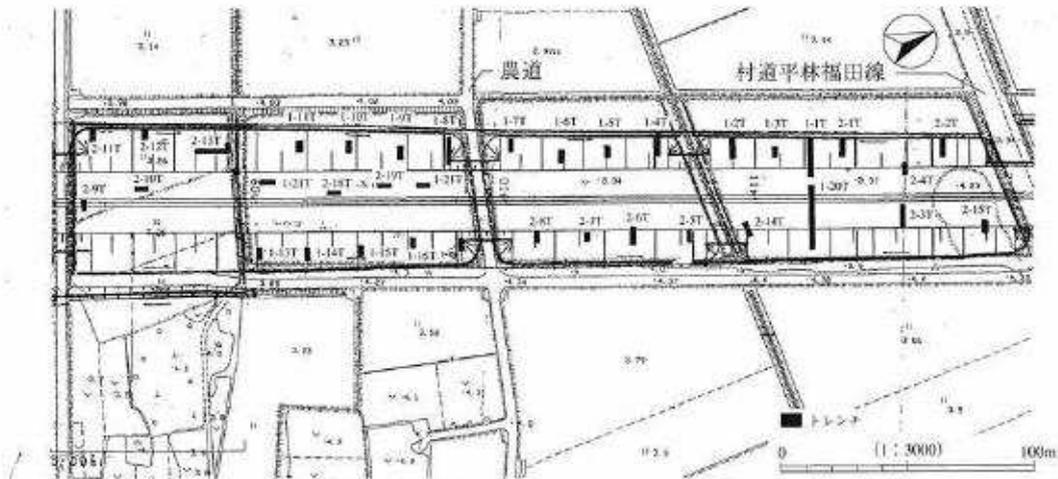
【平成13年度確認調査】(第2図)

調査期間：平成13年4月16～20日、23～26日(9日間)

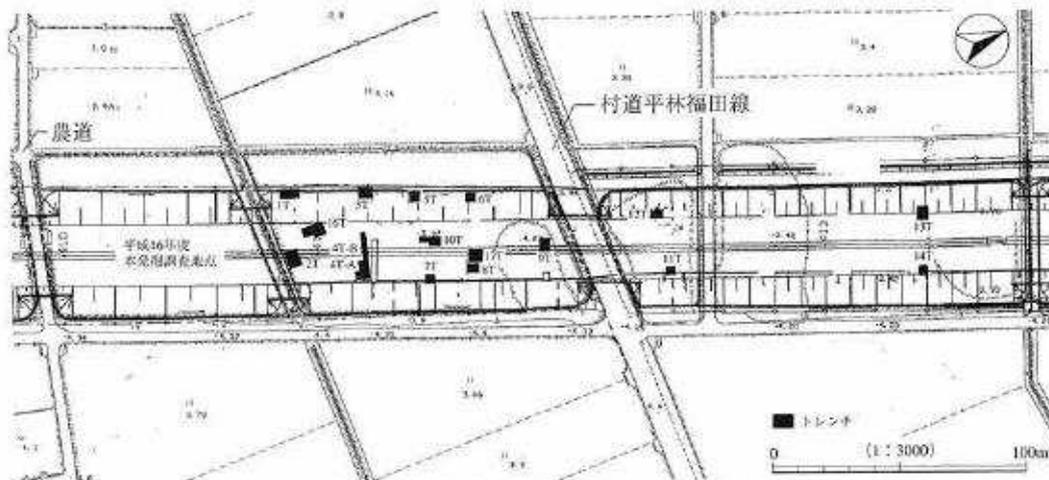
調査対象面積：19,000m²、実質調査面積：約520m²

調査対象地に任意に確認トレンチを設定し、重機(バックホー)および人力を使用して徐々に掘り下げ、遺構・遺物の検出に努めた。

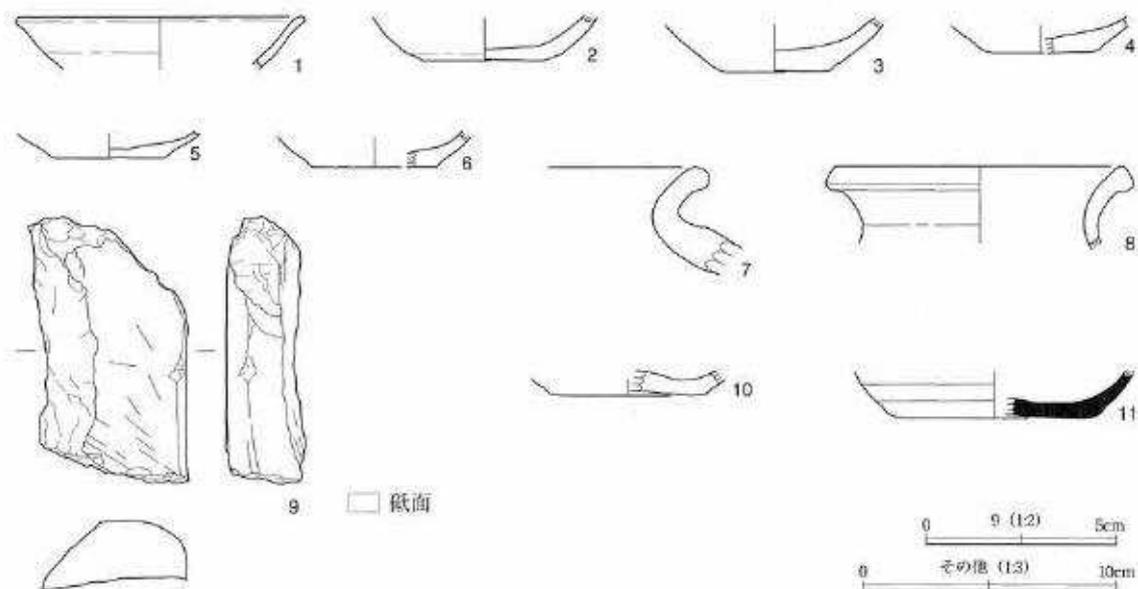
基本層序はⅠ層 耕作土、Ⅱ層 茶灰色シルト(中世遺物包含層)、Ⅲ-1層 黄灰色シルト、Ⅲ-2層 明青灰色シルト、Ⅳ層 暗青灰色粘質土、炭化物を多く含む(古代遺物包含層)、Ⅴ層 暗青灰色粘質土、Ⅵ層 暗灰色粘質土、腐植土層で、中世と古代の2枚の包含層が確認され、中世では1-1T(トレンチ)



第2図 確認トレンチ位置図(平成13年度)



第3図 確認トレンチ位置図(平成16年度)



第4図 確認調査出土遺物実測図

溝1条、1-20Tピット2基、溝6条、2-1Tピット2基、土坑1基、2-3T土坑2基、2-4Tピット1基、溝1条の遺構を検出し、遺物は1-1T近世陶磁器1・珠洲焼3・須恵器1、1-2T砥石?1、1-3T近世陶磁器1、2-1T近世陶磁器3・白磁?1・珠洲焼18、2-2T近世陶磁器1・砥石1、2-15T土師器2が出土した。上層(Ⅱ層)は珠洲焼が主体で、下層(Ⅳ層)は土師器を主に、須恵器・黒色土器が少量出土した。遺物の年代は9世紀末～10世紀が主体と考えられる。

今回の調査で、STA No 409 + 40より北側(村上側)の範囲で上下2枚の遺物包含層と地形的に南東側が高く、南西側に向って緩やかに低くなっていく様子が確認された。中世の包含層は南側や東側の一部が耕作により削平され、確認出来ない部分があるが、遺構・遺物はほぼ全範囲に広がっていると予想される。

古代の包含層は遺跡の東側半分が濃密で、西側が若干希薄になる。特にSTA No 409 + 80～STA No 411の範囲が、平安時代における遺跡の中心部と考えられる。

遺物(第4図)

1～6は土師器碗である。1は口縁部から体部上半の破片で、口縁部が外反している。2～6の底部のうち、明確に円柱状の突出を示すものは認められず、わずかに4が該当する。1・3～6は2-14Tから、2は1-20Tから出土している。

7・8は珠洲系の壺である。7はT種中壺A・B類の口頸部片である。8はR種A類またはB・C類の口頸部片である。7は2-1Tから、8は1-20Tから出土している。

9は調査区北西端の2-15Tから出土した凝灰岩製の砥石片である。

【平成16年度確認調査】(第3図)

調査期間：平成16年10月5日～15日(8日間)

調査対象面積：15,400m²、実質調査面積：345m²

調査は平成16年度本発掘調査で、新たに検出された古代の遺物包含層の有無およびその内容を把握するため、16年度本発掘調査範囲を除く西部遺跡全域(道路法線内)で行った。基本層序把握のための分層は平成16年度本発掘調査の成果に基づいて行った。その結果、地表面下約3mの堆積土はI層 暗褐色粘

トレンチNo.	層 序	出土遺物		トレンチNo.	層 序	出土遺物	
4	表土	陶磁器	1点	10	表土	陶磁器 礫石器	3点 1点
	V層	珠洲焼	6点		11	表土	陶磁器
5	V層	陶磁器 珠洲焼	2点 1点	13		表土	陶磁器 古銭 木製品
	VI層	土師器	2点		X層		成人像
6	V層	陶磁器 土師器	1点 1点		16	V層	陶磁器
7	Ⅷ層	土師器	11点	17	X・XI層	須恵器	2点
	IX・X層	土師器	4点		XII層	須恵器	2点
8	表土	陶磁器	2点	主な遺物の合計		珠洲焼8、土師器19、須恵器4	
9	V層	木製品?	1点				
	X・XI層	土師器	1点				

第1表 平成16年度確認調査出土遺物一覧

質土層、IV層 灰褐色粘土層 [中世の遺物包含層]、V層 黄色シルト質層 [中世の遺構確認面]、VI層 茶褐色土 炭化物を多量に含む [古代の遺物包含層]、Ⅶ層 黄色シルト質層、Ⅷ層 茶灰色土層 炭化物を多量に含む [古代の遺物包含層]、IX層 暗青灰色粘質土層 炭化物を多量に含む [古代の遺物包含層]、X層 暗青灰色粘質土層、XI層 暗青灰色粘質土層 砂を少量と炭化物を多量に含む [古代の遺物包含層]、XII層 青灰色砂質層 [遺物包含層]、XIII層 暗青灰色粘質土層 少量の炭化物を含む [遺物包含層]、XIV層 灰褐色粘質土層、XV層 青灰色粘土層、XVI層 褐色粘質土層 少量の植物遺体を含む、XⅦ層 暗褐色粘質土層 多量の植物遺体を含む、XⅧ層 淡褐色粘質土層 少量の植物遺体を含む、XIX層 青灰色粘土層、XX層 淡褐色粘土層に分層された。

遺構はV層上面で2T (トレンチ) 土坑1・溝1、4・8T土坑1、XII層前後で2T溝1、8・17Tで木道状の筒木を検出した。また、出土遺物は第1表に示したが古代の遺物はⅧ・IX・X・XI・XII層から出土し、古代の遺物包含層ないし生活面が複数枚存在することが推測された。

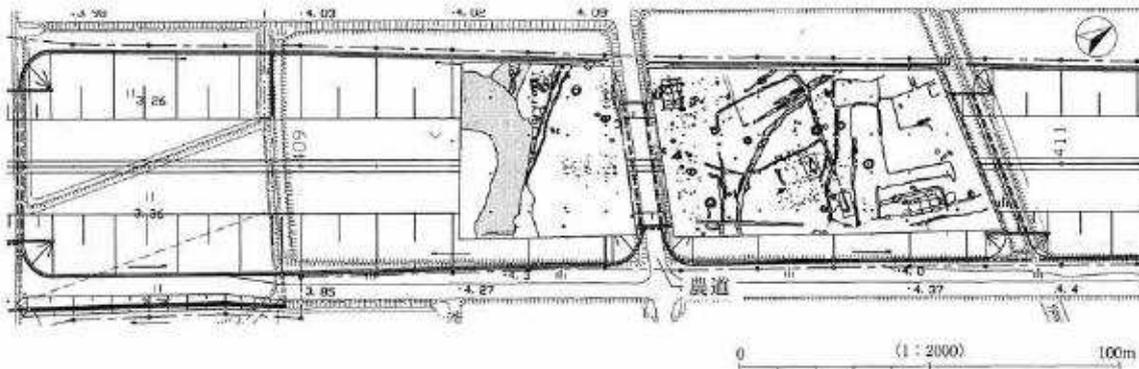
遺 物 (第4図)

10は調査区中央東寄り出土したロクロ土師器碗の底部片である。出土層位はトレンチ調査時点で「Ⅷ層の下」との注記があるので、本調査におけるIX・X層付近の出土と考えられる。11は調査区中央からやや北寄り出土した須恵器杯片である。出土層位は「XI層より上」との注記があるので、X・XI層付近の出土と考えられる。

B 本発掘調査

【平成16年度本発掘調査】

調査期間：平成16年4月7日～12月22日



第5図 平成16年度本発掘調査範囲 (中世面の遺構)

調査面積：10,800m²（上層5,400m²+下層5,400m²）

遺跡は荒川右岸の自然堤防上に立地し古代と中・近世の遺構・遺物が検出された。古代は農道より南側のみを調査し、Ⅸ層とⅧ層の2枚の遺物包含層を調査した。Ⅸ層は出土遺物から9世紀代と考えられ、土坑7基、溝9条、ピット5基を検出した。土坑は調査範囲の北寄りに散在し、北西から南東方向に走行する2本の溝は道路状遺構と考えられる。Ⅷ層の時期は10世紀前半で、土坑40基、ピット6基を検出した。土坑からは多量の土師器碗が出土し、分布は調査区の北東側に集中して土坑群を形成する。Ⅸ・Ⅷ層とも調査範囲が狭いため、遺跡の性格について明確にし得なかった。

中世の遺構はⅤ層上面で確認され、掘立柱建物5基、井戸41基、土坑60基、溝23条、ピット363基を検出した。遺物は珠洲焼を中心に常滑焼、古瀬戸、中国輸入陶磁器、石製品、木製品があり、中国輸入陶磁器も比較的多く出土している。時期的には出土遺物から12世紀中頃～後半、13世紀初頭前後～前半、15世紀前半～後半の3時期に大別でき、13世紀後半から14世紀にかけて遺跡が途絶える。これらの遺構・遺物のあり方から遺跡は集落跡と考えられる。遺跡の初期段階は小泉荘の現地支配に係わっていたと推測される越後城氏の隆盛期で、遺跡の途絶え始める13世紀頃は城氏の勢力も衰退した時期である。さらに15世紀以降は平林城主色部氏の一族である牛屋氏が支配したと考えられている。

近世は井戸2基、集石遺構2基、凹地遺構6基、畝状遺構（小溝）23基を検出し、出土遺物や井戸枠の年代測定から17世紀代と考えられる。この時期は凹地遺構（所謂「掘り込め田」に近似）・畝状遺構（小溝）といった遺構の存在から、調査範囲のほとんどは生産域の可能性が高い。また、井戸2基を検出した調査区南側には、その井戸近くに一字一石経や多字一石経を多量に含んだ集石遺構が存在し、地元牛屋に残る「ジョウガンジ」伝承も合せ、この遺構周辺を廃寺跡と推測している〔近江屋2005〕。

【平成17年度本発掘調査】

本発掘調査は平成17年4月12日～10月31日にかけて実施した。現地はまず、雨水対策としての暗渠設工事を準備工を含め4月18日～5月9日にかけて実施した。またこれに一部並行してバックホーによる表土除去作業を5月12日より開始し、6月1日に終了した。人力による掘削作業は5月16日から行い、遺跡の基本層序を把握するため確認トレンチの掘り下げから開始した。

調査はまず第1面と考えられるⅤ層面において遺構の確認作業を開始した。北東より確認された凹地遺構をはじめ、多数の溝、ピットを検出した。また中央西寄りからは集中した珠洲の出土みられたほか、中・近世の遺物がⅣ・Ⅴ層より出土した。第1面の調査終了後、6月23日に航空写真撮影を実施した。

6月24日から第2面と思われるⅧ層面における遺構確認作業を開始し、その結果、遺構は調査区の南側から東西に延びる溝等が複数確認され、Ⅵ層からわずかながら中世と思われる遺物が出土している。

これ以降古代の調査に入り、第3面の調査を8月5日から開始した。遺構確認面をⅨ・Ⅹ層とし調査区南側を中心に多数の溝、ピットを検出し、また古代遺物包含層であるⅧ層からは土師器を主体とする多量の遺物の出土があった。その状況は南北にそれぞれ2つの分布を呈するものであり、調査区の中央部からはほとんど出土がみられない傾向が窺える。航空写真撮影を9月14日に実施し第3面の調査を終了した。

9月15日から第4面の調査を開始し、Ⅹ層を除去した段階で遺構の確認を行った。その結果、やはり南側から、溝が2条、土坑2基が検出され、調査区の中央部以北からの遺構検出はなかった。またこれに並行して下層の確認調査を行ったところ、調査区北側に遺構の一部が確認されたため、適宜拡張した。その結果、木杭が配列されるものが2基（SX4001・4002）、Ⅷ層面から確認された。このうちSX4001は亀甲状を呈するものである。またⅩⅦ層を確認面として自然流路が1条確認された。これらが位置する調査区北

側を中心に、航空写真撮影を10月19日に実施し最下層の調査を終了した。

その後、10月27日に県教委の調査終了確認・東日本高速道路への引渡しを終え、残務整理、後片付け、器材・プレハブの撤収を行い、10月31日をもって平成17年度の現地調査を終了した。

C 整理作業

遺構図面の基礎的整理及び出土遺物の洗浄・注記・復元作業は、調査現場事務所で現地調査と並行して行った。遺構の図版編集、原稿執筆及び実測・トレース・写真撮影等は平成17年11月から平成18年3月にかけて東京都府中市の大成エンジニアリング株式会社府中事務所で実施した。

3 体 制

確認調査と本調査および整理作業は、以下のような体制で行った。

【平成13年度確認調査】

調査期間 平成13年4月16日～4月26日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 麟一）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越 麟一）

管 理 須田 益輝（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長）

長谷川司郎（同 総務課長）

岡本 郁栄（同 調査課長）

庶 務 椎谷 久雄（同 総務課主任）

調査指導 寺崎 裕助（同 調査課公団担当課長代理）

調査担当 小田由美子（同 調査課主任調査員）

石川 智紀（同 調査課主任調査員）

調 査 員 小林 芳宏（同 調査課主任調査員）

栗林 宣明（同 調査課主任調査員）

加藤 義隆（同 調査課主任調査員）

内藤 真一（同 調査課主任調査員）

鈴木 秀人（同 調査課主任調査員）

【平成16年度確認調査】

調査期間 平成16年10月5日～10月6日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 麟一）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越 麟一）

管 理 黒井 幸一（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長）

長谷川二三夫（同 総務課長）

藤巻 正信（同 調査課長）

庶 務 高野 正司（同 総務課班長）

調査指導 山本 肇（同 調査課試掘確認担当課長代理）

調査担当 滝沢 規朗（同 調査課班長）

調 査 員 片岡 千恵（同 調査課嘱託員）

【平成16年度本発掘調査】

報告書「西部遺跡Ⅰ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第148集を参照

【平成17年度本発掘調査・整理作業】

調査期間 平成17年4月1日～平成17年10月27日

整理期間 平成17年10月28日～平成18年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 武藤 克己）

管 理 波多 俊二（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団専務理事・事務局長）

長谷川二三夫（同 総務課長）

藤巻 正信（同 調査課長）

監 督 鈴木 俊成（同 調査課日東道担当課長代理）

辻 範朗（同 調査課主任調査員）

庶 務 長谷川 靖（同 総務課班長）

調査組織 大成エンジニアリング株式会社

現場代理人 渡辺 宏司（大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部工務課長）

調 査 担 当 吉田 寿（同 調査課主任調査員）

調 査 員 作田 一耕（同 調査課主任調査員）

伊藤 俊治（同 調査課課長代理）

小林 貴郎（同 調査課調査員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 はじめに

本来、地理的環境と並んで歴史的な環境の概観を述べるところだが、西部遺跡の発掘調査では既に昨年度の報告書であらましを述べている〔近江屋2005〕。ここでは本遺跡の理解への一助として主に遺跡周辺の自然地形に焦点を当てて述べることにする。

2 地理的環境と自然立地

遺跡の所在する神林村は、北側を浦田山丘陵で村上市と、南側は荒川で荒川町、そして東側は低位山地を挟んで関川村とそれぞれ境を接し、西側は日本海に面している。

遺跡の東方にはJR羽越本線と国道7号線が南北に走っており、県都新潟市と村上市・神林村など下越地方北部の市町村とを結んでいる。国道7号線沿いには近年「道の駅神林 穂波の里」が建設され、多数の利用者を呼び、立ち並ぶロードサイドショップを中心に賑わいを見せている一方で、そこから一歩離れた本遺跡周辺では伝統的で閑静な農村風景が展開している。

遺跡は広義の新潟平野の北東部に立地している。新潟平野は、東側を櫛形山脈がその一部をなす新発田-小出構造線に、南側を柏崎-千葉構造線に挟まれた大きな地溝が、沖積低地化したものである。海岸沿いには最多で10列からなる長大な砂丘列（新潟砂丘）が発達し、日本海に注ごうとする河川の流下を阻止している。このため各河川はお互いに干渉しあい、いたるところに大小無数の潟湖（磐舟潟、田紫雲寺潟（塩津潟）、福島潟など）を生じさせている。また平野は全体に勾配の差が乏しいうえに日本海の潮汐変動が小さいために排水不良が生じ、ほぼ全域が低湿地帯となっている〔岡安2005〕（第6図）。

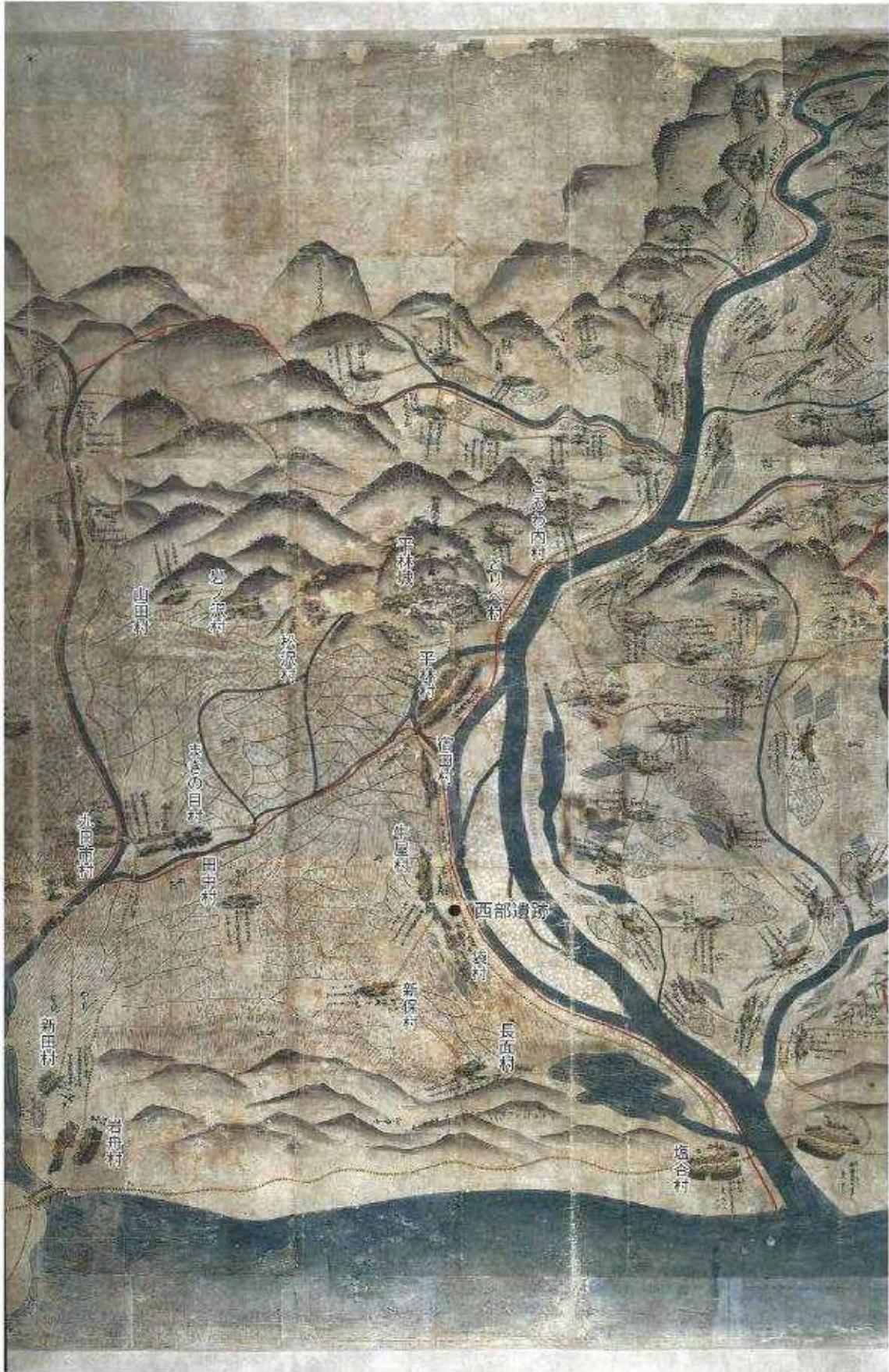
西部遺跡の南側を流れる荒川は、山形県の小国盆地にて置賜地方の流れを集めて飯豊連峰・朝日連峰の山裾を下り、関川村の盆地を経て神林村小岩内・川部付近で新潟平野に流れ出す一級河川である。荒川は新潟平野内において、小岩内地区を扇頂として神林村平林から荒川町羽ヶ榎を扇尖に、神林村牛屋から荒川町金屋にかけてを扇端とする扇状地を作り出しており、南端の荒川町坂町付近で櫛形山脈から流れ出た胎内川が形成する広大な扇状地と接している（第6図 この図は50mメッシュでとられた標高値を立体的に復元したものである）。

西部遺跡はこの荒川扇状地とは指呼の位置の低湿地に所在している。さらに航空写真からは、荒川右岸の自然堤防上に本遺跡が立地していることがうかがえる（図版24）。この自然堤防は言うまでもなく荒川のもたらした土砂によって形成されたものである。

さて、現在の荒川は神林村塩谷付近にて砂丘を断ち割って日本海に注いでいるが、前述のとおり、過去においてはこの砂丘によって流れが阻まれ、現在の村上市八日市から神林村下助淵周辺に広がっていた磐舟潟に流れ込んでいた可能性が高い。金子拓男は、現荒川河口について「河口部の砂丘規模は、幅約1500m、高さは最高部で30mもある大砂丘である。（中略）本河川も人工による放水路と考えざるを得ないのである。」と阿賀野川河口の例とともに述べ、さらに日本書紀にある大化元年の「越国奏上」の分析



第6図 遺跡周辺の地勢概念図 (「カシミール3D」により作成)



第7図 瀬波郡絵図(部分 一部加筆)。(米沢市上杉博物館所蔵「新発田郡絵図」)

から、現在の流路であるこの人工放水路建設が大化4(648)年の磐舟瀬造営に伴う干拓開田事業の一環であるとの可能性を示した〔金子1996〕。

確かに、慶長2(1597)年作成の「瀬波郡絵図」(第5図)では、現川部地区(絵図中では「とりべ村」)から新潟平野に流れ出た荒川は、すでに現河口へ続く直線的な流れが本流として描かれている一方で、扇状部の「宿田村」で分流する流れが「田中村」「九日市村」の付近を流れて旧磐舟瀬に流れ込み、さらに現在の石川を通じて日本海に注いでいる様子が描かれている。

現在でも神林村小岩内地区にある磐梯朝日大橋の堰(およそ前述の瀬波郡絵図における分流地点に比定し得よう)で荒川本流から分流した用水路は平林地区でさらに細かく分かれ、一部は堀川として牛屋地区の北を経て塩谷地区の現河口で荒川と合流し、また一部は関根川として村上市八日市付近の旧磐舟瀬を経て、石川を介して岩船港に注いでいる。

図版24の航空写真からは、山地から流れ出した荒川が国道7号線に隣接する平林集落付近の堤防により不自然にその方向をかえている様子がうかがわれる。この写真を見て荒川の「自然な流れ」を想像するならば、それはやはり「瀬波郡絵図」が分流として描いている流れそのものであろう。

以上の論に立つならば西部遺跡をのせている自然堤防は、7世紀中葉以降の「荒川放水路」が新たにもたらした土砂に由来するものと単純に考えることも出来る。金子も「荒川は氾濫原内に古代の遺跡がなく、中世段階の遺跡から存在することが確認されている。」と述べており、この可能性を強く示唆している。

しかし、過去2年間にわたる西部遺跡の発掘調査の結果は、凡そ7世紀前半に比定される第Ⅻ層以下ⅩⅦ層までの標高値がおおよそ現地形に沿ったものであること(第10図)、または7世紀中葉にまで遺跡の時期が遡ることを明らかにした。これは遺跡をのせる自然堤防が7世紀以前には既に出来上がっていた可能性を示している。

つまり「荒川放水路」以前にも、たとえ本流ではないにせよ、現在の荒川と方向を同じくする流れの存在が想定できるのであって、この地の古代以前の遺跡の存在の可能性を再提示するものといえよう。

図版24の航空写真をみると、本遺跡がのっている自然堤防と同じ由来、つまり荒川がもたらした土砂によってできた微高地が広範囲に広がっていることを視覚的に捉えることが出来る。すなわち荒川左岸の①荒川町金屋・鳥屋・中倉・名割・大津・羽ヶ榎・荒島の微高地、②荒川右岸の福田・牛屋・宿田・平林そして川部・小岩内の微高地、さらに③南田中・牧目・九日市・新飯田・今宿の微高地である。

ここに第6図の周辺の遺跡分布図を重ねてみると、①で挙げた微高地には49から72の遺跡が、②で挙げた微高地には本遺跡も含めて2・11・12・18・19・20・27の遺跡が、③で挙げた微高地には13～16、22、73～79の遺跡が確認されている。

発掘調査が十分に進んでいない状況では、現況で往古の様子を推し量ることは難しい。これは河川洪水による厚い堆積土と近世以降の水田開発事業などにより、往古の微地形が覆い隠されてしまったことによる。よってここで扱った遺跡が立地しているような沖積地においては、現在遺跡として認知されていない地点においても新たに遺跡が発見される可能性が高く、今回報告する西部遺跡の全容も、周辺の遺跡の発見や調査の進展という過程のなかでこそ一層明らかにされるはずである。ここでは自然立地という側面から本遺跡を概観し、あわせて本遺跡と同様な立地環境にある可能性の高い遺跡を指摘した。同一の立地条件というフィルターを通すことで、これらの遺跡についての相互比較と集成・研究は、荒川流路の変遷など新潟平野の地形発達史に寄与することもでき、さらにその成果はより大きな単位での、往時の土地利用の復元を可能にするであろう。



国土地理院 平成15年9月1日発行5万分の1地形図「中東」、平成10年2月1日発行5万分の1地形図「村上」を合成し、縮尺を6万分の1に変更の上、加筆。

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代						
1	酒部	平・中世	32	中野	中	23	平谷松	平	34	田園A	縄・平	45	小丸山	中	56	宮分	平	67	田島	平	78	栗田	中
2	高塚	中	13	川崎1	中	24	御所赤谷目	縄・平	35	松原野敷	平	46	下谷地	中	57	石橋	中	68	宮林	古・平	79	家の地	平
3	月形	中	14	川崎2	中	25	坂下	平	36	御池	縄・古・中	47	平林	中	58	石橋A	古・平	69	御原	平・中	80	宮の地	平
4	流古屋敷	平	15	山田中	中	26	山田赤谷	平	37	松原	中	48	若尾山	中	59	金田小谷地	平	70	宮田	中	81	宮崎	中
5	古屋敷	平	16	坂橋	平	27	河野赤谷	中	38	古四天王寺	中	49	坂敷	中	60	小谷地A	平	71	春木山	中	82	宮崎	中
6	御山五輪	中	17	衣田	縄・古・中	28	流古屋敷	中	39	古四天王寺	中	50	行原	古・平	61	名原	古・平	72	虎島	中	83	宮崎	中
7	長松石仏	中	18	道下	平	29	流古	平・中世	40	寺田	縄・古・中	51	寺田	古・平	62	名原	古・平	73	山王	平	84	御方塚	中
8	正徳院	中	19	道下	中	30	吉野寺石仏	中	41	下谷地	中	52	下谷地	中	63	名原	平	74	高田	中	85	寺田	中
9	上目市	中	20	家ノ根	中	31	大岡	中	42	下谷地	中	53	本宮	古・平	64	御田	平	75	宮原	平	86	宮の地	平
10	長三郎	中	21	大宮	中	32	御田	縄・古・中	43	田園	中	54	馬場	中	65	田園	平	76	千手	平・中	87	御池	古・中
11	牛屋敷	中	22	中野	中	33	流古	縄・平	44	田園	平	55	第ノ越	中	66	坂野	平	77	坂田	古・平	88	坂田	平

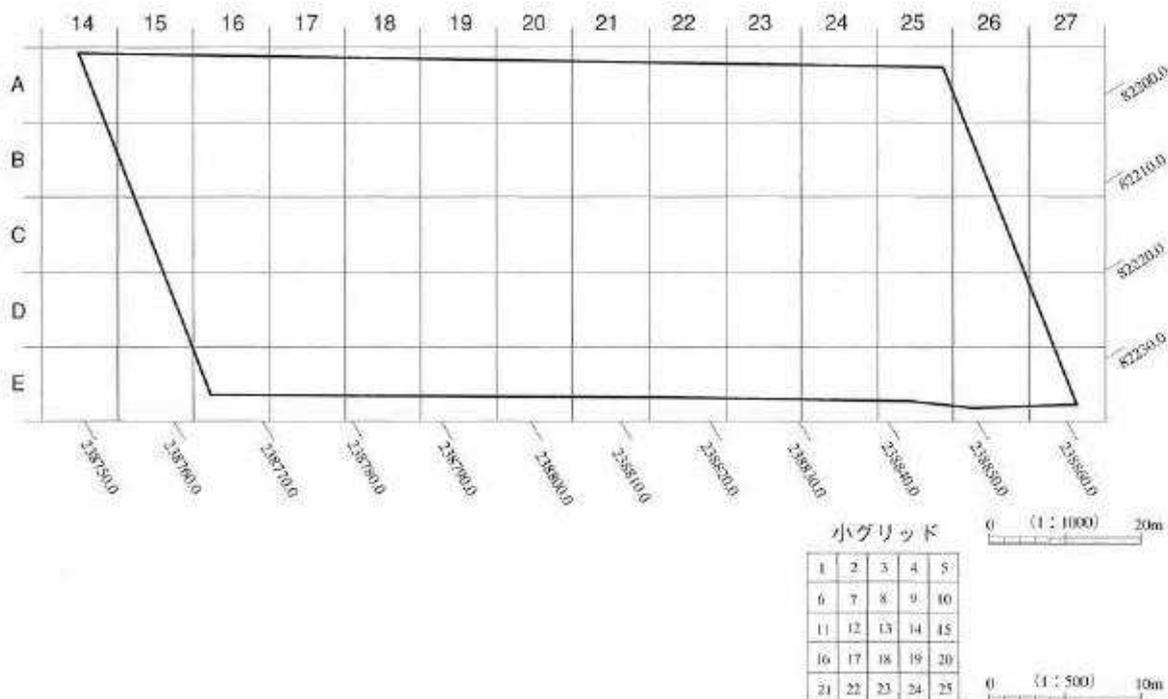
時代：縄（縄文時代）、古（古墳時代）、中（奈良時代）、平（平安時代）、中（中世）、近（近世）

第8図 周辺の古代・中世遺跡一覧

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定

グリッドは調査区の現況に合わせて設定した。設定にあたっては、高速道路法線杭 STA410+80 (X=238764.058、Y=82152.185) と STA412+00 (X=238866.415、Y=82214.820) の2点をもとに、グリッドの主軸を定めた。本報告書で示す北は国家座標第Ⅳ系のX軸方向を指し、グリッドの主軸は真北から約31度27分50秒東偏する。



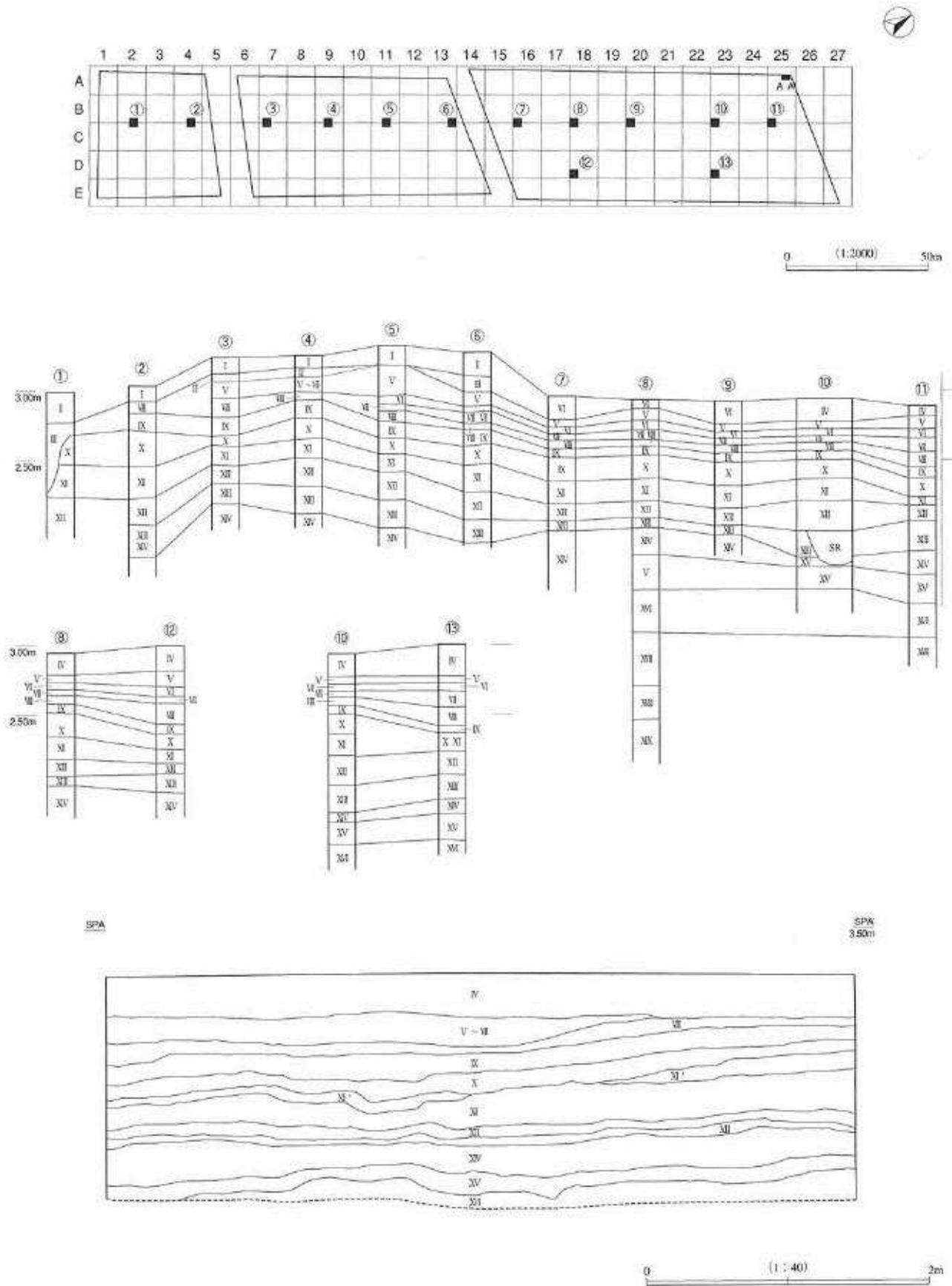
第9図 グリッド設定図

10m方眼を大グリッドとし、南北方向は南から算用数字を付し、東西方向は西からアルファベットを付して、「14A」のように組み合わせで大グリッド名とした。大グリッド杭は南西隅に打設した。なお、グリッド主軸の2点はそれぞれ15D杭、27D杭に対応する。また本調査区のグリッド名は、南に隣接し同一遺跡である平成16年度調査のものを踏襲しているため、「14A」が最南端のグリッドとなる。

大グリッドを2m方眼に25分割したものを小グリッドとし、1～25の算用数字を付し、大グリッド表示に続けて「15B20」のように表記した。

2 基本層序

西部遺跡は幾度かの荒川の氾濫により複雑な堆積状態を示し、そのため地山面の様相は一様ではない。また、地山より上位についても小河川の埋没や地形改変を受けて、場所によっては異なる堆積状態を示し



第10図 基本土層断面図

2 基本層序

ているが、概ね各層の層厚は北側では厚く、南側では薄い傾向がみられる。

なお今回の調査においては、平成16年度の確認調査によって示された基本層序を踏襲することを基本としているが、広範囲の調査区にあって、場所によっては対応しない箇所もあるため、以下に調査結果を踏まえた基本層序を示す。

- I層 黒褐色土 (25Y3/2) 縮り全く無い。表土。近年の耕地整理事業における客土である。
- IV層 黄褐色シルト (25Y5/3) 中世の遺物包含層であり、V層面で検出される遺構の覆土となる。
- V層 明黄褐色シルト (25Y6/6) 黄色砂粒を含み、縮りが強い。中世の遺物包含層・遺構確認面。
- VI層 黄褐色土 (25Y5/4) 炭化物を多量に含む。中世の遺物包含層。
- VII層 におい黄色シルト (25Y6/4) 炭化物を微量に含む、縮りが強い。無遺物層となる。
- VIII層 黄灰色土 (25Y4/1) 炭化物を多量に含む。中世の遺構確認面。10世紀前～中葉の遺物包含層、調査区北側では層厚が増え、さらに3層に細分可能となる。
- a) VII層 炭化物を多量に含む、やや軟弱である。
 - b) VIII層 炭化物を含まないという特徴があり、上下層間にあり層厚が小さい。
 - c) VII層 炭化物を多量に含む、aとはほぼ同質であるが、やや縮りがある。VIII層中では遺物包含量が顕著である。
- IX層 灰色粘土 (5Y5/1) 炭化物を多量に含む。*
- X層 暗青灰色粘土 (10BG4/1) *
- XI層 暗青灰色粘土 (10BG4/1) 砂を少量と炭化物を多量に含む。*
- XII層 青灰色砂質土 (10BG5/1) 8世紀末～9世紀前葉の遺物包含層か。本遺跡において層序の相対的基準となりうる特徴的な砂質層である。
- XIII層 青灰色砂質土 (10BG5/1) 下層の漸移的傾向にある。
- XIV層 暗青灰色粘土 (10BG4/1) 少量の炭化物を含む。AMS法により7世紀の遺構が確認されたが、時期判断できる遺物の出土は皆無であった。
- XV層 オリブ灰色粘土 (2.5GY5/1)
- XVI層 青灰色粘土 (10BG5/1) 上下層に比べ混入物が極めて少ないので、目視的に均質な特徴を持つ。
- XVII層 オリブ灰色粘土 (2.5GY5/1) 少量の植物遺体を含む
- XVIII層 暗オリブ灰色粘土 (2.5GY4/1) 多量の植物遺体を含む

* II～III層については確認されなかった。

* IX～XI層の時期については判然としないが9世紀後半と考えておきたい。

* 色調の表現は「新版標準土色粘」(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1998年度版)に照らし、最も近似した色相を表示した。このため前出の確認調査や昨年度の調査[近江屋2005]の表記とは一部異なるが、層位そのものはこれらのものと合致する。

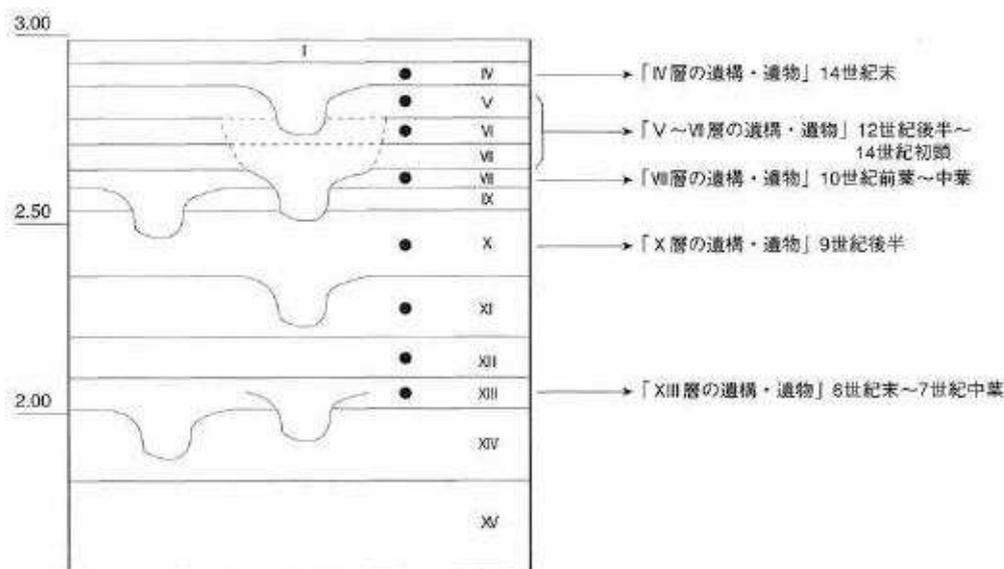
第IV章 調査の成果

1 遺構概要

ここでは遺構概要として、本調査区における基本層序の説明を軸に各遺構確認面のあらましを述べることとする（基本層序は第10図）。なお、本報告における基本層序は、南隣地区の遺跡調査報告書である「西部遺跡Ⅰ」〔近江屋2005〕に準拠しており、調査の結果もこれに矛盾しない。

遺構の調査はV層を第一の遺構確認面として開始した。土層観察によるとIV層は各地点によりその厚さは均一ではなく、一部ではすでにIV層が失われV層が露出している箇所もある一方で、IV層の直上に約20cm厚さで客土が堆積している箇所もあった。これは耕地整理事業の中で地均しを行った結果とも考えられる。調査の結果、遺物が出土した層は、IV～VI・VII・X～XII層で、遺構はV・VIII・IX・X・XI・XIV層の上面とXIII層中から検出された。

IV層の遺構 V層上面を確認面として検出された遺構である。検出された遺構は土坑1基、ピット13基、溝状遺構9条、性格不明遺構1基である。遺構の掘り込み状況について基本層序との関係で捉えることが出来たものはSD0014とSD0015（図版17）で、締りの無い暗灰褐色土（基本層序IV層相当）を覆土としている。このほかの遺構については明確な基本層序との関係は不明であるが、ほとんどのものが同質の覆土を有していることから、これらの同時期性を認めた。このうち、ピットは14Aグリッド付近に集中する群と20Aグリッド付近に集中する群、ならびに19Dグリッド付近に集中する群といったように偏在する傾向が特徴である。現地調査時には掘立柱建物の可能性も考慮したものの、覆土は全て単層であり柱痕を確認できなかったことからピットとして取り扱ったものである。溝状遺構は南北方向に軸を持つものと東西方向に軸をもつものに大別される。これらの遺構からは遺物は出土しないが、IV層出土の遺物から凡そ14世紀末の年代観を与えたい。



第11図 遺物出土層および遺構検出面（●は遺物出土層）

2 遺構各説

V～VII層の遺構 VII層上面を確認面として検出された遺構である。検出された遺構は土坑5基、ピット10基、溝状遺構5条である。遺構の掘り込み状況について基本層序との関係で捉えることが出来たのはSD1003・1004・1005(図版12)で、これらは締りのある浅黄色シルト(基本層序VII層相当)を覆土としていた。このほかの遺構については明確な基本層序との関係は不明であるが、ほとんどのものが同質の覆土を有しており、かつ上層における遺構精査では確認されなかったことから、その遺構覆土の由来をV～VII層に求めた。V・VI層からは珠洲系陶器等(12世紀後半)が出土しているほか、V層からは13世後半～14世紀初頭の青磁碗も出土している。VII層からの出土遺物は無い。直下のVIII層から10世紀前葉～中葉の遺物が出土していることから考えると、古代から中世の画期はVI層からVIII層の間に想定されるが、その特定は困難である。ここでは、「V～VII層の遺構」として取り扱った遺構の時期を中世(12世紀後半～14世紀初頭)と考えておきたい。

VIII層の遺構 IX層上面を確認面として検出された遺構である。検出された遺構はピット2基、溝状遺構7条である。遺構の掘り込み状況について基本層序との関係で捉えることが出来たものはSD2003(図版8)で、これらは締りの良い黒褐色土(基本層序VIII層相当)を覆土としている。このほかの遺構については明確な基本層序との関係は不明であるが、ほとんどのものが同質の覆土を有しており、かつ上層における遺構精査では確認されなかったことから、その遺構覆土の由来をVIII層に求めた。遺構から出土した遺物は無いものの、VIII層からは10世紀前～中葉のロクロ土師器が出土している。すなわち本層以下が確実な古代層であると認識される。

X層の遺構 XI層上面を確認面として検出された遺構である。検出された遺構は土坑2基、溝状遺構2条である。遺構の掘り込み状況について基本層序との関係で捉えることが出来たものはないが、締りの良い灰色土(基本層序X層相当)を覆土としている点で共通しており、これらの同時期性を認めた。X層からは9世紀後半を指標する須恵器が出土している。

XII層の遺構 XIV層上面を確認面とした遺構(a)である自然流路1条と、XII層中位を確認面とした遺構(b)である杭列2基がある。遺構(b)はXII層を5cm程掘り下げた所で確認されたもので、遺構(a)はXII層を完全に除去した後に確認されたものである。このように検出面の高低差はあるが、遺構の掘り込み面はいずれもXII層の中に収まるものと考えられる。また杭列2基の杭材に対しては放射性炭素年代測定では6世紀末～7世紀中葉という時期を得た。ちなみにXI層からは9世紀後半と考えられる土師器が、XII層からは8世紀末～9世紀前葉を指標する須恵器がそれぞれ出土している。

遺構の掘り込み状況について基本層序との関係で捉えることが出来たものはSX4001(図版3)、SR4003(図版2)である。

以上に述べたとおり、調査対象はIV層からXII層であった。以下、青灰色粘土層のXV層を経て、所謂「ガツボ層」であるXVI層～XIII層が標高1.50m～0.50mにかけて存在する。

2 遺構各説

A XII層の遺構(a)

流路跡

SR4003(図版1・3・18・26)

調査区の北部、23～24グリッドラインにかけて調査区を横断している流路跡である。N-34.9°-W

の方向に走る。土層観察によると流路の覆土上方にはXII層が堆積しており、XI層上面で落ち込みが確認される。堆積土はXII層を主体とする締りの無い茶褐色粘土である。堆積状況はA・Cセクションでレンズ状に、Bセクションでは不整合な堆積を見せる。これらは本遺構の堆積（埋没）過程が一様でなかったことを示している。すなわち、流水の影響を受けた結果としてこの不整合な堆積の存在を捉えたい。後述する多量の流木の存在がその証左となる。

流路底の標高値は北から、Aセクションでは1.68m、Bセクションでは1.50m、Cセクションでは1.96mを測り（図版2）、凹凸がみられ一定ではないものの、南東から北西へ向かい低くなっていく。CセクションからAセクションにかけては0.28mの高低差で、これは1.64m/100mの勾配を有する計算になる。

流路内には流木が多数検出された。確認調査時には「木道」の可能性も考えられたが、木材に加工痕は確認できず、ここでは自然流木として報告する。

出土遺物は土師器の甕が堆積土第2層から出土しているほか、加工痕を持つ木製品が出土している（3・4）。ただし、これらも流木同様に上手から漂着したものと考えられ、その使用主体者を調査区内に求めることは出来ない。流木を対象に放射性炭素年代測定を行った結果、AD610（±40）の値を得た（第V章）。

断面は凹凸が見られ、平坦ではない底面から壁は緩やかに弧状に立ち上がっている。堆積土からは昆虫遺体のほか、植物遺体としてヒョウタン・エゴノキ・クルミの種実が検出された。

B 第XII層の遺構 (b)

杭列跡

SX4001（図版1・3・27）

調査区の北部、26C・26Dグリッドに所在する杭列である。Gセクションによると杭はXII層中位から打ち込まれている。8本の杭が六角形（亀甲形）の平面を構成する。長軸はN-11.5°-Wの方向に向き、各杭間の外側を結んだ面積は8.078m²を測る。杭間寸法は⑧～⑦が1.45m、⑦～⑥が1.35m、⑥～⑤が1.12m、⑤～④が1.32m、④～③が1.15m、③～②が1.15m、②～①が0.94m、⑧～①が1.69mではほぼ等間隔に配されている。①と⑤の間に想定された中間の杭は検出されず、地床炉などの施設も確認されない。

杭は丸材を用いており、先端を削って尖らせている。この先端加工部の長さはそれぞれ均一ではなく、ここから単に尖らせるだけで良しとする意図がうかがわれ、粗い調整加工であるといえよう。杭の残存長は50～80cm前後で、径は10～15cmである。

⑧は隣の樹根の侵食により一部が破壊されたように見受けられる。②も杭の一部がからくも残存しているものと捉えたが、これには先の樹根の侵食は無く、腐食による破壊と考えられるがその痕跡は土層観察では確認できなかった。あるいは往時の構造上の理由があるのかもしれないが詳細は不明である。

ほとんどの杭は垂直方向に正位をほぼ保ちながら打ち込まれているが、南端部に位置する⑤（36.6°）と④（25.0°）は傾いたまま打ち込まれている。周囲の土層が乱れている痕跡も無く、当初から意図的になされたものと捉えた。

打ち込みの深度は北端部に位置する⑧と⑦がXI層までで、その他はXII層まで達していた。

杭材として数種の樹種が用いられており、付近で入手可能な木材を、樹種に関係なく利用した可能性が考えられている。また杭材を対象に放射性炭素年代測定を行い、AD640（±40）の値を得た（第V章）。

2 遺構各説

SX4002 (図版1・3・27)

調査区の北部、24Bグリッドに所在する杭列である。5本の杭が平行四辺形の平面を構成する。

XV層上面で遺構確認をした際に検出された。Cセクションを見るとXV層より杭が打ち込まれているようにも見られるが、詳細は不明である。長軸はN-40.0°-Wの方向に向き、各杭間の外側を結んだ面積は3.329m²を測る。杭間寸法は①～②が0.73m、②～③が0.91m、③～④が1.9m、④～⑤が1.63m、⑤～①が1.86mである。①～③の間に②があるように⑤～④の間に杭の存在を想定したが確認できなかった。(①～②と②～③の距離の和(1.63m)と④～⑤の距離(1.63m))また①～⑤と③～④のそれぞれの間にも杭の存在は確認できなかった。杭で囲まれた内側には地床炉などの施設も確認されない。

杭は丸材を用いており、先端を削って尖らせている。SX4001の杭と同様に、この先端の加工調整は粗いものである。

打ち込みの深度は一番大きい①のみがXV層まで達しており、ほかの杭の打ち込みは浅く、遺構の端部に位置する③④⑤はXV層上面でとまっており、さらに唯一の中間杭である②にいたってはXV層上面までにはしかいたらない。

本遺構の杭を対象に放射性炭素年代測定を行い、AD590(±40)の値を得た(第V章)。

C 第X層の遺構

土 坑

SK3001 (図版4・5・28)

調査区の南方15Cグリッドに所在する。覆土はX層を主体とする締りのある灰黄色土である。堆積状況はレンズ状で、自然堆積により埋没したようだ。断面は凡そ平坦な底面から急斜度の立ち上がりをみせる。覆土最下層から土師器の椀が一点出土した(21)。

SK3002 (図版4・5・28)

調査区の南方15Bグリッドに所在する。SK3001と同様に、覆土はX層を主体とする締りのある灰黄色土である。堆積状況はレンズ状で、自然堆積により埋没したようだ。断面は平坦な底面から急斜度の立ち上がりをみせる。出土遺物は無い。

溝状遺構

SD3003 (図版4・5・28)

調査区の南方17C・17Dグリッドに所在する。東西方向に長軸をもつ。覆土はX層を主体とする締りのあるオリーブ灰色土の単層である。

底部は東端から西端に向かって約10cm低くなっていく。断面は凡そ平坦な底面から急斜度の立ち上がりをみせる。出土遺物は無い。

SD3004 (図版4・5・28)

調査区の南方17A・17Bグリッドに所在する。東西に長軸をもつ。覆土はSD3003同様に締りのあるオリーブ灰色土の単層である。

底部は東端から西端に向かって約7cm低くなっていく。断面は凡そ平坦な底面から急斜度の立ち上がりをみせる。出土遺物は無い。本遺構とSD3003は、平面形状の特徴や覆土が同質なことから、本来は同一の遺構である可能性がある。

D 第Ⅷ層の遺構

ピット

P2002・2009 (図版6・8・29)

P2002は22Aに、P2009は17Aグリッドに所在する。

Ⅷ層上面の遺構確認作業時には確認されず、Ⅸ層上面で行った遺構確認の際に検出された、という理由でここで取り扱う。出土遺物も無い。

平面が楕円形のP2009の断面は上端に対して底面が狭く、壁は急斜度の立ち上がりを見せる。平面が不整形のP2002の断面は安定しない底面から壁は急斜度の立ち上がりを見せる。

P2009はほかの確認面で検出したピットとは異なり、単独で検出されており、木の根の痕跡である可能性も考えられる。一方でP2002は、調査区の中央を南北に貫く谷地形(詳細は第Ⅵ章)に臨む地形の変化点に位置しており、ここでは用途不明ながら人為的可能性が高い遺構として報告する。

溝状遺構

SD2001 (図版6・7・8・29・30)

21Bと22Bグリッドの境に所在する。東西に長軸をもつ。現地調査時の都合で本遺構の東西端に試掘溝を設定したため、これらに壊されている。Bセクションにおいて、基本層序との関係を確認することが出来た。覆土はⅧ層を主体とする締りのない青灰色土である。堆積状況は単層ないしはレンズ状で自然の埋没過程をたどったようだ。凡そ平坦な底面から壁は急斜度の立ち上がりを見せる。

溝底の標高値は、東端から西端までの間に傾斜が無くほぼ平坦である。出土遺物は無い。

SD2003 (図版6・7・8・29・30)

16Dから21Dグリッドに所在する南北方向に長軸をもつ溝状遺構である。南方は調査区外にのびており、全容は把握できなかった。19D～20Dグリッドの間は未確認になっているが、これは現地調査時の都合によりここに重機の進入路を設置したためである。設置前に事前調査をおこなったが、この時には遺構の存在を確認することができなかった。

SD2007と重複しており、これを切る関係にある。またSD2005との切りあい関係を探るべく合流付近において土層確認をしたものの、明確な切りあい関係を見出すことが出来なかったため、ここでは両者が同時期に機能し廃絶したものと捉えたい。

Aセクションにおいて、基本層序との関係を確認することが出来た。覆土はⅧ層を主体とする締りのある黒褐色土である。堆積状況はレンズ状で自然の埋没過程をたどったようだ。

底部は南端から北端までの間に約20cm低くなっていく。断面形状は箱葉研形(漏斗状)を呈し、壁は下方で急斜度、中～上方では緩やかに立ち上がる。断面形はいずれのか所をみても同じ形状をしており、他の溝状遺構のものに比べても、大変しっかりした掘り方である。出土遺物は無い。

SD2004 (図版6・7・8・29・30)

16Aから17Cグリッドに所在する東西方向に長軸をもつ溝状遺構である。西方は調査区外にのびており、全容は把握できなかった。SD2005と重複しており、これに切られる関係にある。覆土はⅨ層を主体とする締りの無い灰オリーブ色土である。

底部は西端から東端までの間に、約5cm低くなっていく。断面は平坦な底面から壁が急斜度で立ち上

2 遺構各説

がる。出土遺物は無い。

SD2005 (図版6・7・8・29・30)

17Bから18Dグリッドに所在する東西方向に長軸をもつ溝状遺構である。

SD2004・2006と重複しており、これを切る関係にある。また前述のとおり、SD2003とは同時期に機能していた可能性がある。覆土は締りの無い灰オリーブ色土である。

底部は西端から東端までの間に、約7cmの傾斜をもって低くなっていく。断面は凹凸がある底面から壁が急斜度で立ち上がる。出土遺物は無い。

SD2006 (図版6・7・8・29・30)

18Dグリッドに所在する東西方向に長軸をもつ溝状遺構である。全長約2mと、今回検出した溝状遺構の中で最も短いものである。南方向に遺構が続く可能性も考えたが、確認できなかった。

SD2004・2006と重複しており、これを切る関係にある。出土遺物は無い。

SD2007 (図版6・7・8・29・30)

18Dから18Eグリッドに所在する東西方向に長軸をもつ溝状遺構である。東方は調査区外にのびており、全容は把握できなかった。SD2003と重複しており、これに切られる関係にある。

覆土はIX層を主体とする締りの無い灰オリーブ色土である。断面は漏斗状で、壁の立ち上がりは急斜度である。出土遺物は無い。

SD2008 (図版6・7・8・29・30)

17Dから17Eグリッドに所在する東西方向に長軸をもつ溝状遺構である。東方は調査区外にのびており、全容は把握できなかった。SD2003と重複しているが明確な切りあい関係をつかむことは出来なかった。覆土はⅧ層を主体とする締りのある黒褐色土である。

断面の形状はSD2003に近似しており、覆土の特徴も同様である。よって現地調査時の所見ではSD2003と同時期の所産であると認識した。溝底の標高値は、東端から西端に向かって、約4cm低くなっており、本遺構に流れている水がSD2003に流れこむ姿を惹起させる。出土遺物は無い。

E 第V～Ⅶ層の遺構

ピ ッ ト

P1006・1012・1007・1008・1009・1010・1011・1013・1014・1016 (図版9・10・12・32)

1007～1011はA15グリッド付近に集中して検出された。調査時に、P1009・1010・1011が等間隔をもって並ぶ様子を確認した際には、掘立柱建物跡の可能性を考えたが、このほかに軸を合わせて並ぶものは無く、またそれぞれの土層断面では柱痕を確認できなかった。出土遺物は無い。

覆土は共通してⅦ・Ⅷ層を主体とする締りの良い黄褐色土である。また一様に弧状の断面を呈しており、壁の立ち上がりは急である。

土 坑

SK1001 (図版9・10・11・31)

17Dグリッドに所在する。遺構確認の精査を行い平面プランを検出した際には井戸の可能性を意識した。しかし完掘した結果、深度が井戸とは思われぬほど浅く、この程度では往時も湧水を見込めなかったであろうと判断した。ここでは土坑として取り扱うこととする。

覆土は締りの良い灰褐色土がレンズ状に堆積している。自然堆積による埋没過程をたどったものと理解できる。ほぼ平坦な底面から壁は急斜度で立ち上がる。2層より炭化した樹木と拳大～人頭大の礫が出土した。樹木は枝や木片で、建築部材や木製品の用材ではない。また礫の中には砥石(88)が1点含まれていた。木材や礫は本遺構の埋没過程において投棄されたものと考えられる。

SK1015 (図版9・10・11・31)

18Dグリッドに所在する。SK1001と同様、平面形態が井戸様の土坑であるが規模は小さい。

覆土も同様に締りの良い灰褐色土がレンズ状に堆積している。人為的な埋め戻しは確認されない。断面はほぼ平坦な底面から壁は急斜度で立ち上がる。2層からは炭化した樹木と拳大～人頭大の礫が出土した。これらは本遺構の埋没過程において投棄されたものと考えられる。

SK1019 (図版9・10・11・31)

18B～19Bグリッドに所在する。SK1001と同様の特徴を有した土坑である。

覆土も同様に締りの良い灰褐色土で、下層に黒灰色土と暗青灰色土がみられる。埋没過程の初期に堆積した暗青灰色土(5層)は既にグライ化が進んでおり、地山との見極めは非常に困難であった。平坦な底面から壁は急斜度で立ち上がる。ほかの土坑と同様に、炭化した樹木とともに拳大～人頭大の礫(川原石)が出土した。これらは4層の黒灰色土周辺から出土している。同層の黒味がかかった色調は、これら樹木の腐食の影響であろう。

SK1002 (図版9・10・11・32)

21Aグリッドに所在する。SK1001と同様の特徴を有した土坑である。

覆土も同様に締りの良い灰褐色土で、自然堆積による埋没過程をたどったものと理解できる。ほぼ平坦な底面から壁は急斜度で立ち上がる。断面形状は階段状で、ほかの一連の土坑とは異なる特徴をもつ。

2層より炭化した樹木とともに拳大～人頭大の礫(川原石)が出土した。これらも投棄されたものと考えられる。

SK1017 (図版9・10・11・32)

23Aグリッドに所在する。SK1001と同様の特徴を有した土坑である。

覆土上層は締りの良い灰褐色土であるが、また下層(3層)にはSK1019と同様の黒灰色土が堆積している。堆積状況はレンズ状であり、自然堆積による埋没過程をたどったものと理解できる。下層から炭化した樹木とともに拳大～人頭大の礫(川原石)が出土した。これらは埋没過程の中で投棄されたものと考えられる。

溝状遺構

SD1003・1004・1005 (図版9・10・12・32)

16A・17B・17Cグリッドに所在する、東西方向に走る溝状遺構である。SD1004は一部が途切れているが、覆土と方向が近似しているために同一の遺構とした。

Cセクションにおいて、基本層序との関係を確認することが出来た。覆土はⅣ層を主体とする締りのある浅黄色シルトである。

Cセクションの土層観察では、SD1003～1005には全く同一の覆土が堆積し、これらの溝に新旧関係を見出すことは出来なかった。このことから溝が同時に機能していたと考えられる。

また、SD1003・1004からは径5～6cmのタマゴ形の円礫が計45個出土した。特にSD1004とSD1005

2 遺構各説

が島状の部分を残して合流しているか所に集中して出土している。円礫の寸法規格がほとんど整っていることと合わせて考えると、これらの円礫は人為的に本遺構にもたらされた可能性が高い。

溝底は、東端から西端までほぼ水平である。

SD1018・1020 (図版9・10・12・32)

SD1003～1005の周辺17C・18Dグリッドに所在する、東西方向に走る溝状遺構である。覆土もSD1003～1005と全く同質であり、本来は同一の遺構として取り扱うべき可能性がある。

溝底は、東端から西端までほぼ水平である。出土遺物は無い。

F 第IV層の遺構

ピ ッ ト

P0001・0002・0003・0004・0005・0006 (図版13・14・33)

調査区中央の19A・20Aグリッドに集中して検出された。調査時に、P0005・0004・0003・0006の間隔で並ぶ様子を確認した際には、掘立柱建物跡の可能性を考えたが、このほかに軸を合わせて並ぶものは無く (P0001・0002はその可能性があるが)、土層断面の観察からも柱痕等は確認されなかった。ここでは集中して検出されたピットとして報告する。

これらのピットの覆土は共通して締りの良い褐灰色シルトで、IV層が主体土となる。

断面は総じてほぼ平坦な底面から、壁は急斜度をもって立ち上がる。出土遺物はない。

P0009・0010・0011・0012 (図版13・14・33)

調査区南方の15A・15Bグリッドに集中して検出された。掘立柱建物跡の可能性を考えたが、それぞれの土層断面の観察によれば全て単層であり、柱痕などは確認されなかったためにここでは集中して検出されたピットとして報告する。これらのピットの覆土はIV層を主体とした締りの良い褐灰色シルトである。断面は総じてほぼ平坦な底面から、壁は急斜度をもって立ち上がる。出土遺物はない。

P0007・0008 (図版13・14・33)

調査区中央の19Dグリッドに所在する。覆土は共通してIV層を主体とした締りの良い褐灰色シルトである。断面はほぼ平坦な底面から、壁は急斜度をもって立ち上がる。出土遺物はない。

P0013 (図版13・15・33)

調査区北方の25Aグリッドに所在する。上記の集中ピットとは異なり、単独で検出された。覆土の点でも異なり、締りのよい灰褐色粘土が堆積している。

断面はほぼ平坦な底面から、壁は急斜度をもって立ち上がる。出土遺物はない。

土 坑

SK0023 (図版13・15・33・34)

調査区中央の21Dグリッドで検出した、平面プランが楕円形の掘り込みの浅い土坑である。

覆土は単層で、締りの良い灰褐色シルト (IV層相当) である。

断面は平坦な底面から、西壁は急斜度をもって立ち上がる一方で、東壁は緩やかな立ち上がりをみせる。出土遺物はない。

溝状遺構

SD0014・0015 (図版13・14・17・33・33・34)

調査区中央の19Aグリッドで検出した、東西に走る溝状遺構である。

西方が調査区外に伸びるために全容は不明である。ともに、凡そ $N-77.1^{\circ}-W$ の方向に走る。

土層観察によると遺構覆土の上方にはIV層が堆積しており、V層上面から掘り込まれている。覆土は、ともに共通しており、IV層を主体とした締りの無い暗灰褐色シルトの単層である。覆土が共通であることからSD0014とSD0015の間に同時期性を認めた。

人為的な埋め立てをした痕跡は見受けられなかった。断面はほぼ平坦な底面から、壁は急斜度をもって立ち上がる。SD0014は西端から東端までの間に約4.1cm低くなっていき、SD0015は西端から東端までの間に約5.0cm低くなっていく。SD0014の遺構プランは東に行くにしたがい明瞭でなくなり、ほかの溝状遺構のように終結せず、消えている。

SD0014の東方には12世紀の後半の中世陶器(珠洲・珠洲系陶器)が集中して出土している(図版17)。この、限定されたか所に珠洲・珠洲系陶器のみがまとまって出土しているという点で人為的にこれらの遺物をもたらされたとも考えられ、双方の位置関係からこれらの遺物はSD0014に伴う可能性が高い。この他の出土遺物は無い。

SD0016 (図版13・14・17・33・34)

調査区中央の17A・18B・18Cグリッドで検出した、東西に長軸をもつ溝状遺構である。

西方が調査区外に伸びるために全容は不明である。 $N-81.8^{\circ}-W$ の方向に走る。覆土は、IV層を主体とする締りの無い灰黄色シルトである。

C18グリッドで、直交するSD0017と合流しているが、両者の間には明確な切りあい関係が無く、覆土も全く同質であることから、SD0016とSD0017に同時期性を認めた。断面はほぼ平坦な底面から壁が急斜度をもって立ち上がる。

底部は西端から東端までの間に約2cm低くなっていく。出土遺物は無い。

SD0017 (図版13・14・17・33・34)

調査区中央の18C・19Cグリッドで検出した南北に軸をもつ溝状遺構である。北端は後世の攪乱に壊されているが、この攪乱を超えて溝が延びていないので、ほぼ往時の規模を検出しているといえる。

$N-11.4^{\circ}-W$ の方向に走り、C18グリッドで、SD0016と合流する。

前述のとおり、覆土はSD0016と同様の、締りの無い灰黄色シルトである。断面はほぼ平坦な底面から壁が急斜度をもって立ち上がる。

底部は南端から北端までの間に約5.8cm低くなっていく。出土遺物は無い。

SD0018 (図版13・14・17・33)

調査区中央の20Cグリッドで検出した南北に軸をもつ溝状遺構である。

$N-3.2^{\circ}-W$ の方向に走る。覆土はSD0016・SD0017と同様の、締りの無い灰黄色シルトで、これらの間に同時期性を認めた。断面はほぼ平坦な底面から、壁は急斜度をもって立ち上がる。

底部は南端から北端までの間に約2.6cm低くなっていく。出土遺物は無い。

SD0019 (図版13・14・17・33)

調査区中央の21Cグリッドで検出した南北に軸をもつ溝状遺構である。

2 遺構各説

N - 0.8° - W の方向に走る。覆土はSD0016・SD0017・SD0018と同様の、締りの無い灰黄色シルトでこれらの間に同時期性を認めた。断面はほぼ平坦な底面から、壁は緩やかに立ち上がる。

底部は南端から北端までの間に約2.2cm低くなっていく。出土遺物は無い。

SD0020 (図版13・14・17・33・34)

調査区北方の25Bグリッドで検出した南北に軸をもつ溝状遺構である。

N - 7.5° - W の方向に走る。覆土はほかの溝と異なる、締りの全く無い赤褐色土である。調査時の所見では、覆土の特徴からほかの溝よりも新しい時代(近世~近代)の所産であろうと認識した。

断面はほぼ平坦な底面から壁が緩やかに立ち上がる。底部は南端から北端までの間に約0.8cm低くなっていく。

出土遺物は無いが、本遺構の脇を遺構精査している際に黄銅製の筭が出土している。本遺構に伴う可能性がある。

SD0021 (図版13・14・17・33・34)

調査区北方の25Cグリッドで検出した南北に軸をもつ溝状遺構である。

N - 22.7° - W の方向に走る。覆土はIV層を主体とする締りの無い暗灰褐色シルトである。断面はほぼ平坦な底面から壁が急斜度をもって立ち上がる。

溝底の標高値はほとんど均一値を示しており平坦である。出土遺物は無い。

SD0022 (図版13・15・17・33)

調査区北方の24Dグリッドで検出した東西に軸をもつ溝状遺構である。

N - 62.9° - W の方向に走る。覆土はSD0021と同様の、締りの無い暗灰褐色シルトである。断面はほぼ平坦な底面から壁が急斜度をもって立ち上がる。

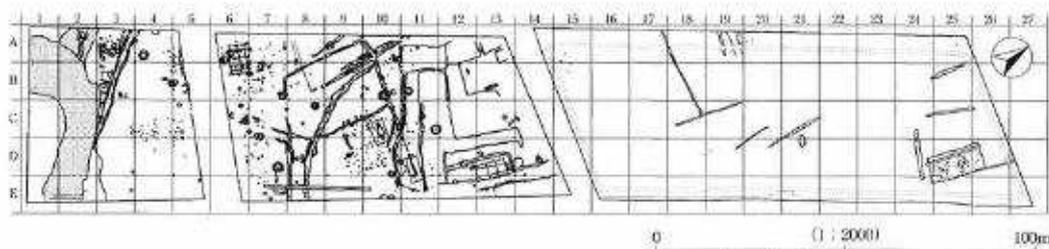
溝底の標高値は、SD0022と同様に、ほとんど均一値を示しており平坦である。出土遺物は無い。

性格不明遺構

SX0024 (図版13・15・17・33・34)

調査区北方の25Dグリッドを中心にして所在する。平面が長方形の浅い掘り込みをもつ凹地遺構で、掘り込みの立ち上がりは緩やかであり、底面は凹凸が激しい。

覆土はIV層を主体とする、締りの無い暗灰褐色シルトである。遺構精査時には、まず不定形のボンヤリした平面プランが確認され、当初は自然地形の大きな窪みであろうと考えた。その後、覆土をある程度除去した段階になると、径10~20cmの楕円形の落ち込みが無数に検出された。この小穴の深さは約2~6cmで、その底は平らなものから不定なものまで様々である。



第12図 V層上面で検出した遺構(中世)

当初、この大きな窪みは平成16年度調査で確認された「掘込田」〔近江屋2005〕の可能性が考えられ、楕円形のプランは足跡ではないかと想定した。

しかし前述の「掘込田」が、近接する複数の窪地遺構と畔や道に想定される空間で構成されているのに対して、本遺構はこの窪地遺構が単独に存在しているのみである。また「掘込田」が近世のものとして推定されている一方で、本遺構の覆土はIV層（中世遺物包含層）を主体としており近世の遺構とは考えにくい。

よって本遺構は、形態の特徴の点では田圃遺構の可能性を残すものの、平成16年度調査で確認された「掘込田」とは、時期が異なるという点と、畔や道といった空間を伴わないという点で、異なるものである。ここでは、広く浅い窪地の底に小穴が多数存在する性格不明の遺構である、と報告するにとどめておきたい。

3 遺物概要

本遺跡の調査では、古代から近世にかけての遺物がコンテナ（内寸54×34×10cm）にして44箱分出土している。内訳は古代が土器7箱・木製品15箱分・自然遺物7箱分、中世が陶磁器10箱分・石製品及び礫1箱、近世が陶磁器・金属製品・銭貨1箱、その他平成13年度と同16年度に行った試掘調査で出土した遺物2箱、自然礫1箱である。

遺構確認面は5面ある。古相から見ると、古代ではⅩⅦ層上面ないしⅩⅧ層中・ⅩⅨ層上面・Ⅹ層上面に、中世ではⅧ層上面・Ⅴ層上面にそれぞれ遺構確認面がある。

今回の調査では遺構・遺物とも極めて少なく、特に遺物は層位的にも平面的にも偏在する傾向が見られる。このことから、上記各層の中で考古学的資料に基づいて時代・時期が確定できるものは少なく、一部それが可能な層や放射性炭素年代測定の援用によって相対的に時期比定せざるを得ない層もある。これらのことを前提に以下に上記各層の時代・時期判断を行う。

ⅩⅦ層は、調査区北部から検出した亀甲形杭列等の部材による放射性炭素年代測定から6世紀末～7世紀中葉にかけての時期比定がなされている。ⅩⅧ層からは時期判断できる遺物が出土していないが、下層のⅩⅥ層からは8世紀終末～9世紀前葉にかけての須恵器が出土し、上層のⅩ層からは9世紀後半の須恵器、Ⅷ層からは10世紀前葉～中葉の土師器が出土している。以上のことからⅩ～ⅩⅦ層は9世紀後半に比定することが可能であるが、詳細は不明である。Ⅳ～Ⅵ層には共通して12世紀後半の遺物が出土するが、この内Ⅴ層からは14世紀初頭の青磁、Ⅳ層からは14世紀末の青磁・瀬戸焼も出土する。このことから、Ⅳ・Ⅴ層は14世紀代、Ⅵ層は12世紀代と推定できる。

古代から中世の画期は、Ⅵ層からⅧ層の間にあることが想定できるが、以下の理由から、特定は困難である。

- Ⅵ層からは珠洲焼が出土し、Ⅷ層からは古代の遺物が出土しているものの、Ⅷ層からは遺物が出土していない。
- Ⅷ層上面で確認できる遺構の覆土にはⅧ層の土が含まれるものの、Ⅵ層以上の土は確認できない。

つまり、Ⅷ層上面で検出した遺構が中世に属するかどうか確定できない現状では、画期については大まかな判断にならざるを得ない。

以上に基づいて古代から中世、近世へと遺物説明を行うが、遺構に伴う遺物が極めて少ないことから、包含層出土遺物が中心となる。

4 遺物各説

A 古 代

1) XIII層の出土遺物

当該層は前述のとおり、自然流路SR4003を検出した層（a）と、亀甲形杭列SX4001、方形杭列SX4002を検出した層（b）がある。遺物はSR4003内から土師器の小片、スギの板材、種子・種実、昆虫遺体が出土し、XIII層中から砥石が1点出土しているが、SX4001・4002では、これらに伴う遺物は出土していない。ただし、SX4001・4002で使用している杭は、遺物として本項で扱う。

遺構出土遺物

SR4003（図版18・36） 1・2は土師器甕で、1は頸部、2は体部片であるが、小片のため形態を窺うことは出来ない。このことから掲載図も傾き等は正確なものではない。

3・4はスギ板材の破片である。2点とも同一層内ではほぼ接するような出土状況を示していることから、同一個体の可能性がある。

SX4001（図版18・19・36） 6～11はSX4001を構成する部材で、樹種はハンノキ・エゴノキ・ニレ・トネリコ・コナラ属である。上部は後世の削平や腐食により欠損しているため、本来の長さや上部加工痕は不明である。先端は比較的鋭く仕上げている。削りは概ね4～6方向から行っているが、1方向でも上部から先端に向かって細かく何度も調整しながら削っている。最も残りの良い9を観察すると、全体に樹皮が残っていることから、他の杭も同様であったと推定できる。

SX4002（図版19・36） 12～15はSX4002を構成する部材で、樹種はカエデ・サクラ・モクレン・ニレ属である。このうち14以外は残存状態が悪いため工具痕が部分的に確認できるだけである。しかし、削り方はSX4001の部材と概ね同じである。

遺構外出土遺物（図版18・36）

5はXIII層中からの出土で、砂岩礫を利用した砥石である。使用度合いが低く、自然面が多く残る。

2) XII層の出土遺物

XII層中からは土師器片1点と須恵器が数点出土している。

遺構外出土遺物（図版19・36）

16は土師器甕の体部片である。小片のため詳細は不明であるが、外面にハケ目、内面にヘラ削りが認められる。

17～19は須恵器である。17は無台杯で、底部は器壁が厚く、やや丸みを帯びた断面を有する。体部は外傾して直線的に立ち上がる。18・19は有台杯で底部から体部にかかる腰折れが緩やかで、高台が底部の周縁に近い部分にあるという特徴を持つ。

その他参考資料として、杯蓋（図版23・39～145）は表採資料ながら、17～19とほぼ同時期の特徴を有する須恵器である。

3) XI層の出土遺物

XI層に伴う遺構はないが、本土層中から土師器碗が1点出土している。

遺構外出土遺物 (図版19・36)

20は土師器碗で、体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部端は外反する。

4) X層の出土遺物

X層では土坑2基、溝2条を検出しているが、そのうちのSK3001から土師器碗1点、本土層中から須恵器片1点が出土している。

遺構出土遺物

SK3001 (図版19・36) 本遺構からは21の土師器碗底部周縁から体部下端にかけての小片が1点出土している。摩滅も著しいため詳細は不明であるが、内面の一部に煤が付着している。

遺構外出土遺物 (図版19・36)

22はX層包含層中からの出土で、佐渡小泊産須恵器杯の口縁部片である。

5) VIII層の出土遺物

VIII層では遺構は検出しているものの、遺構に伴う遺物は出土していない。しかしながら、VIII層遺物包含層中からは多くの土師器と少量の須恵器が出土している。

今回掲載した土師器は、内黒土器も含めてほとんどが碗で、それ以外は甕の口縁部2点と底部が1点あるのみである。土師器は調査区内での分布が概ね南部と北部の2か所に偏在し、中央部は空白である。

これを地形で見ると、遺物が集中する南部と北部は若干高く、中央部は多少の起伏は見られるものの、全体として低くなっていることが確認できる。

特に南部の出土遺物は、遺跡の中心部と推定される平成16年度から調査を継続している14グリッド以南の荒川自然堤防微高地上からの流れ込みの可能性が高い。

北部は南北グリッドラインの22付近を最低所として北に向かって徐々に高くなっており、本調査区の北側に遺跡が展開している可能性を示唆しているものと考えている。

南北グリッドライン12・13付近を最高所とし、北に向かって徐々に低くなる地形が、17付近でいったん高まりを見せ、再び低くなっていくが、それを境に遺物の空白地帯が始まることから、前述した14グリッド以南に存在する遺跡中心部からの流れ込み遺物がこの高まりによって遮られたことが考えられる。

遺構外出土遺物 (図版20・21・36・37)

本遺跡で出土する土師器碗は磨耗の著しいものも多いが、ロクロ成形で底部は回転糸切りを原則とするので、特に記述がない限り成形技法、底部切り難し技法とも同様と判断していただきたい。

分類は属性を細分しても、それに対応して傾向等を抽出できるだけの資料数がないため、底部と口縁部の特徴を基本として分類したが、本遺跡出土土師器碗は分類の項で記したとおり、5つの形態に分かれる。全形がわかるものは12点のみであるが、原則として口径が算出でき、口縁部から体部にかけての形状がわかるもの及び底径が算出でき、体部への立ち上がりが若干でも残っているものを選抜して、調査区南部で45点、北部8点を実測・掲載した。

まず、調査区南部出土遺物について見たい。

23～25・27～29は完形もしくはそれに準ずる残存のものである。

23～25はロクロ成形でわずかに上げ底の平底を持つ碗である。このうち25は円柱状に突出する底部を持つ。体部は内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反する。特に25は口唇部直下で顕著に外反する。

4 遺物各説

27は体部から口縁部にかけては23～25と同じであるが、底部は丸底に近い。

28・29・36は底部が周縁部しか残っておらず、全容は不明である。このうち28・29は体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は外反しない。29の口縁部はわずかに肥厚するほか、底部が突出しているようにも見えるが、ごくわずかなので、ここでは突出底部には含めていない。36は口縁部が外反するほかは、他の2点と同様の特徴を持つ。

26・30～35・37は口縁部から体部にかけての破片資料である。このうち26・30・31は口縁部が外反するものである。26・31は傾きから推測すると、やや浅い碗になるものと思われる。このうち26・30は外反の程度が大きく、24・27に近い。さらに31は器壁が厚く、後述する80と同じようなぼってりとした碗になる可能性が高い。

32～35は、口縁部が外反しないものである。このうち、32は体部に比べ口縁部が肥厚するタイプで、35は逆に口縁部が薄くなるタイプである。

37は口径を算出できないような口縁部の小片であるが、内面に確認できるだけでヘラ工具による4条の平行沈線がめぐっている。この他にも表土から磨耗は著しいが沈線をめぐらせる破片が出土している。

38～67は底部片である。38は底部径が小さく、底部から体部下端の立ち上がり方は緩い。体部は大きく開いて皿状になるか、もしくは大きく内湾状に立ち上がって碗になるかは不明である。39は底部径が小さく平底である。

40～42・66・67は底部径が4.4～4.7cmを測る平底である。この中では41が体部の残存がよく、内湾ぎみに立ち上がっていることが想定できる。66の底部外面は、周縁部が平らで、中央部が上げ底である。底部から体部への立ち上がりは大きく外反するのが特徴である。67は底部の器壁が厚く、突出しており、わずかに上げ底である。

44～46・55・57～59・61・63～65は底部径が4.8～5.2cmを測る平底である。46・55・58・64等は体部の残存がよく、内湾ぎみに立ち上がっていることが想定できる。44・45・58はわずかに上げ底である。このうち55はわずかに突出する底部を持つ。57は平底であるが、外面中央部がわずかに窪んでいる。59・61・64・65は一部突出するが、顕著ではなく、わずかに上げ底である。63は突出する底部を持ち、上げ底である。

47～52・60は底部径が5.3～5.7cmを測る平底である。48・60は体部の残存がよく、内湾ぎみに立ち上がっていることが想定できる。47の底部外面周縁部は平らであるが中央部は上げ底状にわずかに窪む。48は底部中央部が欠損しているが、周縁部がわずかに浮き上がるような平底と考えられる。

49は部分的に突出する比較的厚めの底部で、上げ底である。50・51は底部外面がほぼ平底である。52は磨耗が原因の可能性もあるが、底部から体部への腰折れが丸みを帯びており、低部は上げ底である。60の底部は周縁部のみの残存であるが、部分的に突出する比較的厚めの底部で、ほぼ平らな平底である。

43・53・56・62は底部径が5.8～6.2cmを測る平底である。43・53は体部の残存が比較的良好で、内湾ぎみに立ち上がっていることが想定できる。43の底部外面は周縁部が平らで中央部が上げ底である。53の底部は周縁部のみの残存であるが、中央部に向かってわずかに上げ底になる兆候が認められる。56は上げ底で、体部外面下端には、糸切り離しの際についたと思われる、傷痕が認められる。62は底部外面中央部が剥離しているため明瞭ではないが、わずかに上げ底になっている。

54は底部径が7.2cmを測る、大型の土師器碗である。摩滅のため成形・調整等は不明であるが、他の土師器碗と同様と判断している。

68は小型甕の底部であるが、摩滅のため調整等は不明である。

69は有台の内面黒色土師器碗の底部である。高台の直径は6.0cm、高さは0.5cmで、内面には不定方向のヘラ磨きが施されている。

70・71は甕の口縁部である。小片のため口径の算出はできないが、傾きはほかの類例をもとに配置した。口頭部はほぼ直立する体部から約45°外方に傾斜し、口唇部は肥厚するとともに、口唇部外面は指頭様のナデによって浅い凹線状に窪む。

次に、調査区北部出土遺物について見る。

77～82は完形もしくはそれに準ずる残存のものである。

77～79は突出する底部から内湾ぎみに立ち上がる体部と外反する口縁部を持つ。このうち78は口縁部が肥厚し、79は口唇部が強く外反する。77・78の底部から体部下端には底部糸切り離し時についた傷痕が認められる。77はわずかな上げ底、78は上げ底、79はほぼ平らな平底である。79の体部内面には平行沈線が認められるが、調査区北部出土の37ほどは明瞭ではない。

80は突出する底部と内湾ぎみに立ち上がる体部を持つが、口縁部は外反しない。底部突出部から体部に変換する部分には、ナデによって生じたと思われる粘土のはみ出しが認められる。この遺物はほぼ完形であるが、全体に非常に器壁が厚くて重量があり、ほかの土師器碗と比べると異質である。

81は上底の底部からあまり内湾せず直線的に開く体部と口縁部を持ち、口縁部は肥厚する。口径と比べ器高が低い。82はほぼ平らな底部からあまり内湾せず直線的に開く体部と口縁部を持つ。器高5.1cm、口径14.4cmを測り、調査区全体の中でも最も大型の部類である。81・82は底部が突出しない。

83は口縁部から体部にかけての遺物で、内湾ぎみに立ち上がる体部とわずかに外反する口縁部を持つ。84は上げ底の底部から外反ぎみに立ち上がる体部を持つ。

85～87は内面黒色土器である。85は上げ底の底部から体部下端にかけての破片で、内面には不定方向のヘラ磨きを施す。86は口縁部から体部上半にかけての破片で、立ち上がりはほぼ直線的に開く。内面にはヘラ磨きを施すが、口縁部付近は横方向、体部は縦から斜め方向のヘラ磨きである。87は有台の碗で、底部から体部下端にかけての破片である。内面にはヘラ磨きを施すが、体部は回転方向（横方向）、見込み部は不定方向の磨きである。本遺物は有台であるが、高台はほぼ欠損し、図化を行った部分にわずかに残るのみである。

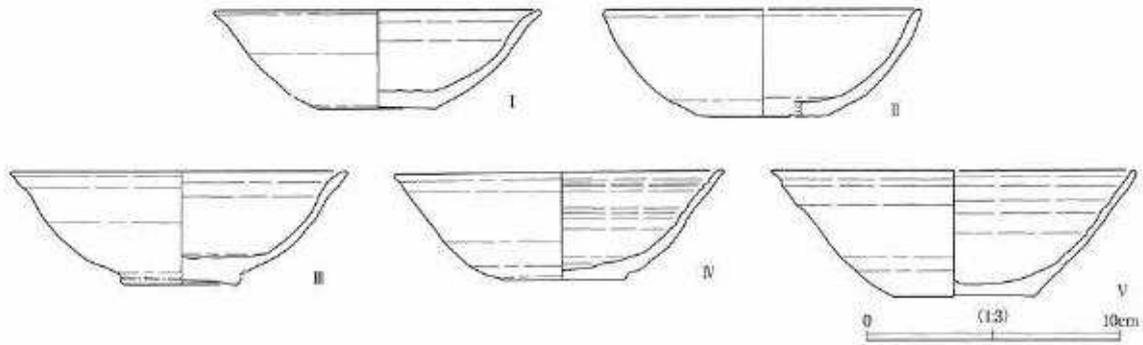
内面黒色土器は、調査区南部・北部を合わせても図化できるものは4点のみで、小片が多いため、これらをもつての時期判断は困難である。

土師器無台碗の分類（第13図）

成形手法としてはすべてロクロ成形で、底部切り離し技法は回転糸切により製作されている。本項では全体器形のわかる12点を元に、形態的な特徴で分類すると、大きく5形態に分けることができる。それぞれがどの形態に所属するかは、下記のとおり遺物番号で示した。

なお、Ⅰ～Ⅳは体部が内湾ぎみに立ち上がる点で共通している。

- Ⅰ 底部が突出せず、口縁部が外反するもの : 23・24・27
- Ⅱ 底部が突出せず、口縁部が外反しないもの : 28・29
- Ⅲ 底部が突出し、口縁部が外反するもの : 25・77・78
- Ⅳ 底部が突出し、口縁部が外反しないもの : 79・80
- Ⅴ 体部が直線的に立ち上がるもの : 81・82



第13図 VII層出土土師器無台碗分類図

23～29は南部、77～82は北部で出土したものである。このことから、口縁部が外反するものとしいないものが共伴することは両地点に共通するが、底部が円柱状に突出するのは北部に多く、南部では25だけである。ただし81・82は底部が突出しないので、南部出土の土師器碗と同様の特徴を持つ。

ここでVに分類したものは底部が突出していないが、底部が突出して体部が直線的に立ち上がる碗の存在も想定される。

須恵器は壺の頸部が2点、鉢口縁部が1点、高台部が1点、甕の体部片が1点で、いずれも南部から出土している。

壺頸部72は直径の算出も困難であるが、ごくわずかにくびれ部が残っており、「く」字に屈曲している。口縁部は断面が先細りになって割れているため、口唇部の形状は不明である。内面くびれ部の下側に顕著な自然軸が認められる。73は長頸壺の頸部で、逆「八」字状に開く。74は鉢の口縁部で口唇部直下は強いナデによって、特に外面は凹線状に窪む。75は高台部であるが、直径が約14cmあり、大きくても10cm内外の有台杯の高台部をはるかに凌駕しており、長頸壺のそれである可能性が高い。なお、底部内面の一部が平滑になっており、甕に転用された可能性も考えられる。76は外面が平行タタキ、内面は同心円文アテ具痕のある甕体部の小片であるが、内面の一部に漆の付着が見られることから掲載した。

B 中 世

6) VI層の出土遺物

Ⅷ層上面を遺構確認面とし、Ⅵ・Ⅶ層の土を覆土とする遺構及びⅥ・Ⅶ層中に包含される遺物を対象とするが、本調査ではSK1001から砥石が1点出土したのみで、Ⅵ層中から、後述するⅣ・Ⅴ層と同じ珠洲系の破片が数点出土したが、実測掲載できるものはない。

遺構出土遺物

SK1001 (図版21・37) 88は流紋岩質凝灰岩の砥石である。一部欠損しており、使用面は確認できる範囲では1面のみである。使用面には、同方向の線条痕が見られる。

7) V層の出土遺物

V層上面を遺構確認面とし、Ⅳ層の土を覆土とする遺構及びⅤ層中に包含される遺物を対象とする。ここでは遺構からの出土遺物はなく、包含層出土遺物のみである。

本層からは珠洲・珠洲系、渥美・常滑、青磁、土製品が出土している。

珠洲・珠洲系の遺物については胎土を観察すると、ほとんどの場合、長石・雲母・白色及び黒色粒子な

どの混入が多く、本来の珠洲焼のような均質な胎土のものは少ない。以下に珠洲焼と記したものの以外は珠洲系とするが、その中にも判断が難しく、珠洲焼に含めてもよいものも存在する可能性があることを付記しておきたい。

珠洲系遺物は製作技法や形態が本来の珠洲焼とほとんど変わらないことから、工人の移住によって生産されたものと考えられるが、生産窯については、現時点では特定できない。

遺構外出土遺物 (図版21・38)

89～96は珠洲・珠洲系の遺物である。89は甕の口頸部で口縁部は大きく外反して、水平に近く開く。焼成が悪くかなり軟質である。90は甕の底部である。体部下端がナデ調整であることから大甕の可能性はあるが、詳細は不明である。91・92は壺口縁部と底部である。それぞれ口径と底径からR種A・B・C類 [吉岡1994] と考えられる。93も壺であるが、口頸部が短く立ち上がって終息するR種D・E類である。内面は回転ナデによってきれいに調整されているが、外面には紐巻上げの痕跡が残っている。94～96は片口鉢である。94は口縁部片であるが、口唇部がわずかに外反して立ち上がる。95は内湾ぎみに立ち上がる体部から口縁部は直立ぎみに立ち上がり、口唇部は内外に肥厚する。96は片口部の破片である。傾きはほかの類例を参考にした。

これらの中で確実に珠洲焼といえるのは92だけで、ほかは珠洲系の焼物である。

97～104は渥美・常滑の遺物である。97～100は直径の算出できない口縁部片のため、甕か広口壺かの判断は困難である。101～103は体部片で特に101・102は押印文が直線的に間断なく押されている。104は片口鉢で、内面に荒いスリ目がある [中野1994]。

105～107は青磁碗であるが、108は器種不明である。このうち105と107には鎚連弁文が認められる。その他参考資料として、鎚連弁の碗 (図版23-147) が表採されている。

109は土師質の土製品で、獣足の可能性もあるが、ここでは土鈴として扱った。鈕に穿孔は見られないが、手持ちとして十分な長さは確保されている。上半部の破片のため、スリットと丸は残存していない。

8) IV層の出土遺物

V層上面を遺構確認面とし、IV層より上の土を覆土とする遺構及びIV層中に包含される遺物を対象とする。ここでは遺構からの出土遺物はなく、包含層出土遺物のみである。

本層からは珠洲・珠洲系、渥美・常滑、青磁、瀬戸等が出土している。

遺構外出土遺物 (図版22・38)

110～119は珠洲・珠洲系の遺物である。110～112は甕の体部及び口頸部で、法量からみて、110・111は大甕、112は中甕と判断できる。113・114は甕の底部であるが、直径が算出できないため大甕・中甕の確定はできない。115～117は壺である。115はT種中壺A・B類に分類でき、116・117はR種A I・II類の四耳壺である。

これらの中で確実に珠洲焼といえるのは110・111・117・118で、ほかは珠洲系の焼物である。

120～122は渥美・常滑の遺物である。3点とも直径の算出できない口縁部片のため、甕か広口壺かの判断は困難である。

123は軟質の陶器で残存部の形態から判断すると、浅い鉢か焙烙と考えられる。生産地については不明である。

124は瀬戸大窯の折縁皿である。全容は不明だが体部の立ち上がりが大きく開き、器高が低くなる段階

と考えられ、大窯第4段階の後半～末にかけてのものと判断できる。

125～127は青磁碗であるが、128は器種不明である。125・127は底部片で、126は口縁から体部にかけての破片であるが、この中では125がほかよりも若干古い様相を示す。

129は頁岩の砥石の一部で、130は珪質頁岩（越後では玉龍または半透明の頁岩とも表記する）の剥片である。

C 近世・その他

9) 近世及びその他の出土遺物

本遺跡では、前項までの遺構・遺物包含層からの出土遺物以外に、I層・表採を中心とした近世遺物も出土しており、本項では参考資料も含めて記述する。

遺構外出土遺物（図版23・39）

まず、参考資料としてIV・V層から鉄滓が各1点（143・144）出土している。本遺跡では鍛冶遺構を検出していないので、近隣からの流れ込みと考えられる。I層からは珠洲系の壺口縁部146が出土している。これはIV・V層から出土している珠洲・珠洲系の遺物よりもかなり時代の下る、R種D・E類の壺口縁部である。145・147については、それぞれ2)と7)項で触れたとおりである。

次に、近世遺物として皿・碗・香炉・土瓶・筭・銭貨が出土している。

131は肥前系染付輪禿皿で、内面に二重網目文が描かれている。132は肥前系碗である。内外面の釉調が違って見えるが、内面鉄釉、外面灰釉として掛け分けているのか、内面は灰釉が胎土の鉄分と反応して黒色に発色したのかは不明である。133は肥前系青磁香炉で、16～17世紀代のものである。134は土瓶の下半部であるが、19世紀以降の信楽と思われる。断面及び内外面の一部に漆継ぎが認められる。

135は瓶の下端部である。内外面に灰釉を施している。136は口縁部片で内外面に灰釉を施す碗と考えられる。137は口縁部片で陶器皿と考えられるが、詳細は不明である。135～137は産地不明である。

148は瀬戸美濃系の摺鉢で、15世紀末～16世紀初頭の所産と考えられる。内面の一部に煤の付着が認められる。

138は筭であるが、引付から足先の間が大きく曲がっているが、鏡から耳搔の間の残存は良好である。139～142は寛永通寶で、139が四文銭、140～142が一文銭である。

第V章 自然科学分析

1 はじめに

本遺跡からは、最下文化層より7世紀代と比定される自然流路 (SR4003) を検出したほか、亀甲形 (SX4001) や方形 (SX4002) の杭列も検出したが、時期を特定できる共伴遺物がないことから、杭列の年代観や時期差について検討するため、SX4001・4002、SR4003から各1点ずつ木材試料を抽出し、年代測定を実施した。

次に、調査区内各地点の土壌サンプルやSX4001・4002、SR4003の部材・流木等を用い、1) 堆積環境変遷、2) 古植生変遷、3) 植物資源利用状況の3点の検証を目的として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定、樹種同定を実施したほか、SR4003から検出した昆虫遺体の分析を通じた古環境復元について3・4節に掲載した。

2 西部遺跡の放射性炭素年代測定

A 分析方法

測定は株式会社加速器分析研究所の協力を得て、AMS法により行う。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。測定年代は1950年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma) に相当する年代である。測定年代の補正に用いた $\delta^{13}C$ の値は、加速器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}/^{14}C$) を測定し、標準試料PDB (白亜紀のペレムナイト類の化石) の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差 (‰: パーミル) で表したものである。また、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、いずれの試料も北半球の大気圏における暦年較正曲線を用いる条件を与え計算を行っている。

B 結果

結果を第2表に示す。資料の年代 (補正年代) は、SX4001-①は1310BP、SX4002-①は1360BP、SR4003内出土の流木は1340BPという、三者が狭範囲内に収まる値が得られた。また、各試料の暦年較正年代のうち、確率の高さを示す相対比の大きい年代範囲をみると、SX4001-①は640-780AD、SX4002-①は600-720AD、SR4003内出土の流木は630-780ADを示している。

遺跡名	試料名	Libby Age BP	$\delta^{13}C$ (‰)	$\Delta^{14}C$ (‰)	pMC (%)	暦年較正年代	相対比	測定年代	Code No.
SX4001	①	1310 ± 40	-29.70 ± 0.95	-150.8 ± 3.8	84.92 ± 0.38	660AD-720AD	0.486	1300 ± 30	IAAA-50937
						740AD-770AD	0.196		
						640AD-780AD	0.954		
SX4002	①	1360 ± 40	-30.13 ± 0.88	-156.3 ± 4.1	84.37 ± 0.41	630AD-690AD	0.668	1450 ± 40	IAAA-51658
						750AD-760AD	0.014		
						600AD-720AD	0.864		
						740AD-770AD	0.090		
SR4003	流木	1340 ± 40	-26.23 ± 0.98	-153.2 ± 4.2	84.68 ± 0.42	640AD-700AD	0.573	1300 ± 40	IAAA-50938
						740AD-780AD	0.109		
						630AD-780AD	0.954		

第2表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

使用プログラム: OxCal Ver.3.10

3 西部遺跡の珪藻・花粉・植物珪酸体分析、種実・樹種同定

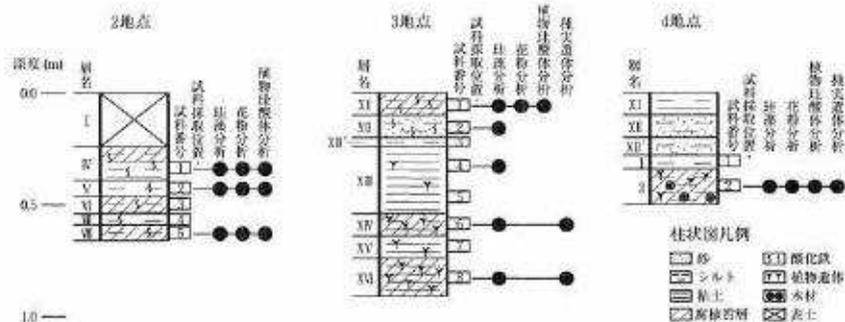
A 試料

土壌試料は、調査区の4か所（1～4地点）から採取された。各地点の模式柱状図、試料採取位置および分析層位を第14図に示す。

1地点（18C）は調査区南側の古代の溝状遺構SD2003の覆土から土壌試料1点（試料番号13）を採取した。

2地点（23A）は調査区北側の低地部にあたり、Ⅷ層～Ⅳ層、Ⅰ層が認められる。最下位のⅧ層は腐植質の灰褐色シルト～粘土からなり、古代の遺物包含層である。Ⅷ層にはぶい黄色シルト、中世遺物包含層であるⅥ層は黄褐色土である。Ⅴ層は明黄褐色シルトで、本層上面は中世遺構検出面である。Ⅳ層は黄褐色シルトで、中世遺物包含層である。最上位のⅠ層は現水田の表土である。本地点からは、試料番号1～5の5点の土壌を採取した。

3地点（24C）は調査区北東の亀甲形杭列付近の低地部で、本地点ではⅩⅦ層～ⅩⅠ層が認められる。最下位のⅩⅦ層はオリーブ灰色の粘土からなり、植物遺体を含む。ⅩⅤ層は青灰色粘土で、植物遺体をわずかに含む。ⅩⅣ層はオリーブ灰色粘土からなり、植物遺体を多量に含む。ⅩⅢ層は暗青灰色粘土で、植物遺



第14図 各地点の模式柱状図、試料採取位置および分布層位

体はわずかに含まれる。ⅩⅡ層はⅩⅡ層とⅩⅡ'層に分けられ、いずれも青灰色砂質土からなる。下位のⅩⅡ'層が細砂からなるのに対し、上位のⅩⅡ層はシルトがわずかに混じる。ⅩⅠ層は暗青灰色粘土で、古代の遺物が出土している。本地点から、試料番号1～8の8点の土壌を採取した。

4地点（23C）は3地点に隣接する7世紀中葉より前とされるSR4003の中央付近に位置し、本地点では流路内堆積土の2、1層とそれを覆うⅩⅡ層～ⅩⅠ層が認められる。流路内堆積土下部の2層は明灰色及び茶褐色粘性土からなり、植物遺体（特に流木）を多く含む。流路内堆積土上部の1層は灰褐色粘性土からなる。その上位を3地点でも認められたⅩⅢ層～ⅩⅠ層が覆っている。本地点からは、試料番号1・2の2点の土壌を採取した。

なお、微化石分析の分析点数は、珪藻分析が10点、花粉分析・植物珪酸体分析が6点である。種実同定は、SR4003の2層から採取された種実単体76試料（No.5001～5102の一部）と、7世紀中葉頃とされるⅩⅢ層から採取された単体1試料（一括）、計77点について実施する。洗い出しを実施する土壌試料は、3地点の試料番号6・8、4地点の試料番号2の、計3点である。各試料の詳細は、結果と共に表に示す。

樹種同定を実施する試料は、亀甲状の杭列材10点、SR4003から出土した板材2点と流木や立木8点の、計20点である。

B 分析方法

珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実同定、樹種同定の分析方法・手法は、当社の定法に従い実施している。各分析項目の分析方法は、既存の調査報告書〔パリノ・サーヴェイ株式会社2003a,2005〕等を参照されたい。今回、植物珪酸体分析は、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求めている。なお、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析において検出個数の一覧表については、誌面の都合上、割愛した。

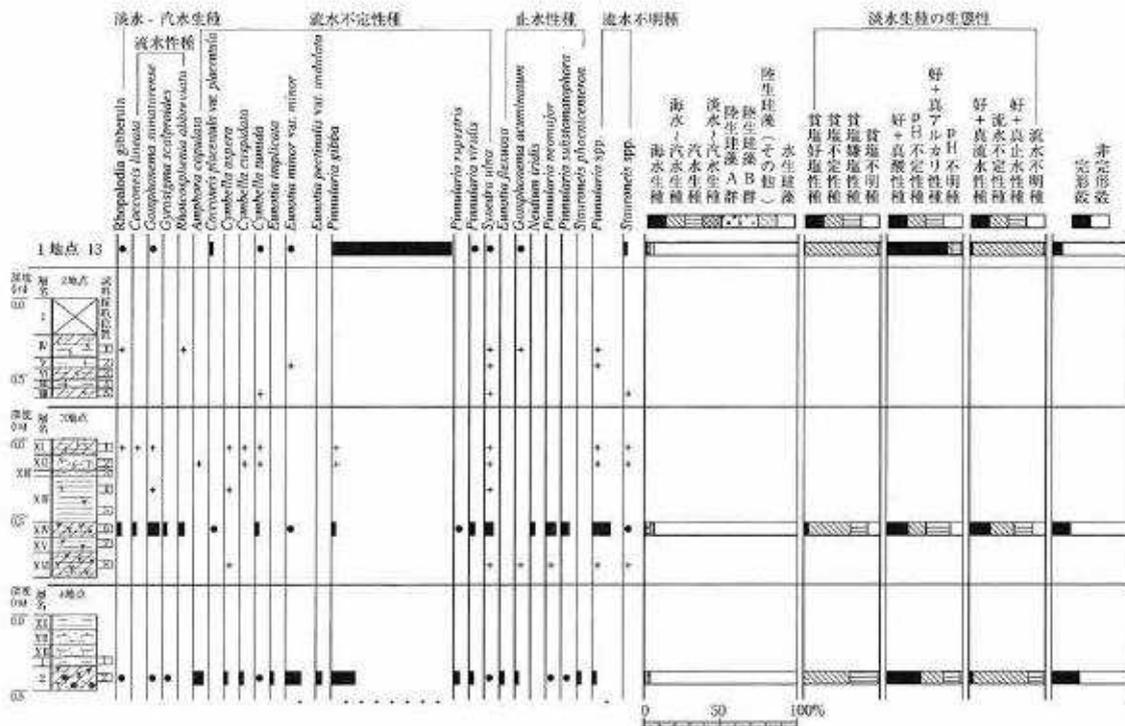
C 結果

1) 珪藻分析

珪藻化石の保存状態が悪い。また、1地点試料番号13、3地点試料番号6、4地点試料番号2の3試料を除く試料では検出個数も少ない（第15図）。産出分類群数は、合計で32属87分類群である。

1地点試料番号13では、貧塩不定性種、真+好酸性種、流水不定性種が優占する。産出種は、流水不定性で沼沢湿地付着生種群〔安藤1990〕の *Pinnularia gibba* が優占し、流水性で上流性河川指標種群〔安藤1990〕の *Gomphonema sumatrense*、流水不定性の *Cocconeis placentula* var. *placentula* を伴う。

3地点試料番号6は特に多産する種がなく、流水性で上流性河川指標種群の *Gomphonema sumatrense*、



第15図 主要珪藻化石群集の層位分布

海水—汽水—淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

中～下流性河川指標種群〔安藤1990〕の *Rhoicosphenia abbreviata*、流水不定性で沼沢湿地付着生種群の *Pinnularia gibba*、*Pinnularia viridis*、止水性で弱酸性の湿地などに生育する *Pinnularia neomajor*、*Pinnularia*

substomatophora 等が産出する。

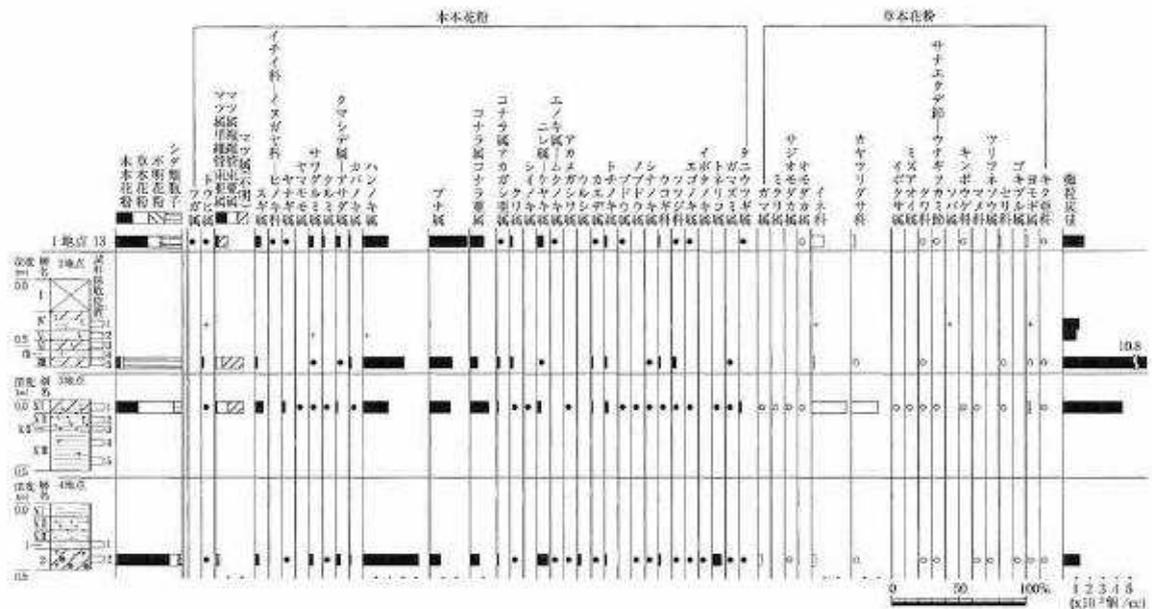
4地点試料番号2は、貧塩不定性種、真+好酸性種、流水不定性種と真+好止水性種が優占または多産する。流水不定性で沼沢湿地付着生種群 [安藤 1990] の *Pinnularia gibba*, *Eunotia minor* var. *minor* が多産し、流水不定性の *Amphora copulata*, *Eunotia pectinalis* var. *undulata*, 止水性で沼沢湿地付着生種群の *Gomphonema acuminatum*, *Stauroneis phoenicenteron* 等を伴う。

2) 花粉分析

全体的に花粉化石の保存状態が悪く、産出状況の悪い試料もある (第16図)。以下、地点別に述べる。

1地点試料番号13は木本花粉の割合が高い。木本花粉ではブナ属が多産し、ハンノキ・マツ・スギ・サワグルミ・クマシデア・アサダ・ニレーケヤキ属、コナラ属コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多く、カヤツリグサ・セリ科、ヨモギ属などを伴う。微粒炭量は1600個/ccである。

2地点は化石の保存状態が悪い。定量解析が可能な程度の花化石が産出したのは、試料番号5だけである。木本花粉ではハンノキ・マツ・ブナ属が多く産出し、コナラ亜属などを伴う。草本花粉はイネ・カヤツリグサ科、ヨモギ属などが認められる。なお、試料番号1でソバ属がみられる。微粒炭量は、試料番号5で10778個/cc、試料番号2で1000個/cc、試料番号1で1245個/ccである。



第16図 主要花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。また、微粒炭量は、堆積物1ccあたりに含まれる個数で示す。

3地点試料番号1は草本花粉の割合が高い。木本花粉では、マツ・ハンノキ・ブナ属、コナラ亜属などが多く、スギ・ニレーケヤキ・トチノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ・カヤツリグサ科が多産し、ヨモギ属などを伴う。また、ガマ・ミクリ・サジオモダカ・オモダカ・イボクサ・ミズアオイ属などの水湿地生植物に由来する花粉も認められる。微粒炭量は4431個/ccである。

4地点試料番号2は木本花粉が多産し、ハンノキ属が多産する。その他、ブナ・ニレーケヤキ・トネリコ属、コナラ亜属などを伴う。草本花粉ではガマ属、イネ科などが産出し、サジオモダカ・ツリフネソ

ウ・ゴキヅル属などの水湿地生植物に由来する花粉も産出する。微粒炭量は1270個/ccである。

3) 植物珪酸体分析

植物珪酸体は保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。また植物珪酸体含量は、3地点試料番号1で5000個/g弱、ほか2000-3000個/gの範囲にある（第17図）。以下、地点別に述べる。

1地点試料番号13は、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体が78個/g、機動細胞珪酸体が388個/gである。この他、クマザサ・ヨシ・ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められる。

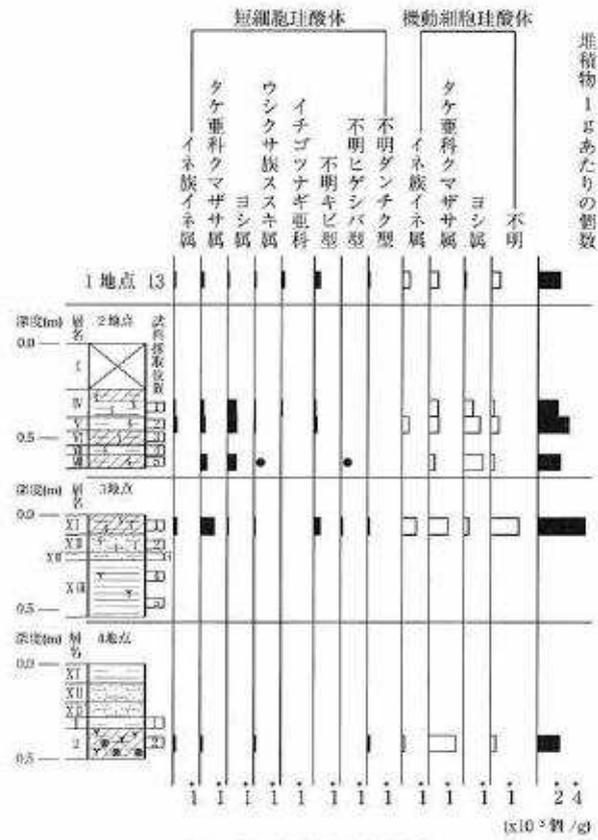
2地点では、試料番号5を除きイネ属を検出した。また、含量は少なく、試料番号1で短細胞珪酸体80個/g程度、試料番号2が短細胞珪酸体165個/g、機動細胞珪酸体が331個/gである。また、各試料からクマザサ・ヨシ・ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められ、ヨシ属の産出が目立つ。

3地点試料番号1では、イネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。その含量は、短細胞珪酸体が161個/g、機動細胞珪酸体が726個/gである。またクマザサ・ヨシ・ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められ、クマザサ属の産出が目立つ。

4地点試料番号2ではイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体を検出した。その含量は、短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とも129個/gである。またクマザサ・ヨシ・ススキ属、イチゴツナギ亜科などが認められ、クマザサ属機動細胞珪酸体の産出が目立つ。

4) 種実同定

SR4003 推積土及びⅧ層出土の種実同定結果を第3・4表に示す。単体試料では、木本3分類群（オニグルミ12個、エゴノキ属67個と栽培植物のモモ1個）が同定された他に、樹皮と思われる植物片が確認された。土壌試料では、木本9分類群17個、草本12分類群145個の種実が検出された他に、種類不明の種実、木材、炭化材、植物のトゲ、蘚苔類、昆虫の破片などが確認された。3地点では、試料番号6から草本のカヤツリグサ科1個、トウゴクサバノオ1個、サクラソウ5個が、試料番号8から木本のアカメガシワ1個、草本のカヤツリグサ科1個が検出された。4地点試料番号2からは、木本8分類群16個、草本10分類群137個が検出された。以下に、本分析にて得られた種実の形態的特徴などを、木本、草本の順に記す。



第17図 植物珪酸体含量

3 西部遺跡の珪藻・花粉・植物珪酸体分析、種実・樹種同定

No	時期	分類群 部位	オニグルミ		モモ		エゴノキ属		樹皮?	備考
			核 完形	破片	核 完形	破片	種子 完形	破片		
5001	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	2	
5002	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5003	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5006	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	2	-	組合して 1個体
5006	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5007	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5008	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	2	
5009	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5010	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5011	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	4	
5012	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5013	7c中葉以前	2層	-	2	-	-	-	-	-	1個半分
5014	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5015	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5020	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	2	
5023	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5025	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5026	7c中葉以前	2層	-	1	-	-	-	-	-	半分
5027	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	2	
5028	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5029	7c中葉以前	2層	1	-	-	-	-	-	-	
5030	7c中葉以前	2層	1	-	-	-	-	-	-	
5032	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5033	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5036	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5037	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5038	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5039	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5041	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5042	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5044	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	2	-	-	
5045	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	2	-	-	
5046	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	2	-	
5047	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	3	
5048	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5049	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5050	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5052	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	2	

No	時期	分類群 部位	オニグルミ		モモ		エゴノキ属		樹皮?	備考
			核 完形	破片	核 完形	破片	種子 完形	破片		
5055	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5056	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5058	7c中葉以前	2層	1	-	-	-	-	-	-	
5059	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	3	
5061	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	5	
5062	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5063	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5064	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	3	-	-	
5065	7c中葉以前	2層	-	-	-	1	-	-	-	
5066	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5068	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5069	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5070	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5071	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5072	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	2	
5075	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	3	-	-	
5076	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	2	1	-	
5077	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5078	7c中葉以前	2層	1	-	-	-	-	-	-	
5079	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5080	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5081	7c中葉以前	2層	-	2	-	-	-	-	-	食痕
5082	7c中葉以前	2層	1	-	-	-	-	-	-	
5083	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	3	
5084	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	2	-	-	
5085	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	16	-	-	
5088	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5089	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5090	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5093	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5094	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	1	-	-	
5095	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	17	
5096	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	4	
5097	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	5	
5098	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5099	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	-	-	1	
5100	7c中葉以前	2層	1	-	-	-	-	-	-	
5101	7c中葉以前	2層	-	-	-	-	4	-	-	
5102	7c中葉以前	2層	1	-	-	-	-	-	-	
-51	7c中葉頃	1層	-	-	-	-	-	-	4	

第3表 種実同定結果(単体試料5001~5102はSR4003推積土内出土)

木本

オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura) クルミ科クルミ属

核の完形、半分以下の破片が検出された。灰褐色、広卵形で頂部がやや尖る。径3~4cm程度。1本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れた個体や、縫合線上に齧歯類(ネズミなど)によると考えられる食痕が認められる個体がみられる。核は木質、硬く緻密で、表面には縦方向に溝状の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

モモ (*Prunus persica* Batsch)バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。灰褐色、広楕円形でやや扁平。長さ2.5cm、幅2.1cm、厚さ1.6cm程度。頂部はやや尖り、

基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線があり、縫合線に沿って半分に割れた個体や、縫合線上に齧歯類(ネズミなど)によると考えられる食害痕が認められる個体がみられる。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。表面

分類群	部位	3地点		4地点
		6	8	2
アカメガシワ	種子	-	1(破片)	-
ノブドウ	種子	-	-	1
イイギリ	種子	-	-	1
ケラノキ	核	-	-	2
ツツジ科	種子	-	-	3
エゴノキ属	種子	-	-	2
クニウツギ属	種子	-	-	4
ガマズミ属	核	-	-	1
ニワトコ	核	-	-	2
ミクリ	果実	-	-	14
ヘラオモダカ	果実	-	-	1
オモダカ科	種子	-	-	9
カヤツリグサ科	果実	1	1	97
イボクサ	種子	-	-	3
カラムシ属	果実	-	-	3
タデ属	果実	-	-	1
ナデシコ科	種子	-	-	2
トウゴクサハハオ	種子	1	-	-
スミレ属	種子	-	-	1
セリ科	果実	-	-	6
サクラソウ科	種子	5	-	-
不明種	実	-	10	2
木	材	+	+	+
炭	材	-	-	+
植物のトゲ		-	-	2
藤	根	-	-	+
昆	虫	+	+	+
土壌分析量	(cc)	100	100	400
	(g)	151.5	135.4	574.2

第4表 種実同定結果(土壌試料)

が磨耗した個体もみられる。

アカメガシワ (*Mallotus japonicus* (Thunb.) Mueller-Arg.) トウダイグサ科アカメガシワ属

種子の破片が検出された。黒褐色、完形ならば径4mm程度の歪な球体。破片は基部にあるY字形の稜に沿って割れており、大きさは3mm程度。種皮は硬く、表面には瘤状突起を密布しゴツゴツしている。種皮断面には内側に湾曲する櫛状構造がみられる。

ノブドウ (*Ampelopsis brevipedunculata* (Maxim.) Trautv.) ブドウ科ノブドウ属

種子が検出された。灰褐色、広倒卵体、側面観は半広倒卵形。基部の臍の方に向かって細くなり、喙状に尖る。径4.3mm程度。背面にはU字状に開いたさじ状の模様がある。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。種皮は硬く、表面は粗面。種皮断面は櫛状。

イイギリ (*Idesia polycarpa* Maxim.) イイギリ科イイギリ属

種子の破片が検出された。灰～黒褐色、完形ならば径2mm程度の広倒卵体。破片の大きさは1.5mm。頂部に円形の孔がある。頂部から基部の臍に向かって一本の溝がある。表面はスポンジ状の微細な網目模様があり、ざらつく。

タラノキ (*Aralia elata* (Miq.) Seemann) ウコギ科タラノキ属

核(内果皮)が検出された。灰褐色、半円形でやや偏平。長さ2.7mm、幅1.7mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

ツツジ科 (Ericaceae)

種子が検出された。赤褐色。楕円形、長楕円形など不定形で偏平。長さ1.3mm、幅0.8mm程度。種子本体は狭楕円形で偏平。縁には膜状の翼がある。翼表面には縦長の網目模様が配列する。

エゴノキ属 (*Stryax*) エゴノキ科

種子が検出された。灰～黒褐色、卵体など。長さ1cm、径6～7.5mm程度。頂部はやや尖り、表面には頂部から基部にかけて3本程度の太い縦溝が走る。基部は斜切形で、灰褐色の着点がある。種皮は厚く硬く、断面は櫛状。表面には微細な粒状の網目模様があり、ざらつく。種皮に食痕と思われる円形の孔が開いた個体もみられる。

タニウツギ属 (*Weigela*) スイカズラ科

種子が検出された。淡～赤褐色、長楕円形で両凸レンズ形。長さ1.1mm、幅0.7mm程度。縁にある翼を欠損する。果実頂部には稜角がある。表面は円～楕円形の窪みによる微細な網目模様がある。

ガマズミ属 (*Viburnum*) スイカズラ科

核が検出された。灰褐色、楕円体でやや偏平、長さ5.5mm、幅3.5mm、厚さ2.5mm程度。腹面正中線上にヘラ形の深い縦溝があり、背面にも不規則な縦溝がある。核表面は粗面。ゴマギ (*Viburnum sieboldii* Miquel) に似る。

ニワトコ (*Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara) スイカズラ科ニワトコ属

核(内果皮)が検出された。淡～黄褐色、広倒卵体でやや偏平、長さ2.2mm、幅1.4mm程度。基部はやや尖り、背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

草 本

ミクリ属 (*Sparganium*) ミクリ科

果実が検出された。淡灰褐色、紡錘状楕円～倒卵体。長さ4mm、径2～2.5mm程度。頂部はやや尖り、基部は切形。果皮はスポンジ状で、表面には数本の隆条が縦列する。

ヘラオモダカ (*Alisma canaliculatum* A. Br. et Bouche) オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。淡褐色、楕円形で偏平、基部は切形。長さ2.2mm、幅1mm程度。背部に深い縦溝が1本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。径1mm程度。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。

オモダカ科 (*Alismataceae*)

種子が検出された。茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。長さ2mm、幅0.9mm程度。種皮は薄い膜状で柔らかく、表面には縦長の微細な網目模様が配列する。上述のヘラオモダカ等の果皮が欠損し、種子のみが残存したものと思われる。

カヤツリグサ科 (*Cyperaceae*)

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。淡～黒褐色。三稜またはレンズ状倒卵体。径1～2.8mm程度。頂部の柱頭部分がわずかに伸びる。表面には微細な網目模様がありざらつく。

イボクサ (*Anellema keisak* Hassk.) ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。灰褐色、半横長楕円形。径1.5mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平ら。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の窪みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

カラムシ属 (*Boehmeria*) イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.3mm程度。頂部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

タデ属 (*Polygonum*) タデ科

果実が検出された。灰褐色、三稜状広卵形で長さ4.5mm、径3mm程度。果皮は薄く柔らかく、表面は微細な網目模様がありざらつく。ミゾソバ (*Polygonum thunbergii* Sieb. et Zucc.) に似る。

ナデシコ科 (*Caryophyllaceae*)

種子が検出された。茶褐色、腎状円形でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

トウゴクサバノオ (*Isopyrum trachyspermum* Maxim.) キンボウゲ科シロカネソウ属

種子が検出された。淡褐色、球体。径0.7mm程度。種皮は薄く、表面には小突起が密布しざらつく。

スミレ属 (*Viola*) スミレ科

種子が検出された。淡灰褐色、広倒卵体。径1.2mm程度。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、種皮表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

セリ科 (*Umbelliferae*)

果実が検出された。黄褐色、楕円形でやや偏平。長さ2.5mm、幅2mm、厚さ0.5mm程度。果実はスポンジ状で、表面には数本の幅広い稜があり、その間に半透明で茶褐色の油管が配列する。

サクラソウ科 (Primulaceae)

種子が検出された。茶褐色、倒台形、背面は平らで楕円状、菱形状などの4～5角形。径1mm程度。腹面は長軸方向に薄くなり稜状で、稜上の中央付近に広線形の跡がある。表面は5～6角形の窪みによる網目模様がある。

5) 樹種同定

出土材は針葉樹1種類(スギ)、広葉樹8種類(ハンノキ属ハンノキ亜属、コナラ属コナラ亜属コナラ節、ニレ・モクレン・サクラ・カエデ・エゴノキ・トネリコ属)に同定された(第5表)。この内、ハンノキ属ハンノキ亜属とトネリコ属は、幹材のほかに根材も認められた。各種類の解剖学的特徴等を記す。

スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus* subgen. *Alnus*) カバノキ科

幹材 散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のものと集合放射組織とがある。

根材 上記の幹材とほぼ同様の組織を有するが、道管壁および木繊維の細胞壁が幹材よりも薄く、道管が横断面で多角形となるものを根材とした。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

ニレ属 (*Ulmus*) ニレ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～4細胞幅、1～40細胞高。

モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

サクラ属 (*Prunus*) バラ科

散孔材で、管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させながら散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～30細胞高。

遺構	試料名	器種等	樹種
SX4001 (板9)	①	杭	ハンノキ属ハンノキ亜属
	②	杭	トネリコ属
	③	杭	エゴノキ属
	④	杭	ニレ属
	⑤	杭	コナラ属コナラ亜属コナラ節
	⑥	杭	コナラ属コナラ亜属コナラ節
SX4002 (板9)	①	杭	カエデ属
	②	杭	サクラ属
	③	杭	モクレン属
	④	杭	ニレ属
SR4003 (河川跡)	No 1335	板材	スギ
	No 1336	板材	スギ
	流木1	自然木 (流木)	トネリコ属
	流木2	自然木 (流木)	トネリコ属
	流木3	自然木 (流木)	トネリコ属
	根1	立木	トネリコ属
	根2	立木	トネリコ属
	根3	立木	ハンノキ属ハンノキ亜属<根材>
	根4	立木	トネリコ属<根材>
	根5	立木	トネリコ属

第5表 樹種同定結果

カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2~3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~40細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

エゴノキ属 (*Styrax*) エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または2~4個が複合して、年輪界に向かって径を漸減させながら散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。

トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

幹材 環孔材で、孔圏部は2~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形~楕円形、単独または2個が放射方向に複合し、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~40細胞高。

根材 散孔材で、道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管壁の厚さは中庸で、木口面では楕円形となる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1~3細胞幅、1~20細胞高。

D 考 察

1) 堆積環境変遷

3地点の珪藻化石が産出したXV層(試料番号6)は、特に多産する種類がなく、上流性河川指標種群や中~下流性河川指標種群を含む流水性種、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種や止水性種が産出する。よって、XV層は流水の流れ込みのある沼沢~湿地のような不安定な水域環境下で堆積したと考えられる。なお、珪藻化石が少なかった理由については、堆積速度が速く堆積物中に珪藻化石が取り込まれにくい状態であった、あるいは堆積後に何らかの原因によって珪藻化石が溶解したなどがあり、僅かに産出する珪藻化石の大部分が壊れたり溶解していることから、後者の堆積後に溶解した可能性がある。

4地点のXII層直下のSR4003内堆積層2層(試料番号2)は、沼沢湿地付着生種群の種数割合が多く、流水指標種が少ない。この組成から沼沢~湿地のような湿潤な水域環境であったことが示され、本層が堆積する頃は、水の流れがすでに弱まっていたと考えられる。

中世のSD2003覆土下部(1地点試料番号13)からは、沼沢湿地付着生種群が優占する。よって、本試料が堆積する頃のSD2003は、沼沢~湿地のような湿潤な水域環境下で堆積した可能性がある。ただし、化石の保存が極めて悪いことを考慮すると、丈夫な被殻のものが選択的に残存した可能性や、周囲から二次的に遺構内に混入した異地性種の可能性もあり、堆積環境については検討の余地がある。

2地点のVIII層(試料番号5)~IV層(試料番号1)では、珪藻化石がほとんど産出しない。よって、古代から中世にわたる各堆積層の堆積環境を珪藻化石から検討することが難しい。珪藻化石の産出が少ない理由は、前述のように堆積速度が速かったこと、あるいは堆積後に溶解したなどが考えられる。本遺跡が新潟平野北東部の荒川右岸の標高3mの自然堤防上と河川の氾濫の影響を受け易い場所に位置すること、産出する珪藻化石の大半が溶解していたことを考慮すると化石が少ない原因として双方の理由が考えられる。

2) 古植生変遷

周辺植生を反映する木本花粉は、ハンノキ・ブナ・マツ・ニレーケヤキ属、コナラ属コナラ亜属などが多産する。種実遺体ではオニグルミ、アカメガシワ、イイギリ、エゴノキ・タニウツギ・ガマズミ属、タラノキ、ツツジ科、ニワトコ、ノブドウなどが検出される。また、SR4003の周囲に認められた立木は、トネリコ属が4点、ハンノキ亜属が1点であった。この内、トネリコ属1点とハンノキ亜属は、木材組織の観察からも根材であることが確認された。また流木は全てがトネリコ属であった。ブナ属はコナラ亜属とともに冷温帯落葉広葉樹林の主要構成要素であり、ハンノキ属やニレーケヤキ属は、サワグルミ・クルミ・トネリコ属などとともに河畔や低湿地などで林分を形成する種を含む分類群である。よって、当時の後背山地や丘陵部にブナ属やコナラ亜属を主体とする落葉広葉樹林が、荒川沿いの低湿地などにハンノキ属を中心としてニレーケヤキ・オニグルミ（クルミ属）・トネリコ属等から形成される湿地林が形成されており、林縁部などにアカメガシワ・エゴノキ属などの高木類、タラノキ（ウコギ科）・ツツジ科・タニウツギ・ガマズミ属などの低木類、ノブドウなどの藤本類が生育していたと思われる。なお、同様の花粉化石群集は、岩船郡神林村の桃川遺跡群からも報告されており、古代～中世に同様の周辺植生が存在したことが指摘されている [バリノ・サーヴェイ株式会社2003a]。

草本類では、開けた草地を形成するクマザサ・ススキ属・イチゴツナギ亜科を含むイネ・カヤツリグサ科・ヨモギ属が多く認められ、これらの草本類が調査区付近に生育していたと思われる。水湿地生植物のガマ・ミクリ・ヨシ属、ヘラオモダカ（サジオモダカ属）やオモダカ属を含むオモダカ科、イボクサ、ミズアオイ・ゴキヅル属などは、河道内あるいは付近の河川周辺の湿地などに生育していたと推測される。なお、植物珪酸体の内、クマザサ属を含むタケ亜科は他のイネ科と比較して風化に強く、生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており [近藤1982；杉山・藤原1986]、ほかの種類よりも残留しやすいことが知られている。また日本海側の多雪地帯は、ブナを中心とした森林植生となり、ブナの林床にチシマザサ（クマザサ属の一種）が発達するとされる [宮脇1985]。よって、クマザサ属は、付近の草地だけでなく、後背地の存在していた落葉広葉樹林の林床に生育していたものも反映している可能性がある。

一方、微粒炭についてみると、多くの層準で1ccあたり約1000 - 1600個程度であるが、3地点のXI層（試料番号1）で約4400個/cc、2地点のVIII層（試料番号5）で約10800個/ccと多産する。微粒炭は人間活動と密接に関係しているとみられ、福井県の鳥浜貝塚では6000年前から微粒炭が増加することから、山野を焼き払っていたことが推測されている [安田1987]。また、微粒炭は黒ボク土中にも多量に含まれており [山野井1996；井上ほか2002]、黒ボク土の成因の一つとして、火入れによるイネ科草本類を主とする草原の維持が推定されている [松井・近藤1992]。微粒炭が多産した2地点のVIII層は古代の遺物包含層であることも考慮すると、本層堆積時の人為活動が活発であったと推測される。

3) 植物資源利用状況

1地点の中世のSD2003の覆土、および4地点の7世紀中葉より前とされるSR4003の2層から栽培植物のイネ属が検出された。この点は溝や流路が埋積する間にイネ属の植物珪酸体、それを含有する稲作耕土が混入したことを示唆しており、調査区周辺には外部にイネ属が存在したことが想定される。

また古代遺物包含層のうち、3地点のXI層ではイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出された。その産出個数は、短細胞珪酸体が161個/g、機動細胞珪酸体が726個/gである。稲作が行われた水田

跡の土壌ではイネ属の機動細胞珪酸体が5000個/g程度検出される事例が多いとされている[杉山2000]。ただし、水田遺構が検出された層位でもイネ属の含量が5000個/gを下回る例も多く、この要因について耕作期間が短いことや生産性が悪いことなどにより堆積物中に植物珪酸体が多く蓄積されなかったことが想定されている[古環境研究所1999]。今回の場合も、イネ属機動細胞珪酸体の含量が極めて少ない点を見ると、3地点のXI層で稲作が行われていたとは断言できない。

また、SR4003の2層から確認されたモモ(No.5065)は、古くから栽培のために渡来した植物とされ[南木1991]、観賞用の他、果実や核の中にある仁(種子)などが食用、薬用等に広く利用される。栽培植物のモモの可食部である種実が検出されたことから、本遺跡周辺域におけるモモの利用が推定される。

周辺で自生したと思われる分類群のうち、オニグルミは、堅果が生食・長期保存が可能で収量も多いことから、古くから里山で保護されてきた有用植物である。ブドウ科、ガマズミ属の一部は果実が食用可能である。これらの有用植物は、上述の栽培植物と共に、当該期の本遺跡周辺で入手し、利用していた可能性がある。さらに、タラノキ、エゴノキ・カラムシ・タデ属、セリ科やその他の種類にも、野生品の採取、在来種の栽培、渡来種の栽培など、種実や種実以外の部位の利用形態が考えられ[青葉1991]、今後種類の細分化が可能になれば、詳細な検討が可能となる。

一方、杭材は、SX4001が亀甲形、SX4002が方形に配列している。SX4001と同様の杭の配列は中条町六斗蒔遺跡でも検出されており、杭材は全てヤナギ属に同定されている[バリノ・サーヴェイ株式会社2005]。この樹種同定結果と杭の径が8~15cm程度で多くが施設内部に傾いた角度で打ち込まれていることから、草壁の間仕切り程度の簡単な空間が想定されている。今回の結果では、SX4001で6点中に5種類、SX4002で4点中に4種類が認められた。SX4001とSX4002で共通して認められるトネリコ属は、種類数が多い分類群であるが、いずれも比較的強度の高い材質を有する樹種であり、軽軟で保存性の低いヤナギ属で構成された六斗蒔遺跡と傾向が異なる。種類構成が多くなる結果は、特定の樹種を選択したのではなく、周囲で入手可能な木材を樹種に関係無く利用した可能性が考えられる。そうであれば、六斗蒔遺跡との種類構成の違いは、周囲で入手可能な木材の種類の違いを示していることになる。この場合、六斗蒔遺跡でヤナギ属が利用されていることから、利用可能な材質の幅が広がったことが推定される。同様の事例がまだ六斗蒔遺跡と今回の例のみであり、木材利用状況については今後もさらに資料を蓄積することがのぞまれる。

SR4003から出土した板材は、2点ともスギであった。

スギは、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易である。特に割裂性が高いことを利用して板への加工が比較的容易であり、本地域の多くの遺跡で時期に関わらず、板状を呈する木製品に多数確認されている[バリノ・サーヴェイ株式会社2003a,2003b]。スギは、扇状地扇端部等の水分の多い土地に生育することから、周囲の低地で木材の入手が可能であったことが多用された背景に考えられる。

4 昆虫遺体と推定される古環境について

A 分析方法

SR4003からは、植物遺体に混じって、多くの昆虫遺体が検出された。平面的には、河川の西端部に集中していた。取り上げ方は、河川埋土を移植ゴテで掘り下げながら、遺体が見られるとスプーン大さじ一杯くらいの周辺の土と一緒に取り上げ、目の細かいメッシュで洗浄して取り上げた。このようにして、約

25点の昆虫遺体を検出した。これらの生息環境から、当時の古環境をできるだけ推定してみた。

B 同定結果

各サンプルの同定結果は第6表の通りで、カメムシ類が3種、甲虫類が12種検出できた。それらの内、疑問種を含め、種まで特定できたのはカメムシ類が2種、甲虫類が7種であった。

詳細については、紙幅の関係で出土昆虫遺体の一覧表に譲る(第6表)。

C 推定される古環境

出土した昆虫から、可能な限り古環境を推定してみた。まず、コガネムシ科のアオドウガネ、サクラコガネ、ヒメコガネ、コアオハナムグリ、キョウトアオハナムグリ、カナブンなど、比較的明るい二次林や林縁に多いコガネムシ類が多種また多くの個体数が出土しているところから、比較的人手の入った落葉広葉樹林が周辺に広く広がっていたと推定される。樹液の出る落葉広葉樹、例えばクスギ・コナラ・ミズナラ・クリなどが多く存在した可能性が、キョウトアオハナムグリやカナブンの出土で推定される。コアオハナムグリの出土から、小花の集まった花をつける樹木なども存在したことが分かる。

ツノアオカメムシの出土から、ミズナラやイタヤカエデなど冷温帯性の樹林の存在が推定される。逆にアカスジキンカメムシ(?)の出土は、照葉樹が混じるような暖温帯性の樹種の存在も考えられる。

オオキベリアオゴミムシの出土から、湿地や水田環境が付近に広がっていたことが推定できる。また、ゲンゴロウ類の出土から、池や沼など止水域も存在したと推定できる。

総合的に、人の住む環境からそう離れたものではなく、かなり近い自然環境であったと推察できる。気候的には、現在の現地の状況とあまりかけはなれてはおらず、ほぼ同様であったと思われる。

今回出土した昆虫類は、ほぼ夏期に出現する種が大部分であり、昆虫遺体はこの時期に堆積したと考えられる。また、今回出土した昆虫遺体は、体の各部もかなり破損したものが多かったので、現地堆積ではなく、ある程度死体が流されて、体の各部位も分解されて、水のゆるやかな所に堆積したと思われる。

サンプルNo.	同定結果	目名	科名	種名	出土部位	数(破片数)	備考
5004	コアオハナムグリの後胸腹板	鞘翅目	コガネムシ科	コアオハナムグリ	後胸腹板中央部	1	先端欠損
5016	キョウトアオハナムグリの後脚関節の端半	鞘翅目	コガネムシ科	キョウトアオハナムグリ	後脚関節の端半	1	植物遺体 2
5017	ツノアオカメムシの前胸背の一部	半翅目	カメムシ科	ツノアオカメムシ	前胸背の一部	1	
5018	アオゴミムシの一種の左上翅基半	鞘翅目	オサムシ科	アオゴミムシの一種	左上翅基半	1	
5019	アオドウガネの上翅の破片	鞘翅目	コガネムシ科	アオドウガネ	上翅の破片(一部)	2	
5021	ゴミムシの1種の上翅の一部	鞘翅目	オサムシ科	ゴミムシの一種	上翅の一部	1	
	カナブン?の前胸背の一部	鞘翅目	コガネムシ科	カナブン?	前胸背の一部?	1	
5022	コメツキムシの一種の後胸腹板	鞘翅目	コメツキムシ科	コメツキムシの一種	後胸腹板中央部	1	
5024	サクラコガネの上翅の一部	鞘翅目	コガネムシ科	サクラコガネ	上翅の一部(破片)	1	
5034	アオドウガネの上翅の破片	鞘翅目	コガネムシ科	アオドウガネ	上翅の一部	3	
5035	アオドウガネの上翅の一部	鞘翅目	コガネムシ科	アオドウガネ	上翅の一部	3	植物遺体 3
5040	ゲンゴロウの一種の上翅の一部	鞘翅目	ゲンゴロウ科	ゲンゴロウの一種	上翅の一部	1	クロゲンゴロウ?
5043	ハムシの一種の上翅の一部	鞘翅目	ハムシ科	ハムシの一種	上翅の一部	1	青色
5051	カメムシの一種の腹部腹板	半翅目	カメムシ科	カメムシの一種	腹部腹板の端の部分	1	気門列が顕著
5053	アオゴミムシの一種の左上翅	鞘翅目	オサムシ科	アオゴミムシの一種	左上翅	1	翅端部欠損
5054	サクラコガネの上翅の一部	鞘翅目	コガネムシ科	サクラコガネ	上翅の一部	2	
5057	ツノアオカメムシの前胸背の一部	半翅目	カメムシ科	ツノアオカメムシ	前胸背	1	左の突起よく残る
5060	オオキベリアオゴミムシの頭部	鞘翅目	オサムシ科	オオキベリアオゴミムシ	頭部	1	かなり完全青緑色
5073	サクラコガネの上翅の一部	鞘翅目	コガネムシ科	サクラコガネ	上翅の一部	6	
5074	ヒメコガネの上翅の一部	鞘翅目	コガネムシ科	ヒメコガネ	上翅の一部	1	
5086	ガ?の幼虫?の表皮の一部	鱗翅目	不明	ガの一種	幼虫?の表皮の一部	1	毛が2本認められる
5087	昆虫破片	不明	不明	不明	不明	3	植物遺体多量
5089	アカスジキンカメムシ?腹部腹板の一部	半翅目	キンカメムシ科	アカスジキンカメムシ?	腹部腹板の一部	1	小さな気門が見られる
5091	サクラコガネの上翅の一部	鞘翅目	コガネムシ科	サクラコガネ	上翅の一部	4	
5092	コアオハナムグリの前胸背	鞘翅目	コガネムシ科	コアオハナムグリ	前胸背	6	側縁部の下方の棘顕著

第6表 SR4003出土昆虫遺体

第Ⅵ章 ま と め

1 本遺跡の集落景観について

A 基本層序からみた西部遺跡の地形

本調査では、計5面の遺構確認面においてピット25基、土坑8基、溝状遺構22条、流路跡1か所、性格不明遺構3基を検出した。ここではこれらの遺構をのせている地形について、第10図の基本土層断面図(柱状図)を概観するなかで述べる。第10図①～⑥は平成16年度の調査区の成果を用いた。

これによると南端の荒川氾濫原から徐々に盛り上がりを見せる地形は④～⑤地点で標高のピークに達する。この④～⑤地点周辺のⅤ層上面で、溝で区画された掘立柱建物や井戸など中世期の集落(12世紀から15世紀)が検出されている[近江屋2005]。また、引き続き平成17年度に行われたⅣ層の調査では、10世紀前半の大型建物や鍛冶炉、製塩遺構などが検出されており、出土した白磁・緑釉陶器そして水晶玉や漆紙などとともに一般集落とは異なる様相を呈している[湯原2005]。標高値のピークを迎えた自然堤防の地形は、⑤から⑥へと、北に向かうにつれて徐々に標高値を下げる。Ⅹ・Ⅷ・Ⅴ～Ⅶ・Ⅳ層の遺構もこれに比例し、北に向かうにつれその検出数を下げている。

14グリッド以南(平成16・17年度調査)と本報告の調査区(14グリッド以北)との境には現況で排水路が流れている。これは第Ⅱ章で述べた、神林村小岩内地区にある磐梯朝日大橋の堰の荒川に源を発し、さらに平林地区で細分流する流れの一部である(第8図)。地形は、この排水路が流れる⑥から⑦の間で、ほかの地点の地形変化と比べても、北に向かって大きく標高値を下げている。

そして本調査区(14グリッド以北)に入り、再び⑦～⑧～⑨で微高地を形成する。本報告の遺構(特に溝状遺構)のほとんどがこの微高地周辺に展開している。

さらに北進し、再び標高値を下げた地形はしばらく水平堆積をみせ安定するが、調査区の北端⑩から⑪にかけて、みたび変化をみせる。ここでは標高値を上げる層もあれば下がる層もあり、一様な変化を示さない。調査区の北西隅(第10図A～A')ではⅪ層以下が水平堆積であるのに対してⅧ～Ⅹ層の標高値が上昇している。⑩～⑪においてもその傾向はうかがえるが、西方ではより傾向が顕著になるといえよう。

B 検出した遺構について

前述の16～20グリッドにかけての微高地には各遺構確認面で溝状遺構を多数検出している。以下、遺構確認面ごとに地形から読み取ることのできる遺構のあり方について試論を述べる。なお、各遺構の位置、規模、出土遺物の詳細は、事実記載、個別遺構図版、遺物図版などを参照していただきたい。

Ⅳ層のSD2003の北端は21グリッドの標高2.30mの等高線とほぼ重なる。本遺構が南から北に約20cmの傾斜をもって下がっていることと、先の基本土層断面図(柱状図)のあり方を併せて考えれば、この溝は南側の微高地から21～24グリッドの北側の低地(自然堤防に対する後背湿地)に向けて掘削された排水路ともいえる。同確認面で検出された、ほとんどの溝状遺構がSD2003にむかって傾斜している事実も、この地で行われた集・排水の様子を惹起させる。

また図版6の等高線の入った平面地形図をみると、B20グリッド付近の標高2.50mラインを頂点にB25

グリッド付近の標高2.10mラインをめがけて下がり、再びE25グリッド付近の標高2.40mに向かって上がるといった起伏（谷）の地形がおよそ南北方向に入っている様子がうかがえる。これが前述の断面図（第10図）で捉えることのできた南側の微高地と北側の低地の平面での姿である。

Ⅵ・Ⅶ層においてもⅣ層と同様に、19Cグリッド付近の標高2.60mを頂点に24Dグリッドの標高2.30mにむかって下がるという起伏（谷）の地形がおよそ南北方向に入っている様子がうかがえる。

遺構はSD1003・1004・1005を始めとする溝状遺構が東西に伸びており、Ⅶ層における溝状遺構の様子と変わらない。これらの溝には目立った勾配は無いが、SD1004とSD1020が前述の谷地形に望む標高2.40mの等高線付近にまで伸びており、やはり排水を意図した溝である可能性が高い。

また、SK1001・1019・1002・1017はそれぞれ同様の形状で、すべて同質の覆土が含まれるといった特徴を共有する遺構群で、23～27mの凡そ等間隔に弧状に配置されている。この「弧状」はまさに等高線が示す起伏（谷）の地形である。つまりこれらの土坑は、同じ目的・用途のために谷地形に望む場所を選地して築かれ、さらに同じ意図のもと同時期に廃棄されたものである。等間隔に配置されていることから、これらの間には有機的・直接的な関係があると想像され、あるいはひとつの構築物を構成するもの（例えば谷に面した枕列）である可能性がある。

Ⅳ層の地形図では前述したような谷地形は認められないが、第10図の基本土層断面図（柱状図）では同様の微地形が確認できる。一方、遺物出土状況図をみると、調査区内にはほまんばんに遺物のドットが見られるなかで、22・23グリッドに遺物ドットの空白が認められる。遺構の配置もほぼ同様の様子である。

C 自然化学分析から推定できる古環境

珪藻分析、花粉分析、種実同定、樹種同定、昆虫分析等の結果を簡単にまとめると、以下のようになる。

- 1) 3地点（24C）のⅩⅤ層は流水の流れ込みがある沼沢～湿地のような不安定な水域環境下で堆積したことが考えられる。
- 2) ⅩⅣ層を切って流れていた4地点のSR4003の2層は、本土層が堆積する頃には、沼沢～湿地のような湿潤な水域環境であって、水の流れがすでに弱まっていたと考えられる。
- 3) Ⅶ層の土を覆土とするSD2003下部の堆積土（4層）は、沼沢～湿地のような湿潤な水域環境下で堆積した可能性があるが、珪藻化石の保存が極めて悪いことを考えると、丈夫な被殻のものが残存したか、周囲から二次的に混入した可能性もあり、検討の余地がある。
- 4) 2地点（23A）のⅣ～Ⅶ層では珪藻化石の出土が少なかった。理由は堆積速度が速く、堆積物中に含まれる化石が相対的に少なくなったか、堆積後に溶解してしまったことが考えられる。

以上、1)～4) から、少なくともⅩⅤ層以降、本遺跡内では概ね水の流れは弱いと考えられるが、定常的な流路がなくなった後でも、荒川などの氾濫時にはその影響を受け続けたことが十分に考えられる。

次に花粉分析、種実同定、昆虫遺体分析からは以下のような結果と、それに伴う特徴が考えられる。

- 5) 花粉分析・種実同定の結果は、各時代において楓、ブナ・コナラ亜属のような冷温帯落葉広葉樹やハンノキ・トネリコ属のような河畔や低湿地などに林を形成するような樹種が見られる。その他、アカメガシワ・エゴノキ属・タラノキ・ガマズミ・ノブドウなども確認されていることから、山地や丘陵部には落葉広葉樹林が形成され、林縁部にはアカメガシワ・エゴノキ属などの高木類、タラノキ・ガマズミなどの低木類、ノブドウなどの藤本類が生育し、本遺跡を含む周辺の低湿地にはハンノキ・トネリコ属を中心とする湿地林が形成されていたと考えられる。

1 本遺跡の集落景観について

- 6) さらに、イネ科・カヤツリグサ科・ヨモギ属など人里近くを開けた草地を形成する草本類が多く認められる。
- 7) SR4003から検出した昆虫遺体の分析結果から、夏期に出現する昆虫が多く、体の各部位もかなり破損したものが多くことから、その時期にある程度死体が流されてきて堆積したことが想定できる。
- 8) 出土昆虫から推定される植生は以下の通りで、花粉分析や樹種同定結果との間に整合性が見られる。
 - 比較的明るい二次林や林縁に多いコガネムシ類が多種多量に出土していることから、周辺に比較的人手の入った落葉広葉樹林があることや、ツノアオカメムシの出土から冷温帯性の樹種が存在している。
 - 逆にアカスジキンカメムシの出土は、照葉樹が混じるような暖温帯性の樹種の存在が考えられる。
 - オオキベリアオゴミムシの出土から、湿地や水田環境が付近に広がっていた。
 - ゲンゴロウの出土から、付近に池や沼などの止水域の存在が推定できる。

それに加えて、昆虫遺体はすべてSR4003出土で、時期は7世紀中葉より前に限定されるが、現在の遺跡周辺の分布状況とはほぼ同様であることが指摘できる。

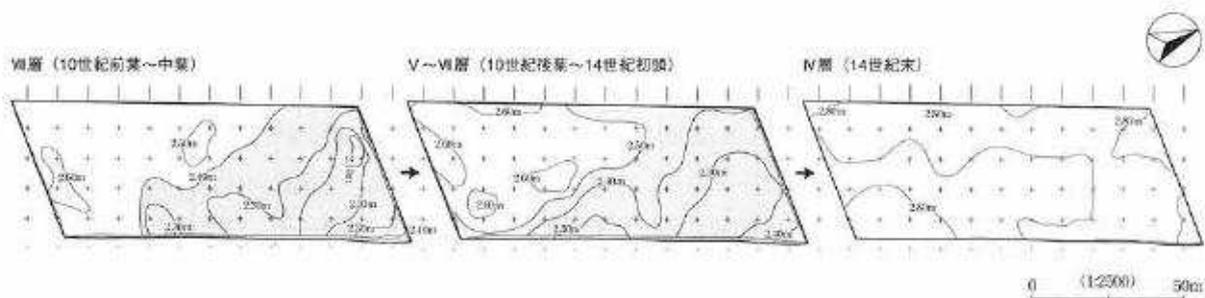
これらの分析結果などから、本遺跡周辺の自然景観は、東部の山地・丘陵部に落葉広葉樹林を望み、山地・丘陵裾部には林床に藤本類などが繁茂するエゴノキ属やタラノキなどの高木・低木林が展開する、というものであったと考えられる。さらに、次のような推定も行っている。

- 9) 2地点(23A)のⅧ層中からは、人間の活動と密接に関係する多量の微粒炭が出土し、本土層堆積時には活発な活動が行われていたことが考えられる。

このことは、本土層から多量の土師器碗が出土したという調査結果との間に整合性が認められるが、珪藻分析でも指摘しているように他の時期でも、荒川の氾濫で人間の活動の痕跡が流されてしまっている可能性があることや、8世紀末～9世紀初頭の須恵器が出土するⅦ層、9世紀後半の須恵器が出土するⅩ層、13世紀末～14世紀初頭の青磁が出土するⅤ層、14世紀末の青磁が出土するⅣ層の存在などから、本遺跡周辺で、荒川によって形成された自然堤防などの微高地上に古代から連続と続く集落の営みを窺わせる遺物が出土しており、出土遺物量の多寡だけで、Ⅷ層が形成された時期(10世紀代)が飛びぬけて活動的な時期であったかどうかを論じることはできない。

D 往時の地形と土地利用の復元

前項までに、基本層序の分析から本調査区が荒川右岸の自然堤防端の後背湿地とも言うべき環境にあったことを推測し、自然化学分析からこれを補足した。また同時に、検出された遺構が往時の自然地形を意



第18図 谷地形の変遷(N～Ⅶ層)

識して配置されている可能性を指摘し、中でも溝状遺構が、その傾斜方向から排水施設であったことを推定した。ここで再度振り返り、分析によって得られた地形の変遷と遺構のありかたを、遺物の出土状況とあわせて以下にまとめる。(第7表)

古代から中世にわたる約400年の間、自然堤防の端の後背湿地に臨む本調査区において、往時の人々は排水施設として溝を何度も掘り続けていた。彼らは適切に地形を見極めその営みをおくっていたのである。

Ⅷ層	6世紀末～7世紀中葉	地形	流水を伴う流路が東西に走る。
		遺構	流路の周辺に僅かに営み(杭列)がみられる。
		自然	流路が埋没する頃は、沼沢～湿地のような湿潤な水域環境。
Ⅹ～Ⅺ層	8世紀末～9世紀後半	地形	調査区南側の微高地は未発達。
		遺構	調査区内の営みは僅かである。
		遺物	須恵器が一定量出土しており、人間の営みをうかがわせる。
Ⅸ層	10世紀前葉～中葉	地形	調査区中央に南北に貫く谷地形が出現し、南側の微高地と北側の低地(谷)に大別される。
		遺構	南側の微高地には、東西に走る溝と南北に走る溝が築かれ、北側の低地に排水する。
		遺物	ロクロ土師器が多く出土。分布と型式の差から南と北の2グループに大別される。
Ⅴ～Ⅷ層	12世紀後半～14世紀初頭	自然	多量の微粒炭から人間の活動が読み取れる一方で沼沢～湿地のような湿潤な水域環境。
		地形	谷地形の規模は、ほぼ以前ののまま。
		遺構	谷に排水するための溝は東西の溝のみ。谷の際に沿って土坑が掘られる。
Ⅳ層	14世紀末	遺物	出土遺物は南方に僅かである。
		地形	谷地形が無くなる一方で南側の微高地の範囲は北方に広がる。
		遺構	高地の進出に伴い、排水溝の位置も20グリッド周辺にまで広がる。
		遺物	珠洲系・常滑・瀬見等がほぼ調査区全域から出土するが、中央部に遺構と遺物の空白域がある。

第7表 本調査区における土地利用の変遷

2 XIII層検出の杭列について

本調査では、Ⅷ層中位から2基の杭列を検出した。このうち、SX4001は杭が六角形に回る平面形で、以下、形状から「亀甲形杭列」と呼ぶ。SX4002は北東から南西方向に2列の杭列を検出し、SX4001同様、亀甲形杭列になる可能性も残しているが、本章では「方形杭列」と呼ぶ。

両遺構とも流れの少ない湿潤な水域環境の中で堆積した、Ⅷ層の暗青灰色粘質土の混土層の中に埋没している。Ⅷ層からは、8世紀末～9世紀前葉ころに位置づけられる須恵器〔坂井1984・1989〕が出土しているが、Ⅷ層からは時期判断できる遺物が出土していないので、SX4001・4002について、杭の放射性炭素年代測定を行ったところ、6世紀末～7世紀中葉という値を示した。

このことから、Ⅷ層とⅧ層の間には1世紀以上の開きがあるため、遺構が構築された年代は放射性炭素年代測定から、6世紀末～7世紀前半頃と考えても差し支えないが、廃絶年代の特定は困難である。

次に、検出した杭の特徴について若干触れたい。両遺構とも鉄斧等の利器を使用して作ったと思われる先端を尖らせた杭を利用している。先端に近い部分のみの残存であり、上半部はⅧ層堆積時かそれよりも前の段階で欠失したものと考えられる。SX4002の方はかなり腐食が進んでおり、明瞭な切削痕を観察できるものは少ない。SX4001も2点は腐食が著しく、ほとんど残存していなかったが、ほかは比較的良好に残存していた。各杭を見ると一方向からの切削でも一度で切り取れないため、何度か斧を打ち込みながら切削して整形している状況が観察できる。

次に、両遺構の杭が家屋のような比較的しっかりした建造物の部材として利用された可能性はないものかどうかについて考えてみる。

構造物の部材としての杭には大きく見て次の二つがある。

一つは摩擦杭である。摩擦杭は、先端が支持層（それ以上貫入できないような硬い地層）に届かない場合に機能する。さらに、建物の荷重を支持するだけでなく、杭先端までの地層がランダムに変化する場合、沈下量を平均化する。つまりこれは杭表面と地層との間の周面摩擦抵抗が働いて、杭が沈下するのを防ぐ効果がある。この場合の地層としては粘土・粘質土が最も抵抗を高める土層として有効である。

もう一つは先端支持杭である。先端支持杭は、支持層まで打ち込むことによって機能する。杭を壊さない範囲の力ではそれ以上貫入できないような“打ち止まり”状態になれば先端支持杭になる。つまり先端支持抵抗を利用した工法である〔吉見・橋場1976〕。

軟弱な粘性土層が厚く堆積する本遺跡では、何らかの構築物を建てる場合、摩擦杭が効果的であることは明白で、SX4001・4002で杭が使用されたことは首肯できよう。

SX4001・4002とも約半数の杭は不定方向に傾いた状態で検出したが、これは時代が違うものの亀甲形杭列を検出した六斗蒔遺跡〔岡安ほか2005〕でも同じ状況である。さらに、上部構造に密接にかかわると考えられる特徴として、杭の打ち込み深度が一定ではないということを挙げることができる。

六斗蒔遺跡でも本遺跡でも各杭の傾き具合に差があり、かつ不定方向に傾いていることを考慮すると、その理由として二つの場合が考えられる。一つは、当初から斜めに打ち込まれた場合、もう一つは倒壊時または倒壊後に外部の力によって歪んだ場合である。前者の場合は、検出杭そのものが上屋構造部材の一部としての機能を果たすことはできない。しかし、基礎杭としての機能のみであるとも考えることも可能である。つまり、地上に杭頭だけが露出し、それに根がらみ貫（立柱の地面にそれぞれの柱を連結する横棧的な部材）と土台とを兼ね備えるような大き目の部材を連結し、その部材の上に立柱する構造が考えられる^{註)}。これだと杭材に使用する樹種や太さはそれほど重要な要素ではなくなる。

これをSX4001・4002及びこれらが立地する環境に当てはめると、SX4001は南北約3.2m、東西約2.5mで、内法の面積は約8.1m²である。SX4002は同じく約1.8m四方で、面積は約3.3m²である。両遺構が立地する環境としては、前段階に自然流路SR4003が存在するような低湿地である。

これら遺構の規模や立地環境から、大規模な構築物が築かれていたとは考えにくい。上述したような工法・構造である程度のしっかりした構築物が築かれていた可能性も否定できず、今後の調査における留意点として提起しておきたい。

本遺跡が所在する岩船地域には、7世紀中葉に造営されたといわれる「磐舟欄」の存在が想定されている。現時点でSX4001・4002は、性格を明確にし得ないことや周辺に同時期の遺構・遺物が存在しないといった状況などから、「磐舟欄」を構成する遺構とは言いがたい。しかし、今後の調査で構造・性格・「磐舟欄」との関連性の有無などが明らかになることを期待したい。

3 Ⅷ層遺物包含層出土土師器の編年的位置付け

本遺跡では遺物の出土が少なかったが、その中で、一定の出土量があったのは本項で扱うロクロ成形土師器と次項で扱う珠洲・珠洲系を中心とする中世の陶磁器類である。

Ⅷ層中から出土した土師器は、本文中でも触れたように調査区の南部と北部に偏在している。その理由については本文と重複するので割愛し、以下に編年的位置付けについて触れてみたい。

註) 二瓶稔氏から柱を連結する部材としての「根がらみ貫」の効用についてご教示いただいた。

Ⅷ層出土の土師器甕年に関しては春日氏 [1997・2004・2005] に準拠して見ていくこととする。

まず、出土遺物の法量に関して、土師器碗の口径と底径の数量をまとめたものが第19・20図である。

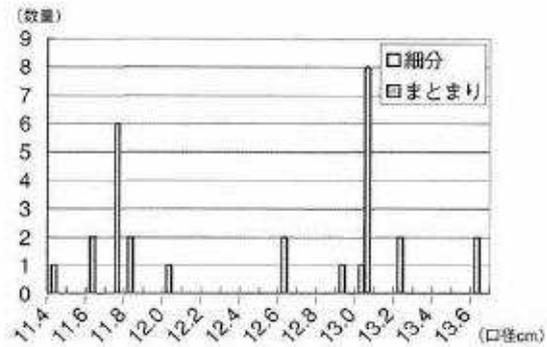
これは報告書に掲載した遺物のほか、各直径が算出できるものはすべて選抜したものである。よってわずかな誤差は考えられるが、傾向を見るには差し支えない。

ただし、調査区北部はサンプル数が少ないため、ここでは南部から出土した遺物のみを扱った。なお、口径と底径の数量グラフは、1mm単位の数量(細分)と一定範囲(まとまり)でまとめたものの2種類を同一グラフの中で示した。まとまりの具体例は、口径が12.0cm以下と12.6～13.6cm、底径が4.2cm以下、4.3～4.7cm、4.8～5.2cm、5.3～5.7cm、5.8～6.2cmである。これを見ると、口径は11.4～12.0cmの範囲に納まるものと12.6～13.6cmの範囲に納まるものの2群に分かれるが、底径は第20図の「まとまり」の棒グラフをみると、5.0cmを中心として、約4.0～7.0cmの範囲で全体が「山」状に分布する状態が見える。

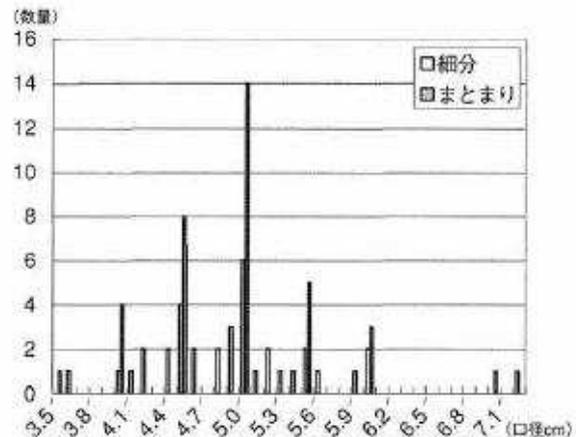
次に、口径と底径がわかる13点の碗についてみると27や80のように底径がはっきりしないものや明らかに異質な形態を持つものは別として口径12cm台半ばから後半のものは底径が4.5cm内外、口径13cm台前半から半ばのものは同4.8～5.0cm、その他14cm台で同5.5cmと大型のものも1点出土しており、概ね対応関係は見られる。

このことから、最も数量の多い底径4.5～5.0cmを示すものは、口径も12cm半ばから13cm半ばまでと考えられ、底径4.0cm内外のもの口径は12cm以下の一群に対応するものと考えられる。この場合、一定量存在する底径が5.5cm以上のものは口径も14cmを凌駕すると思われるが、本遺跡でそれがはっきりしているのは、北部出土の82だけである。第19図では口径で2群に分かれることは読み取れるが、これ以外にもう一回り大きな法量を持つ一群の存在が想定できる。

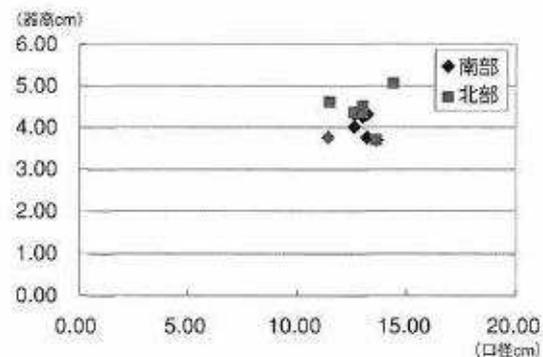
次に口径と器高の比をグラフにしたのが第21図である。27・80・82のように群からかけ離れた碗も見られるが、これらを小型と大型の一群に属するものとみれば、このグラフも意味を持ってくるものと考えられる。さて、ここでは中型の一群にあたる遺物について見てみるが、◆は調査区南部出土の碗で、■は北部出土の碗



第19図 土師器碗口径数量



第20図 土師器碗底径数量



第21図 土師器碗口径/器高分布図

である。これを見る限り若干の例外はあるものの、北部出土の碗の器高が高い傾向が読み取れる。

このほか、調査区北部・南部とも口縁部が外反するものとならないものが混在すること、底部は調査区南部には突出しない平底が多く、北部には突出する平底が多いこと、といった南部と北部の形態的な異同が、どの程度時間的な差として捉えられるかは不明であるが、上述した形態的特徴から見て、北部・南部をとおした全体的な時期としては、10世紀前葉～中葉を中心とした時期が考えられる。

これら碗の形態差や分布域の違いと本文中で触れた地形の有り様から、両地区の遺物はそれぞれ別の場所から供給された可能性が高い。南部は調査区南側の14グリッド以南のものとして間違いなく、北部は今回の調査で、調査区北側に向かって地形が高くなる傾向が見られることから、そちらに展開する遺跡から供給されたことが考えられる。この点については今後の調査に期待したい。

4 珠洲焼を中心とした中世の出土遺物について

本遺跡からは、珠洲・珠洲系、渥美・常滑、瀬戸、青磁のほか、越前と思われる遺物も出土している。

ほとんどは珠洲・珠洲系の遺物で、出土層位もⅣ・Ⅴ層を中心とする。平面的な分布は本文中の全体図のとおり濃淡はあるが、ほぼ調査区全域から出土している。このうちSD0014の東側から117や118といった器種の明確なものや大型破片が集中して出土している。

本文では遺物をⅣ層とⅤ層に分けて掲載したが、Ⅴ層の珠洲・珠洲系の壺89・93、渥美・常滑の97～100の甕または壺の口縁部や101・102の甕体部片の押印文とⅣ層の珠洲・珠洲系の甕111・112、壺115～117、渥美・常滑の120～122の甕または壺等をみると、珠洲・珠洲系のⅠ期〔吉岡1994〕、常滑焼2型式期後半から3型式期にかけての遺物が多い〔中野1994〕。これらは12世紀後半の実年代が与えられるが、共伴する青磁はⅤ層の105～107は13世紀後半～14世紀初頭、Ⅳ層の126・127は14世紀末の遺物である。

珠洲・珠洲系遺物の中で、甕・壺は数世代伝世するといわれており、最も消耗度が高いのが片口鉢である。Ⅴ層の95、Ⅳ層の118のように古い形態を示すものもあるが、Ⅴ層94やⅣ層119のようにⅢ期からⅣ期前半に位置付けられる可能性を持つものもある。

このことから、Ⅳ・Ⅴ層の共伴関係のうち、最も新しい時期の遺物である青磁から見ると、Ⅳ層は14世紀末、Ⅴ層は13世紀後半～14世紀初頭という時期が想定できる。

さらに、Ⅵ層からも珠洲・珠洲系Ⅰ期と考えられる遺物が出土しているが、ほかに共伴遺物がないことから、当該層が12世紀後半の土層と考えられる。

要 約

- 1 今回の調査範囲は、新潟県北部の岩船郡神林村大字牛屋1025番地ほかに所在する。遺跡は荒川右岸の自然堤防上およびその後背湿地に位置する。
- 2 本発掘調査は日本海東北自動車道の建設に伴って、平成17年度に実施した。実質的な調査の延べ面積は20.155m²である。
- 3 調査の結果、古代の遺構が検出された層は、Ⅻ、Ⅺ、Ⅹ層のそれぞれ上面およびⅪ層中と、中世の遺構が確認されたⅣ、Ⅴ層のそれぞれ上面の計6面の文化層が確認された。また遺物は古代のものがⅫ～Ⅹ・Ⅲ層から、中世のものはⅥ～Ⅳ層からそれぞれ出土した。
- 4 古代はⅫ層の遺構として、杭列を2基検出した。時期は年代測定(AMS)により6世紀末から7世紀中葉と思われる。その下層からは下限が6世紀末と考えられる自然流路を1条検出した。Ⅺ層の遺構としては、溝2条、土坑2基を検出したが、遺構から時期を示す遺物の出土はなかった。Ⅳ層の遺構としては、溝7条、ピット2基である。遺構に遺物は伴わないものの、出土遺物から10世紀前葉～中葉の所産と考えられる。

古代の遺物は土師器、須恵器が出土した。この内大半はⅣ層中から出土した土師器である。土師器は無台碗が多く、内黒碗や甕が少量含まれる。また須恵器は小片が数点である。このほかではⅩ、Ⅺ層でごくわずかに須恵器片の出土があった。

- 5 中世はⅤ～Ⅶ層を覆土とする遺構として溝5条、土坑5基、ピット10基を検出した。Ⅴ・Ⅵ層の出土遺物から、12世紀後半～14世紀初頭と考えられる。Ⅴ層の遺構としては、溝9条、土坑1基、ピット13基である。遺構からの出土遺物はないが、周辺の出土遺物から時期は14世紀末と思われる。また、近世と思われる凹地状遺構を1基確認した。

中世の遺物は、珠洲、渥美・常滑、青磁、瀬戸、越前、石製品等の出土があり、大半は珠洲である。石製品は砥石である。

近世の遺物は、肥前系陶磁器、信楽系陶磁器、黄銅製筥、銭貨等である。

- 6 上記3のとおり複数の文化層を確認した。いずれの面からも、少量ではあるが溝・土坑・ピット等を検出している。しかし、各時期の生活域の中心といえるほどの遺構は検出できず、遺物についてもその在り方は同様であった。比較的多量に出土したⅣ層遺物包含層中の土師器の出土分布をみると、調査区の南側に偏在することが判る。これは14グリッド以南の自然堤防上に展開する遺跡の影響であると解釈できる。加えて、遺跡全体の断面図からも、西部遺跡中心部の北限は14グリッドラインに沿うように流れる現排水路周辺にあることが確認できる。

一方、出土量はさほどではないが、調査区北側においてもⅣ層遺物包含層中からの土師器の出土が認められるほか、調査区西壁断面北端ではⅣ層が北に向かって上昇傾向を見せている。このことは、調査区全体を見渡した時、中央部付近で遺跡がいったん途切れ、北側には新たな遺跡が展開することを示唆しているものと考えられようか。

引用・参考文献

- 大川恵美 1998 「新潟平野北東部の地形変遷と遺跡分布」 新潟大学理学部自然環境学科地球環境科学大講座 卯田研究室ホームページ (<http://env.sc.niigata-u.ac.jp/uda>) 卒業論文論旨
- 岡安光彦 2005 「第Ⅱ章 地理的環境 1 地理的環境」『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅵ 六斗葎遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 岡安光彦・大谷祐司 2005 「第Ⅳ章 遺構 3 各説 A 杭列」『第Ⅴ章 まとめ 2 遺構と遺物 F 杭列』『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅵ 六斗葎遺跡』 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 近江屋成陽 2005 「第Ⅱ章 遺跡の位置と環境 1 地理的環境 2 歴史的環境」『第Ⅲ章 調査の概要 2 基本層序』『第Ⅳ章 遺構 2 遺構各説』『第Ⅴ章 まとめ 3 近世』『日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅵ 西部遺跡Ⅰ』 新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「越後における 10・11 世紀の土器様相」『北陸古代土器研究第 7 号』 北陸古代土器研究会
- 春日真実 2004 「第Ⅱ章 磐船郡の土器様相 1 荒川右岸」『越後阿賀北地域の古代土器様相』新潟古代土器研究会
- 春日真実 2005 「越後における奈良・平安時代土器編年の対応関係について—「今池編年」・「下ノ西編年」・「山三賀編年」の検討を中心に—」『新潟考古第 16 号』 新潟県考古学会
- 金子拓男 1996 「大化元年「越国奏上」についての検討」『越と古代の北陸』 古代王権と交流 3 名著出版
- 神林村史編纂委員会編 1985 『神林村史』 通史編 新潟県神林村
- 坂井敬子 2002 「胎内川・荒川下流域の地形形成に関する研究」 新潟大学理学部自然環境学科地球環境科学大講座 卯田研究室ホームページ (<http://env.sc.niigata-u.ac.jp/uda>) 卒業論文論旨
- 坂井秀弥 1984 「第Ⅵ章 考察 1 今池遺跡群における奈良・平安時代の土器」『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』 新潟県教育委員会
- 坂井秀弥 1989 「第Ⅷ章 まとめ 2 奈良・平安時代の土器」『新新バイパス関係遺跡発掘調査報告 山三賀Ⅱ』 新潟県教育委員会・建設省新潟国道工事事務所
- 沢田由治 1989 『日本陶磁大系 7』 平凡社
- 田辺早苗^{ほか} 2001 『神林村埋蔵文化財調査報告第 9 衣田遺跡・道上遺跡』 新潟県神林村教育委員会
- 中野晴久 1994 「生産地における編年について」『全国シンポジウム 中世常滑焼をおって』 日本福祉大学知多半島総合研究所
- 平松由紀子^{ほか} 2003 「新潟県北東部における扇状地微地形と流路形態との関係」『地球惑星科学関連学会 2003 年合同大会 予稿集』 日本地球惑星科学連合
- 福井県陶芸館編 1986 『越前名陶展 図録』 福井県陶芸館
- 水澤幸一 2005 「越後の中世土器」『新潟考古 16 号』 新潟県考古学会
- 水野九右衛門・吉岡康暢 1976 『日本陶磁全集 7 越前・珠洲』 中央公論社
- 村上市史編纂委員会 2000 『村上市史』 別編 絵図・地図・年表 新潟県村上市
- 湯原勝美 2005 「西部遺跡現地見学会資料」財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・有限会社山武考古学研究所
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
- 吉見吉昭 2005 「摩擦杭と先端支持杭」『地盤と建築基礎』 吉見吉昭ホームページ (<http://homepage2.nifty.com/yoshimi-y/>)
- 青葉 高 1991 『野菜の日本史』 八坂書房
- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理 42』
- 井上淳・吉川周作・千々和一豊 2002 「琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について」『日本第四紀学会講演要旨集 32』

- 古環境研究所 1999 「プラント・オパール分析から見た静岡バイパス関連諸遺跡」『静岡・清水平野の埋没古環境情報 考古学的調査と自然科学分析資料・建設省地質調査資料から見た古環境の様相 ——一般国道1号線バイパス埋蔵文化財発掘調査1984～1993——』財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 杉山真二 2000 「植物珪酸体（プラント・オパール）」『辻誠一郎編著 考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社
- 南木睦彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究4 生産と流通』石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編 雄山閣
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2003a 「樋渡・堀下遺跡の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告第18 樋渡遺跡・堀下遺跡』新潟県岩船郡神林村教育委員会・有限会社山武考古学研究所
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2003b 「桃川遺跡群の自然化学分析」『神林村埋蔵文化財報告第19 桃川遺跡群 石川遺跡・草田遺跡・桃川板碑・堀下瓦窯跡』新潟県岩船郡神林村教育委員会・有限会社山武考古学研究所
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2005 「自然科学分析」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第143集 日本海沿岸東北自動車関係発掘調査報告書Ⅵ 六斗峠遺跡』新潟県教育委員会・財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 松井健・近藤鳴雄 1992 「土の地理学 ——世界の土・日本の土——」朝倉書店
- 安田喜憲 1987 「文明は緑を食べる」読売新聞社
- 山野井徹 1996 「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』102

別表1 出土遺物観察表 (1)

凡例

1. 法量 [] 内は測定値、() 内は残存数である。

2. 色調 小山正忠・竹原秀雄「新編 器土色表」農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所 2002 による。青磁・白磁・瀬戸・建前は左；粘土色、右；磁滴

3. 彫物等 長：長石、石；石系、赤；赤系、黄；黄緑系、青；青系、黒；黒系、白；白色粒子、黒；黒色粒子、赤；小石

報告No	類別	器種	出土位置			法量 (cm)	土質	色調			彫物	備考
			グリップ	選層	層位			口径	底径	器高		
1	土師器	甕	10D4	SR4003	2	-	φ6mm以下の石・長・赤・小を大量に含む	内面 黄褐色 外面 黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)		
2	土師器	甕	11C1	SR4003	2	-	φ7mm以下の石・赤・黄・小を大量に含む	内面 黄褐色 外面 黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)		
3	木製品	板		SR4003	2	別表3参照						
4	木製品	板		SR4003	2	別表3参照						
5	石製品	砥石	10C20		重	別表2参照						
6	部材	木炭		SX4001		別表3参照					亀甲形炭列部材 (SX4001-1)	
7	部材	木炭		SX4001		別表3参照					亀甲形炭列部材 (SX4001-4)	
8	部材	木炭		SX4001		別表3参照					亀甲形炭列部材 (SX4001-5)	
9	部材	木炭		SX4001		別表3参照					亀甲形炭列部材 (SX4001-3)	
10	部材	木炭		SX4001		別表3参照					亀甲形炭列部材 (SX4001-6)	
11	部材	木炭		SX4001		別表3参照					亀甲形炭列部材 (SX4001-7)	
12	部材	木炭		SX4002		別表3参照					方形炭列部材 (SX4002-1)	
13	部材	木炭		SX4002		別表3参照					方形炭列部材 (SX4002-2)	
14	部材	木炭		SX4002		別表3参照					方形炭列部材 (SX4002-3)	
15	部材	木炭		SX4002		別表3参照					方形炭列部材 (SX4002-5)	
16	土師器	甕	406		Ⅲ	-	φ1mm以下の石・赤・黄・黒を多く含む	内面 黄褐色 外面 黒褐色	ヘラ削り	ハケ目		
17	須恵器	杯	829		Ⅲ	7.35	φ1.5mm以下の長を多く含む	内面 灰色 外面 灰色-暗灰色	回転ナズ	口~唇上：回転ナズ 体下~底：ヘラ削り→ナズ		
18	須恵器	有台杯	878		Ⅲ	[100]	φ1.5mm以下の長・石を多く含む	内面 灰白色 外面 オリーブ灰色 黄灰色	回転ナズ	体部：回転ナズ 底部：回転ヘラ削り		
19	須恵器	杯	4E6		Ⅲ	[9.80]	φ5mm以下の長・石を多く含む	内面 灰白色 外面 灰白色	回転ナズ	体部：回転ナズ 底部：ヘラ削り		
20	土師器	椀	12B4		Ⅲ	[14.0]	φ1mm以下の長・石・赤・黄・黒を多く含む	内面 黄色 外面 黄色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)		
21	土師器	椀	2C25		Ⅲ	-	石・赤・黄・白を若干含む	内面 黄褐色 外面 黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	内面の一部に漆行着	
22	須恵器	杯	3D17		Ⅲ	-	長・赤を少量、黄を多く含む	内面 灰色 外面 灰色	回転ナズ	不明 (磨滅)		
23	土師器	椀	2A17		Ⅲ	5.0	φ5mm以下の長・石・小を多く含む	内面 黄褐色 外面 黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	体：不明 (磨滅) 体：回転表削り	

別表1 出土遺物観察表 (2)

報告No.	種別	器種	出土位置 アグリッド 座標	高さ (cm)	口径	底径	器高	出土	構成	色 調			備 考
										内 面	外 面	外 面	
24	土師器	瓶	3C11 3C6	[129]	4.5	4.0	4.0	φ4mm以下の長・石・雲を多く含む	通有	褐色	褐色	褐色	口~体:回転ナデ 底:不明(磨減)
25	土師器	瓶	4D22 4E2	[432]	5.0	4.3	4.3	φ25mm以下の長・石・雲を若干含む	通有	浅黄褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	口:回転ナデ 体:不明(磨減) 底:回転糸切り
26	土師器	瓶	3C7	[120]	-	(3.20)	-	φ1mm以下の長・石・雲を多く含む	通有	にぶい褐色	にぶい褐色	回転ナデ	回転ナデ
27	土師器	瓶	3C11 3C6	114	3.6	3.75	3.75	φ3mm以下の石・長・小を多く含む	やや不良	にぶい黄褐色 褐色	浅黄褐色 褐色	回転ナデ	体:回転ナデ 底:回転糸切り
28	土師器	瓶	3C14	[126]	[50]	(4.3)	(4.3)	φ3mm以下の石・雲を若干含む	やや不良	浅黄褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
29	土師器	瓶	1A5	[130]	[49]	4.25	4.25	φ1mm以下の長・石・雲・角を多く含む	通有	浅黄褐色	浅黄褐色	回転ナデ	体:回転ナデ 底:回転糸切り
30	土師器	瓶	3C7	[136]	-	(3.75)	-	φ1mm以下の長・石・雲・角を多く含む	通有	浅黄褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
31	土師器	瓶	3C14	[118]	-	(2.6)	(2.6)	φ4mm以下の長・石・雲・白を若干含む	やや不良	浅黄褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
32	土師器	瓶	3C14	[116]	-	(3.2)	(3.2)	φ3mm以下の石を若干・雲を少し含む	やや不良	浅黄褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
33	土師器	瓶	3C14	[118]	-	(3.5)	(3.5)	φ4mm以下の長・石・雲・白を少し含む	やや不良	にぶい黄褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
34	土師器	瓶	3C7	[124]	-	(3.9)	(3.9)	長・石・雲を多量に含む	やや不良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
35	土師器	瓶	3C12	[129]	-	(3.8)	(3.8)	φ25mm以下の長・石・雲を多く含む	通有	褐色	褐色	回転ナデ	不明(磨減)
36	土師器	瓶	3C14	[136]	[49]	(3.7)	(3.7)	φ3mm以下の石・雲を若干含む	やや不良	浅黄褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
37	土師器	瓶	3C8	-	-	(3.0)	(3.0)	φ0.5mm以下の雲・跡を若干含む	通有	にぶい黄褐色	褐色 にぶい黄褐色	回転ナデ	内面残存部に4本の沈線が認められる
38	土師器	瓶	2B18	-	4.0	(0.95)	(0.95)	φ0.5mm以下の雲・跡を若干含む	通有	黄褐色	黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
39	土師器	瓶	2C14	-	4.1	(1.15)	(1.15)	石・小を少量、雲を若干含む	通有	にぶい黄褐色	にぶい褐色	回転ナデ	体:回転ナデ 底:回転糸切り
40	土師器	瓶	3D24	-	[45]	(0.8)	(0.8)	φ3mm以下の石・雲・跡を若干含む	通有	浅黄褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
41	土師器	瓶	5C12	-	4.5	(2.0)	(2.0)	φ2mm以下の長・石・雲・跡を多く含む	通有	褐色	褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
42	土師器	瓶	2C5	-	4.4	(1.4)	(1.4)	φ2mm以下の石・雲・跡を多く含む	やや不良	にぶい褐色	浅黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
43	土師器	瓶	3D24	-	[46]	(2.4)	(2.4)	φ1mm以下の雲・跡を若干含む	やや不良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
44	土師器	瓶	3C6	-	5.0	(1.0)	(1.0)	φ3mm以下の長・石・雲・跡を多く含む	通有	褐色	褐色	回転ナデ	体:回転ナデ 底:回転糸切り
45	土師器	瓶	2B1	-	4.9	(0.95)	(0.95)	長・雲を少し含む	通有	灰白色	灰白色	回転ナデ	体:回転ナデ 底:回転糸切り
46	土師器	瓶	1A5	-	[49]	(1.6)	(1.6)	φ1mm以下の雲・白を少量含む	やや不良	にぶい褐色	にぶい褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
47	土師器	瓶	3C12	-	[52]	(1.45)	(1.45)	φ1mm以下の石・雲・跡を若干含む	不良	褐色 にぶい褐色	褐色 にぶい褐色	不明(磨減)	不明(磨減)
48	土師器	瓶	3A24	-	[54]	(2.0)	(2.0)	長・石を少量、雲を多く含む	通有	褐色	褐色	不明(磨減)	不明(磨減)

別表1 出土遺物観察表 (3)

報告No	種別	品類	出土位置		法隆寺 (cm)		結土	硬感	色		調整		備考	
			グリップ	遺構	口径	底径			表面	内面	外面	外面		
49	土師器	碗	2B35		Ⅲ	-	5.4	(1.6)	通有	灰白色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
50	土師器	碗	1A19		Ⅲ	-	[5.3]	(0.7)	やや不良	浅黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
51	土師器	碗	2C10		Ⅲ	-	[5.5]	(1.3)	やや不良	褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	体：不明 (磨滅) 底：回転糸切り	
52	土師器	碗	2B2		Ⅲ	-	[5.6]	(1.4)	やや不良	浅黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
53	土師器	碗	3C14		Ⅲ	-	[6.0]	(1.3)	やや不良	浅黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	体：不明 (磨滅) 底：回転糸切り	
54	土師器	碗	2B17		Ⅲ	-	[7.2]	(0.7)	通有	褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
55	土師器	碗	3C14		Ⅲ	-	[4.2]	(2.0)	やや不良	浅黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	体：不明 (磨滅) 底：回転糸切り	
56	土師器	碗	1A14		Ⅲ	-	[5.8]	(1.3)	やや不良	褐灰色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	体：不明 (磨滅) 底：回転糸切り (磨滅)	
57	土師器	碗	3B5		Ⅲ	-	[5.0]	(1.4)	通有	にぶい黄褐色	回転ナデ	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
58	土師器	碗	7D25		Ⅲ	-	5.0	(1.3)	やや不良	浅黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
59	土師器	碗	2C8		Ⅲ	-	5.1	(0.8)	通有	浅黄褐色	回転ナデ	不明 (磨滅)	体：回転ナデ 底：回転糸切り	
60	土師器	碗	2C10		Ⅲ	-	[5.5]	(3.7)	やや不良	にぶい褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	体：不明 (磨滅) 底：回転糸切り	
61	土師器	碗	3C9		Ⅲ	-	5.0	(0.8)	通有	にぶい褐色	回転ナデ	不明 (磨滅)	体：回転ナデ 底：回転糸切り	
62	土師器	碗	1A25		Ⅲ	-	[6.0]	(1.4)	良好	灰白色	回転ナデ	不明 (磨滅)	体：回転ナデ 底：回転糸切り	
63	土師器	碗	3C2		Ⅲ	-	5.2	(1.8)	通有	褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	体：不明 (磨滅) 底：回転糸切り	
64	土師器	碗	3C1		Ⅲ	-	4.9	(1.5)	通有	灰白色	回転ナデ	不明 (磨滅)	体：回転ナデ 底：回転糸切り	
65	土師器	碗	3C14		Ⅲ	-	4.8	(1.7)	通有	にぶい褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
66	土師器	碗	2B22		Ⅲ	-	4.7	(1.3)	通有	浅黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
67	土師器	碗	2B6		Ⅲ	-	[4.6]	(1.3)	やや不良	褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
68	土師器	小茶碗	2B13		Ⅲ	-	[6.4]	(1.5)	やや不良	にぶい褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
69	土師器	内茶碗	2B15		Ⅲ	-	[6.0]	(1.3)	やや不良	黒色	ヘラ緒き	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	内面黒色土器
70	土師器	葉	2B23		Ⅲ	-	-	(3.2)	やや不良	原灰黄色 にぶい黄褐色	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
71	土師器	葉	2C14		Ⅲ	-	-	(8.0)	通有	明褐色 褐色	ナデ	ナデ	ナデ	
72	須恵器	壺	2B1		Ⅲ	-	-	(6.2)	良好	明緑灰色	回転ナデ	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	
73	須恵器	壺	2C8		Ⅲ	-	-	(7.1)	良好	明緑灰色 青灰色	回転ナデ	不明 (磨滅)	不明 (磨滅)	

別表1 出土遺物観察表 (4)

標高No.	遺物類別	器種	出土位置		口径	法量 (cm)		胎土	施成	色 調			備 考
			グランド	層位		口径	高さ			底径	器高	内 面	
74	須恵器	鉢	4C18	Ⅲ	[27.5]	-	(5.4)	φ2mm以下の長・石を若干含む	良好	緑灰色	青灰色	同転ナデ	同転ナデ
75	須恵器	長頸壺	4C18	Ⅲ	-	14.1	(1.9)	φ1mm以下の長・石・雲を若干含む	やや不良	緑灰色	緑灰色	同転ナデ	同転ナデ
76	須恵器	甕	6E15	Ⅲ	-	-	-	長・石を少量含む	堅靱	灰色	灰色	同心円状アテ長頸	タナキ
77	土師器	碗	11B1・2	Ⅲ	[12.6]	4.6	4.35	φ1.5mm以下の長・石・雲・砂粒を多く含む	良好	浅黄褐色	浅黄褐色	同転ナデ	体：同転ナデ 底：不明(筋減)
78	土師器	碗	11B1	Ⅲ	13.0	4.8	4.5	φ2.5mm以下の長・石・雲・明礬色粒を多く含む	通有	浅黄褐色	浅黄褐色	同転ナデ	体：同転ナデ 底：同転糸切り
79	土師器	碗	10C15	Ⅲ	13.0	4.8	4.35	φ1mm以下の長・石・小を若干含む	通有	灰白色～浅黄褐色	灰白色～浅黄褐色	同転ナデ	体：同転ナデ 底：同転糸切り
80	土師器	碗	12B20	Ⅲ	11.5	5.1	4.55	φ2mm以下の長・石・雲を多く含む	通有	浅黄褐色	灰白色	同転ナデ	体：同転ナデ 底：同転糸切り
81	土師器	碗	10C22	Ⅲ	[13.6]	3.7	5.0	φ2mm以下の石・雲・薄を少量含む	通有	灰白色	灰白色	不明(筋減)	不明(筋減)
82	土師器	碗	10C17	Ⅲ	14.4	5.5	5.05	φ2mm以下の長・石を若干含む	やや不良	浅黄褐色	浅黄褐色	同転ナデ	不明(筋減)
83	土師器	碗	8D9	Ⅲ	[12.05]	-	[3.3]	長・雲を少量含む	やや不良	浅黄褐色	浅黄褐色	不明(筋減)	不明(筋減)
84	土師器	碗	8D9	Ⅲ	-	5.4	(1.6)	石・雲・白を若干含む	やや不良	浅黄褐色	灰白色	不明(筋減)	不明(筋減)
85	土師器	内凹碗	10C12	Ⅲ	-	[6.7]	(1.1)	φ1mm以下の雲・薄を若干含む	やや不良	黒色	浅黄褐色	ヘラ磨き	体：不明(筋減) 底：茶色(筋減)
86	土師器	内凹碗	12A20	Ⅲ	[13.0]	-	(2.6)	φ2.5mm以下の石を少量含む φ1mm以下の雲・薄・黒を多く含む	通有	黒色	黒色	ヘラ磨き	不明(筋減)
87	土師器	内凹碗	8D10	Ⅲ	-	4.7	(2.2)	φ0.5mm以下の長・石・雲を少量含む	良好	黒色	鉄茶褐色	ヘラ磨き	体：同転ナデ 底：同転糸切り
88	石製品	砥石	-	SK1001	-	-	-	-	-	-	-	-	-
89	珠洲	甕	4D5	V	[30.0]	-	(6.5)	φ2mm以下の長・石・小を多く含む	やや不良	緑灰色	灰白色	同転ナデ	同転ナデ
90	珠洲	甕	6E15	V	-	[13.0]	(2.05)	φ4mm以下の長・石・薄・黒を多く含む	堅靱	灰色	灰白色	同転ナデ	体：同転ナデ 底：ヘラ削り
91	珠洲	四耳壺	6E15	V	[14.8]	-	[13.1]	長・雲・薄を多く含む	堅靱	灰色	灰色	同転ナデ	同転ナデ
92	珠洲?	甕	4B1	V	-	[9.1]	(4.0)	φ1mm以下の石・雲・薄・黒を若干含む	良好	灰色～明灰色	灰色	同下：同転ナデ 底：茶色アエナナデ	同下：同転ナデ 底：茶色アエナナデ
93	珠洲	短頸壺	5D21 5A8	V	-	[7.2]	(8.0)	φ1mm以下の長を若干含む	良好	灰色～明灰色	明灰色～明灰色	同転ナデ	同下：同転ナデ 底：ヘラ削り
94	珠洲	片口鉢	11A11	V	[30.0]	-	(3.7)	φ1mm以下の長・石を若干含む	通有	オリーブ灰色	明細灰色	同転ナデ	同転ナデ
95	珠洲	鉢	4D20	V	[11.8]	-	(6.7)	φ2mm以下の長・石を少量含む	良好	黄灰色	灰色	同転ナデ	同転ナデ
96	珠洲	片口鉢	6E15	V	-	-	(2.5)	φ2mm以下の長・石・雲・薄を多く含む	不良	灰白色	灰白色	同転ナデ	同転ナデ
97	淡美・常滑	壺	5D12	V	-	-	(5.5)	φ1.5mm以下の長・石を多く含む	通有	緑灰色	明細灰色	同転ナデ	同転ナデ
98	淡美・常滑	甕	5E5	V	-	-	(1.5)	φ0.5mm以下の雲・薄・白を若干含む	堅靱	緑灰色	緑灰色	同転ナデ	同転ナデ

別表1 出土遺物観察表 (5)

報告号	類別	器種	出土位置		数量 (cm)		新 土	焼成	色 調			整 装			備 考
			グランド	層位	口径	底径			高さ	内面	外面	内面	外面		
99	瀝美・常滑 壺	6D17	V	-	-	(2.1)	長・薄・白を多く含む	堅緻	青灰色 緑灰色	青灰色 緑灰色	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ		
100	瀝美・常滑 壺	4D4	V	-	-	(2.18)	φ2.5cm以下の長・石を若干含む	堅緻	緑灰色	緑灰色	同転ナデ	同転ナデ	ナデ 和印文		
101	瀝美・常滑 壺or甕	4D13	V	-	-	(4.9)	φ3cm以下の長・石・漆・薄・白・砂鉄を多く含む	堅緻	青灰色	青灰色	不明(割産)	不明(割産)	和印文		
102	瀝美・常滑 壺	7C19	V	-	-	(3.9)	φ3cm以下の長・石・漆・薄・白・砂鉄を若干含む	堅緻	青灰色	青灰色	同転ナデ	同転ナデ	和印文		
103	瀝美・常滑 壺	9C13	V	-	-	(6.1)	φ4mm以下の長・薄・白を多く含む	堅緻	青灰色	青灰色	ナデ	ナデ	タタキ		
104	越前焼?	片口鉢	V	-	-	(6.3)	φ1cm以下の長・漆・薄・白を若干含む	適有	灰色	灰色	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ		
105	青磁 椀	8A9	V	-	-	(3.0)	精緻	堅緻	灰色	灰色	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	薄赤	
106	青磁 椀	12A8	V	[142]	-	(2.1)	精緻	堅緻	灰白色	緑灰色	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	顔反り焼	
107	青磁 椀	12B12	V	-	-	(2.6)	精緻	堅緻	明青灰色	灰緑色	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形	薄赤	
108	青磁 不明	8D12	V	-	-	(1.8)	精緻	堅緻	緑灰色	緑灰色	ロクロ成形	ロクロ成形	ロクロ成形		
109	土製品 土鈴	5D23	V	(3.8)	(2.4)	(2.4)	φ1mm以下の漆を少量含む	やや不良	灰白色	灰白色	-	-	新ナデ		
110	珠洲 壺	9B5 6A25	W	-	-	(18.6)	精緻	堅緻	緑灰色	緑灰色	同転ナデ	同転ナデ	肩 : 同転ナデ 胴上 : タタキ	工種中並A,B類	
111	珠洲 壺	7A21	W	[55.2]	-	(8.9)	φ0.5mm以下の長・石を少量含む	良好	緑灰色	緑灰色	同転ナデ	同転ナデ	口~肩 : 同転ナデ 胴上 : 平行タタキ (割産)		
112	珠洲 壺	4B6	W	[48.0]	-	(8.9)	φ4mm以下の長・石・薄・黒を多く含む	堅緻	灰色	灰色	同転ナデ	同転ナデ	口 : 同転ナデ 肩 : タタキ		
113	珠洲 壺	4E5	W	-	-	(4.4)	長・薄・白を若干含む	堅緻	緑灰色	青灰色	同転ナデ	同転ナデ	体下 : 同転ナデ 胴上 : タタキ 底 : ヘラ筋り		
114	珠洲 鉢	2A29	W	-	-	(3.6)	φ4mm以下の長・石・漆・薄・白を多く含む	堅緻	青灰色	青灰色	同転ナデ	同転ナデ	体下 : 同転ナデ 底 : 同転赤切り		
115	珠洲 壺	6A25	W	[36.0]	-	(39.3)	φ2cm以下の長・漆・薄・黒を多く含む	堅緻	横灰色	横灰色	同転ナデ	同転ナデ	口~体 : 同転ナデ 胴上 : タタキ	工種中並A,B類	
116	珠洲 四耳壺	7A21	W	-	-	(4.85)	φ4mm以下の長・石・小を多く含む	適有	青灰色	青灰色	同転ナデ	同転ナデ	口 : 同転ナデ 肩 : 不明	割産	
117	珠洲 四耳壺	6B5	W	[11.06]	-	(12.9)	長・石を若干含む	良好	灰褐色 灰色	灰褐色	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	割産表状文	
118	珠洲 片口鉢	7A21	W	[20.0]	-	30.5	精緻	堅緻	明赤灰色	明赤灰色~緑灰色	同転ナデ	同転ナデ	口~体上 : 同転ナデ 胴上 : タタキ 底 : ヘラケズリ		
119	珠洲 片口鉢	2C5	W	[24.0]	-	(2.9)	φ0.5mm以下の長・石を若干含む	良好	灰色	灰色	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ		
120	瀝美・常滑 壺	5E11	W	-	-	(3.6)	薄・白を若干含む	堅緻	緑灰色 青灰色	緑灰色	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ	内外面に自然焼	
121	瀝美・常滑 壺	5E1	W	-	-	(4.0)	φ2.5mm以下の長・石を若干含む	良好	暗緑灰色	暗オリーブ色	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ		
122	瀝美・常滑 壺or甕	4C4	W	-	-	(2.6)	φ2cm以下の長・石・漆・薄・白を多く含む	堅緻	オリーブ灰色	暗青灰色	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ		
123	越前 総輪	4B2	W	[30.2]	-	(3.45)	φ1mm以下の長・石を若干含む	適有	浅灰色	灰白色	同転ナデ	同転ナデ	同転ナデ		

別表1 出土遺物観察表 (6)

報告No.	遺物	種類	形状	出土位置		法量 (cm)		土質	焼成	色 澤			備 考
				層位	遺構	口径	底径			器高	内 面	外 面	
124	瀬戸	新緑瓶	12D19	IV	-	[12.2]	-	精緻	堅緻	灰白色~灰色	黄緑色	ロクロ成形	
125	青磁	瓶	2B3	IV	-	[5.5]	(20)	精緻	堅緻	灰色	灰緑色	ロクロ成形	底部外側に黒硝物
126	青磁	瓶	10D15	V	-	[16.2]	-	精緻	堅緻	灰白色	灰緑色	ロクロ成形	
127	青磁	瓶	4A6	IV	-	-	(38)	精緻	堅緻	灰色	黄緑色	ロクロ成形	
128	青磁	不明	12D3	IV	-	-	(22)	精緻	堅緻	灰色	灰色	ロクロ成形	
129	石製品	砥石	3D24	IV	別表2参照	-	-	-	-	-	-	-	-
130	磁片	-	4D8	IV	別表2参照	-	-	-	-	-	-	-	-
131	磁瓶	皿	-	I	-	[4.2]	(33)	精緻	堅緻	灰白色	透明・具須	ロクロ成形 縁付・二重線目文	くらわんが輪巻皿等
132	磁瓶	瓶	7D5	I	-	4.3	(34)	精緻	良好	におい・橙色	内：重灰 外：灰緑色	ロクロ成形	
133	青磁	香炉	1A14	IV	-	-	(37)	精緻	堅緻	白色	細灰色	ロクロ成形	肥前系
134	青磁	土瓶	11E	壊乱	-	[8.6]	(6.15)	精緻	良好	灰オリーブ	内：灰白色 外：オリーブ黄灰色	ロクロ成形	内面に7本の点線 縁部ぎ
135	陶器	瓶	5B20	IV	-	9.4	(4.25)	粗緻	良好	橙色	内：灰赤色・灰緑色 外：灰緑色	ロクロ成形	
136	陶器	瓶	4B6	IV	-	-	(2.55)	粗緻	良好	灰色	細灰色	ロクロ成形	白土・灰箱 ハシ目文様
137	陶器	皿	12B22	IV	-	-	(1.52)	粗緻	良好	灰白色	赤褐色	ロクロ成形	鉄軸
138	金属製品	管	-	IV	別表4参照	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶 四文銭
139	金属製品	銅貨	-	I	別表4参照	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶 文銭
140	金属製品	銅貨	-	IV	別表4参照	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶 文銭
141	金属製品	銅貨	-	I	別表4参照	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶 文銭
142	金属製品	銅貨	-	IV	別表4参照	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶 文銭
143	金属製品	銃弾	-	V	別表4参照	-	-	-	-	-	-	-	寛永通寶 古寛
144	金属製品	銃弾	4D15	IV	別表4参照	-	-	-	-	-	-	-	-
145	銅器	杯盤	-	表採	[19.9]	-	(3.1)	φ1mm以下の長・筒を少量含む	良好	明灰色	細灰色	ナデ	
146	漆器	壺	13C25	I	[]	-	(2.05)	φ1mm以下の長・石・雲・海を少量含む	良好	灰色	灰色	回転ナデ	
147	青磁	柄	-	表採	-	[39]	(2.3)	粗緻	良好	灰白色	灰緑色	ロクロ成形	
148	瀬戸・美濃	猪鉢	7C55	I	-	[10.0]	(5.1)	長・石・雲・小を多く含む	適有	灰白色~黄褐色	黄褐色	ロクロ成形 底：回転ナデ切り	内面の一部に黒付着
第481	土師器	瓶	-	-	[11.2]	-	(2.1)	長・石・雲・海を多く含む	適有	黄褐色 におい・橙色	黄褐色 におい・橙色	回転ナデ	平成13年度確認調査
第482	土師器	瓶	-	-	-	[4.8]	(1.4)	φ2mm以下の石・雲・海を多く含む	やや不良	灰白色 におい・黄褐色	灰白色 黄褐色	不明 (磨滅)	平成13年度確認調査
第483	土師器	瓶	-	-	-	[4.5]	(1.9)	φ2.5mm以下の石・雲・海を若干含む	適有	灰白色	灰白色	作：不明 (磨滅) 底：回転ナデ切り→ヘラ削り	平成13年度確認調査
第484	土師器	瓶	-	-	-	[4.9]	(1.2)	φ1mm以下の石・雲・海を多く含む	適有	におい・橙色	橙色 黄褐色	回転ナデ 底：回転ナデ切り	平成13年度確認調査
第485	土師器	瓶	-	-	-	[4.4]	(1.0)	φ2mm以下の石・雲・海を多く含む	適有	におい・黄褐色	におい・黄褐色	不明 (磨滅)	平成13年度確認調査
第486	土師器	瓶	-	-	-	[4.6]	(1.1)	φ1mm以下の石・雲・海を多く含む	適有	黄褐色	黄褐色	不明 (磨滅)	平成13年度確認調査
第487	漆器	盃	-	-	-	-	(4.3)	φ1mm以下の長・雲・海を若干含む	堅緻	細灰色	黄灰色	回転ナデ	平成13年度確認調査

別表1 出土遺物観察表 (7)

報告No	種別	器種	出土位置			法量 (cm)			陶土	焼成	包 装			備 考
			グロッド	遺構	層位	口径	口径	器高			内面	外面	外面	
第488	珠	壺	-	溝1	-	[122]	-	(3.1)	堅緻	灰色	灰色	陶板ナズ	陶板ナズ	平成13年度確認調査
第489	石製品	礎石	-	-	-	脚状(参照)	-	-	通有	にふい黄褐色	にふい黄褐色	陶板ナズ	底：陶板ナズ 底：陶板ナズ 底：ヘラ切り→ヘラ削り	平成15年度確認調査
第490	土製器	柄	-	-	-	-	[6.1]	(0.7)	堅緻	灰色	灰色	陶板ナズ	陶板ナズ	平成16年度確認調査

別表2 石製品観察表

報告No	種別	器種	出土位置			法量 (cm・g)			石 質	
			グロッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ		重量
5	石製品	砥石	10C20	-	X II	15.1	1.7	3.95	502g	砂岩
88	石製品	砥石	-	SK1001	-	(14.7)	(7.6)	(8.5)	-	凝灰岩
129	石製品	礎石	3D24	-	IV	3.8	(3.8)	0.7	(17.7)	泥岩
130	薄片	-	4B6	-	IV	(2.2)	(2.6)	(0.6)	(2.6)	チャークト
第489	石製品	砥石	-	-	-	(7.0)	(4.2)	(2.1)	40.5	石質：凝灰岩

別表4 金属製品・銭貨観察表

報告No	種別	器種	出土位置			法量 (cm・g)			備 考	
			グロッド	遺構	層位	長さ	幅	厚さ		重量
138	金属製品	斧	-	-	IV	12.8	8.9	9.6	9.6	
143	金属製品	鉄片	-	-	V	4.2	2.5	2.1	34.4	
144	金属製品	鉄片	4D15	-	IV	2.1	3.1	1.6	23.9	
139	金属製品	銭貨	-	-	I	2.8	0.7	-	4.1	寛永通寶 四文銭
140	金属製品	銭貨	-	-	II	2.5	0.65	-	2.9	寛永通寶 文銭
141	金属製品	銭貨	-	-	I	2.25	0.6	-	2.8	寛永通寶 文銭
142	金属製品	銭貨	-	-	II	2.4	0.6	-	2.3	寛永通寶 石室永

別表3 木製品・木杭観察表

報告No	種別	器種	出土位置	法量 (cm)			備 考		
				直径	長さ	厚さ			
3	木製品	板	SR4003	2	8.8	29.6	2.1	スズ	
4	木製品	板	SR4003	2	15.6	36.3	2.0	スズ	
6	部材	木杭	SX4001(2)	-	12.0	53.5	-	ハンノキ製ハンノキ通属	亀甲形板列部材
7	部材	木杭	SX4001(3)	-	11.9	51.0	-	エゴノキ製	亀甲形板列部材
8	部材	木杭	SX4001(5)	-	10.2	38.4	-	ニレ製	亀甲形板列部材
9	部材	木杭	SX4001(4)	-	12.2	87.5	-	トネリコ製	亀甲形板列部材
10	部材	木杭	SX4001(5)	-	11.2	49.5	-	コナラ製コナラ重属コナラ製	亀甲形板列部材
11	部材	木杭	SX4001(7)	-	11.1	50.8	-	コナラ製コナラ重属コナラ製	亀甲形板列部材
12	部材	木杭	SX4002(1)	-	11.3	35.6	6.9	カエデ製	方形板列部材
13	部材	木杭	SX4002(3)	-	5.5	27.5	3.5	サクラ製	方形板列部材
14	部材	木杭	SX4002(3)	-	9.5	34.3	7.9	モクレン製	方形板列部材
15	部材	木杭	SX4002(5)	-	6.5	20.5	3.9	ニレ製	方形板列部材

別表5 遺構観察表

第1面 (IV層)

・SDの長径は検出面での長さを、短径は検出面での幅を表す

遺構番号	位 置	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	出土遺物	備 考
SD0014	19A		台形状	7.00	0.68	0.50		珠洲焼の集中出土を伴う? 西→東の傾斜
SD0015	19A		台形状	5.37	0.75	0.60		SD0014と同じ覆土。西→東の傾斜
SD0016	17A・18B		台形状	25.20	0.75	0.24		西→東の傾斜
SD0017	18C・19C		台形状	18.50	0.50	0.25		南→北の傾斜
SD0018	20C		台形状	10.50	0.25	0.35		南→北の傾斜
SD0019	21C		台形状	15.50	0.75	0.15		南→北の傾斜
SD0020	25B		台形状	9.75	1.00	0.15	葺	近代の遺構?
SD0021	25C		台形状	12.70	0.62	0.20		SX0024と同じ覆土
SD0022	24D		台形状	13.50	1.25	0.35		SX0024と同じ覆土
P0001	19A・20A	円形	U字状	0.16	0.14	0.12		
P0002	19A・20A	円形	U字状	0.32	0.28	0.14		
P0003	19A・20A	円形	U字状	0.22	0.20	0.26		
P0004	19A・20A	円形	U字状	0.24	0.22	0.36		
P0005	19A・20A	円形	U字状	0.24	0.20	0.12		
P0006	19A・20A	円形	U字状	0.20	0.20	0.14		
P0007	19D	円形	U字状	0.16	0.14	0.18		
P0008	19D	円形	U字状	0.22	0.20	0.22		
P0009	15A・15B	円形	U字状	0.22	0.16	0.36		
P0010	15A・15B	円形	U字状	0.46	0.30	0.10		
P0011	15A・15B	円形	U字状	0.20	0.20	0.20		
P0012	15A・15B	円形	U字状	0.24	0.20	0.12		
P0013	25A	円形	U字状	0.32	0.18	0.38		
SK0023	21D	楕円形	台形状	3.25	1.50	12.00		
SX0024	25D	長方形	台形状	14.62	7.25	10.00		底面に多数の小穴

第2面 (V～Ⅷ層)

遺構番号	位 置	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	出土遺物	備 考
SD1003	16A・17B		台形状	30.00	0.62	0.20	円礫	
SD1004	16A・17B		台形状	40.00	0.75	0.32	円礫	
SD1005	16A・17B		台形状	32.25	0.62	0.24		
SD1018	17C		台形状	6.25	0.50	0.10		
SD1020	18D		台形状	7.12	0.50	0.20		
P1006	16C	円形	U字状	0.22	0.20	0.12		
P1007	15A	円形	U字状	0.24	0.22	0.20		
P1008	15A	円形	U字状	0.24	0.22	0.32		
P1009	15A	円形	U字状	0.24	0.16	0.22		
P1010	15A	円形	U字状	0.24	0.20	0.32		
P1011	15A	円形	U字状	0.22	0.20	0.20		
P1012	15B	円形	U字状	0.22	0.16	0.16		
P1013	18D	円形	U字状	0.48	0.32	0.12		
P1014	18D	円形	U字状	0.34	0.32	0.20		
P1016	18D	円形	U字状	0.28	0.18	0.18		
SK1001	17D	円形	台形状	1.38	1.32	0.48	砥石・用原石	
SK1002	21A	円形	台形状	1.32	1.48	0.60	用原石	覆土がSK1001と同質
SK1015	18D	円形	台形状	0.88	0.82	0.56	用原石	覆土がSK1001と同質
SK1017	23A	円形	台形状	1.32	1.24	0.54	用原石	覆土がSK1001と同質
SK1019	18B	円形	台形状	1.16	0.98	0.44	用原石	覆土がSK1001と同質

第3面 (Ⅸ層)

遺構番号	位 置	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	出土遺物	備 考
SD2001	21B・22B		U字状	8.82	0.51	0.15		
SD2003	16D～21D		漏斗状	53.00	1.50	0.56		南→北の傾斜
SD2004	16A～17C		U字状	22.70	1.00	0.10		西→東の傾斜
SD2005	17B～18D		U字状	28.87	1.12	0.24		西→東の傾斜
SD2006	D18		U字状	2.00	0.60	0.10		SD2004・2005を切る
SD2007	18D～18E		U字状	14.00	0.62	0.20		SD2003に切られる
SD2008	17D～17E		漏斗状	5.50	1.75	0.44		東→西の傾斜
P2002	22A	楕円形	U字状	0.86	0.42	0.45		
P2009	17A	円形	U字状	0.26	0.20	0.13		

第4面 (X層)

遺構番号	位 置	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	出土遺物	備 考
SD3003	17C・17D		台形状	15.00	0.75	0.20		東→西の傾斜
SD3004	17A・17B		台形状	10.20	0.60	0.12		東→西の傾斜
SK3001	15C	楕円形	台形状	0.60	0.56	0.20	土師器片	
SK3002	15B	楕円形	台形状	1.00	0.92	0.52		

第5面 (XI層)

遺構番号	位 置	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	出土遺物	備 考
SR4003	24A～23E		瓢状	7.92	0.78	0.42	土師器片 木製品	泥路跡。東→西の傾斜
SX4001	26C・26D	六角形		3.90	2.70			「危甲形」の坑刺
SX4002	24B	平行四辺形		1.95	1.67			

図 版

□ 未調査範囲

■ 礫

□ 砥石の砥面

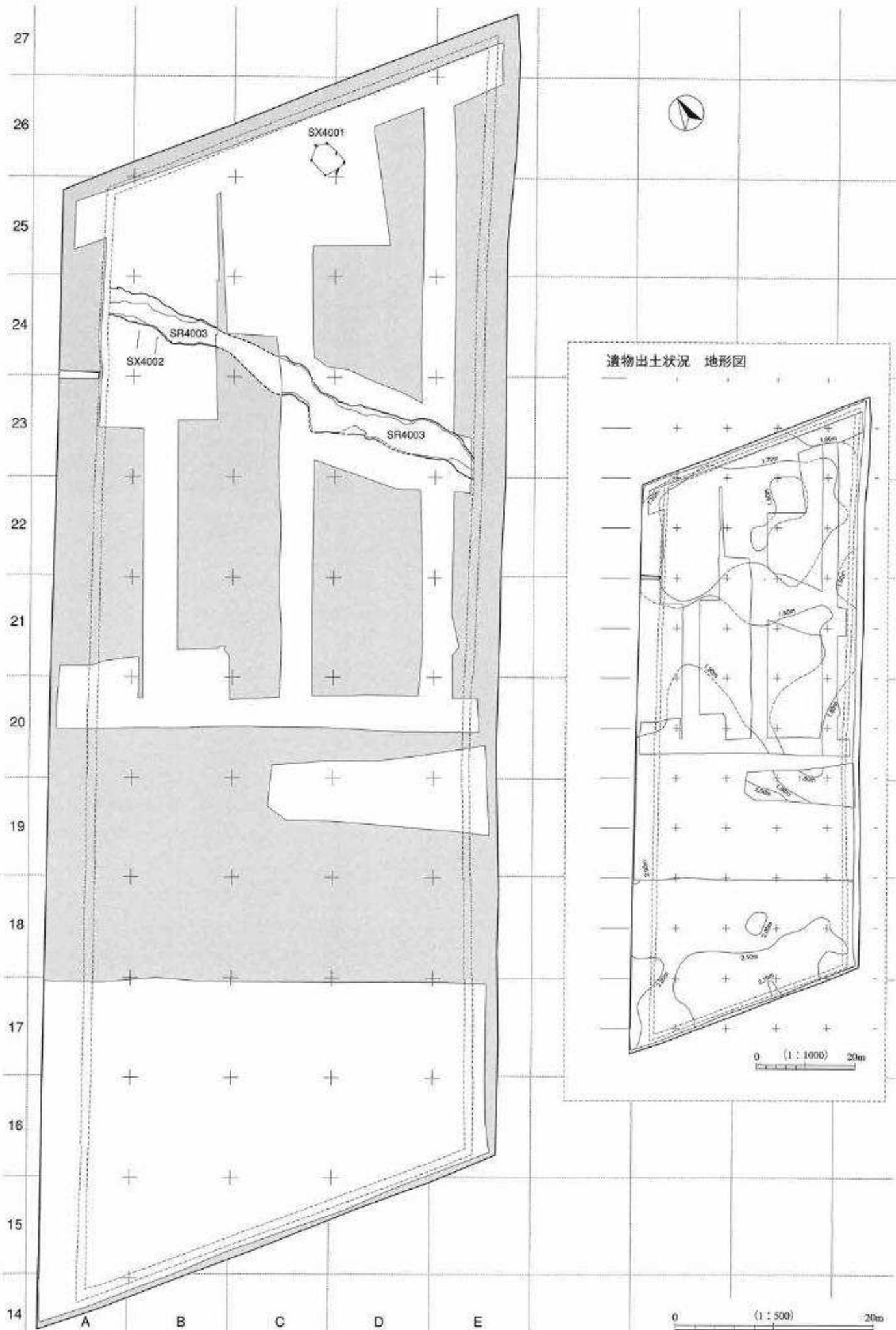
■ 黒色土器の黒色処理部分

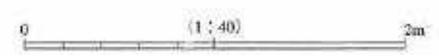
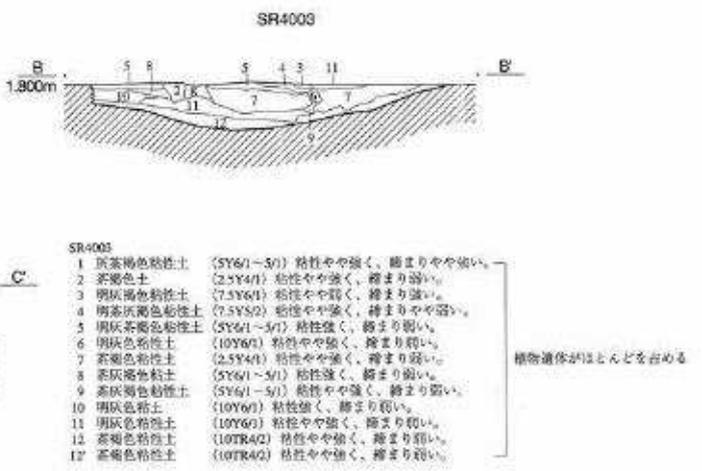
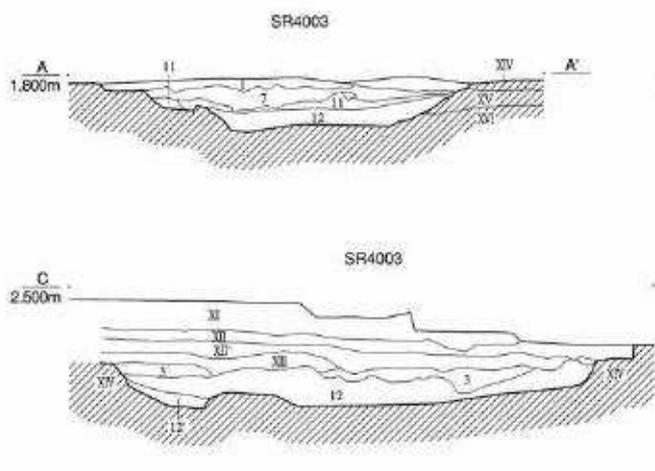
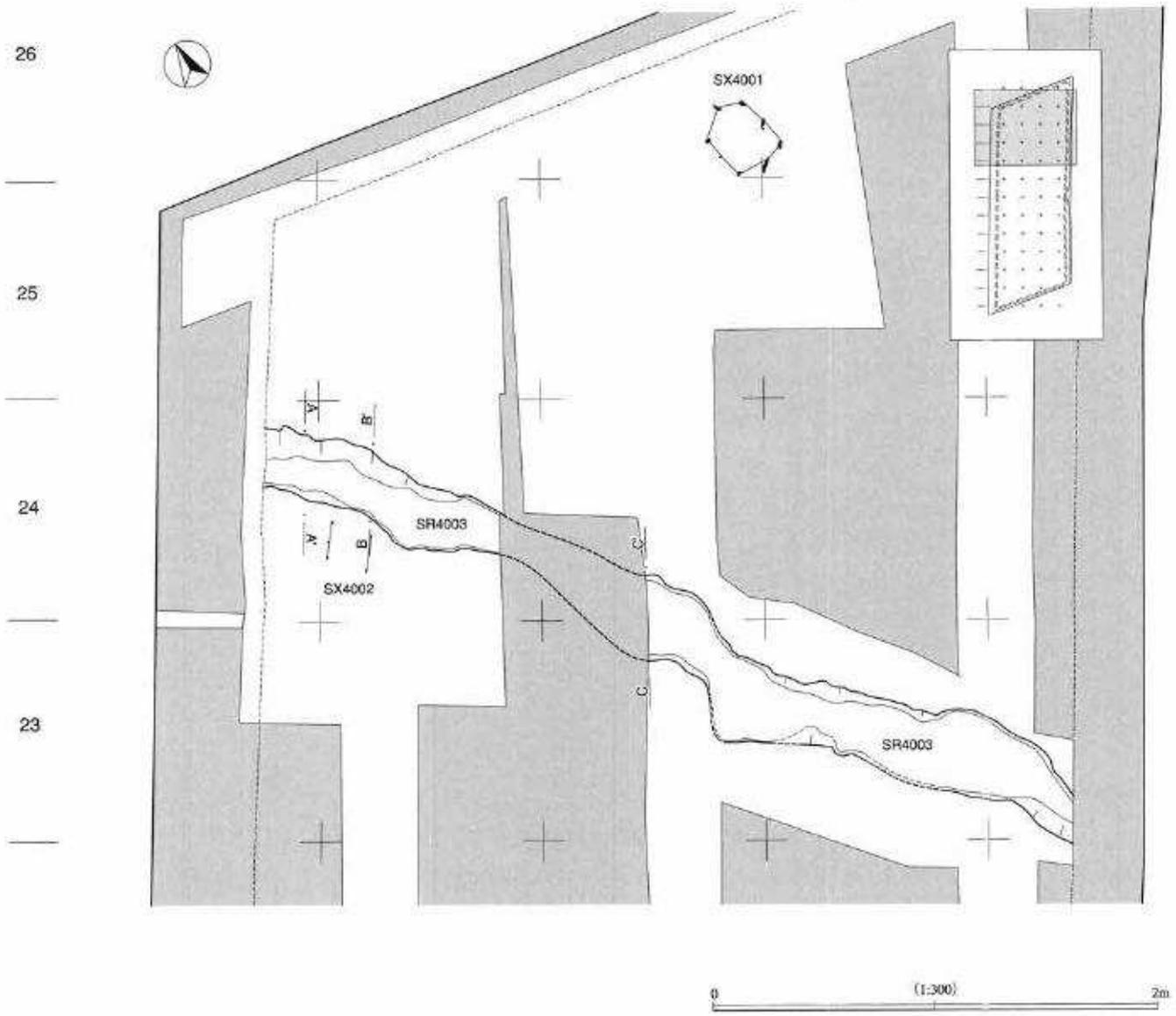


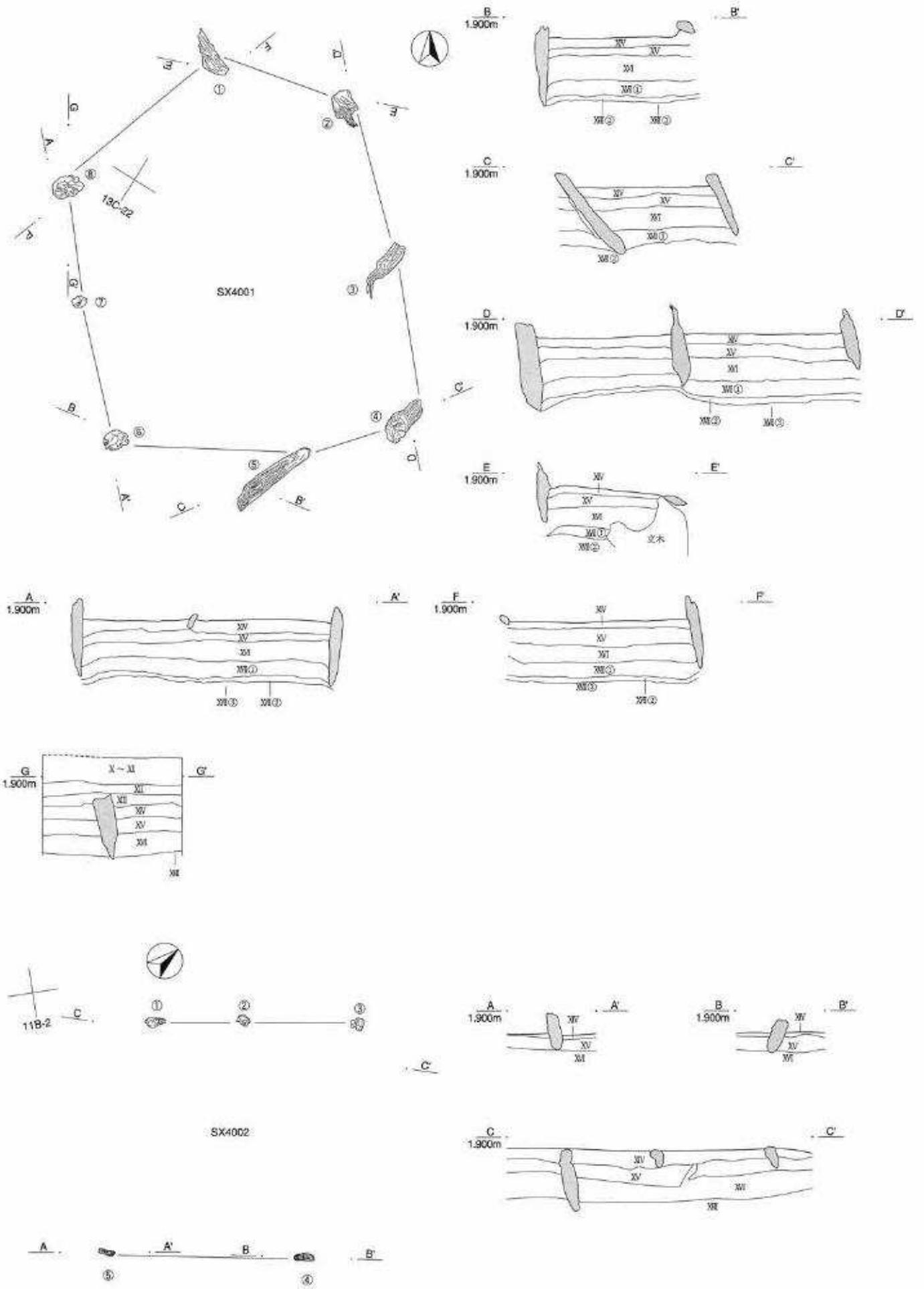
中心線と内面口縁線が
離れているものは非完形品

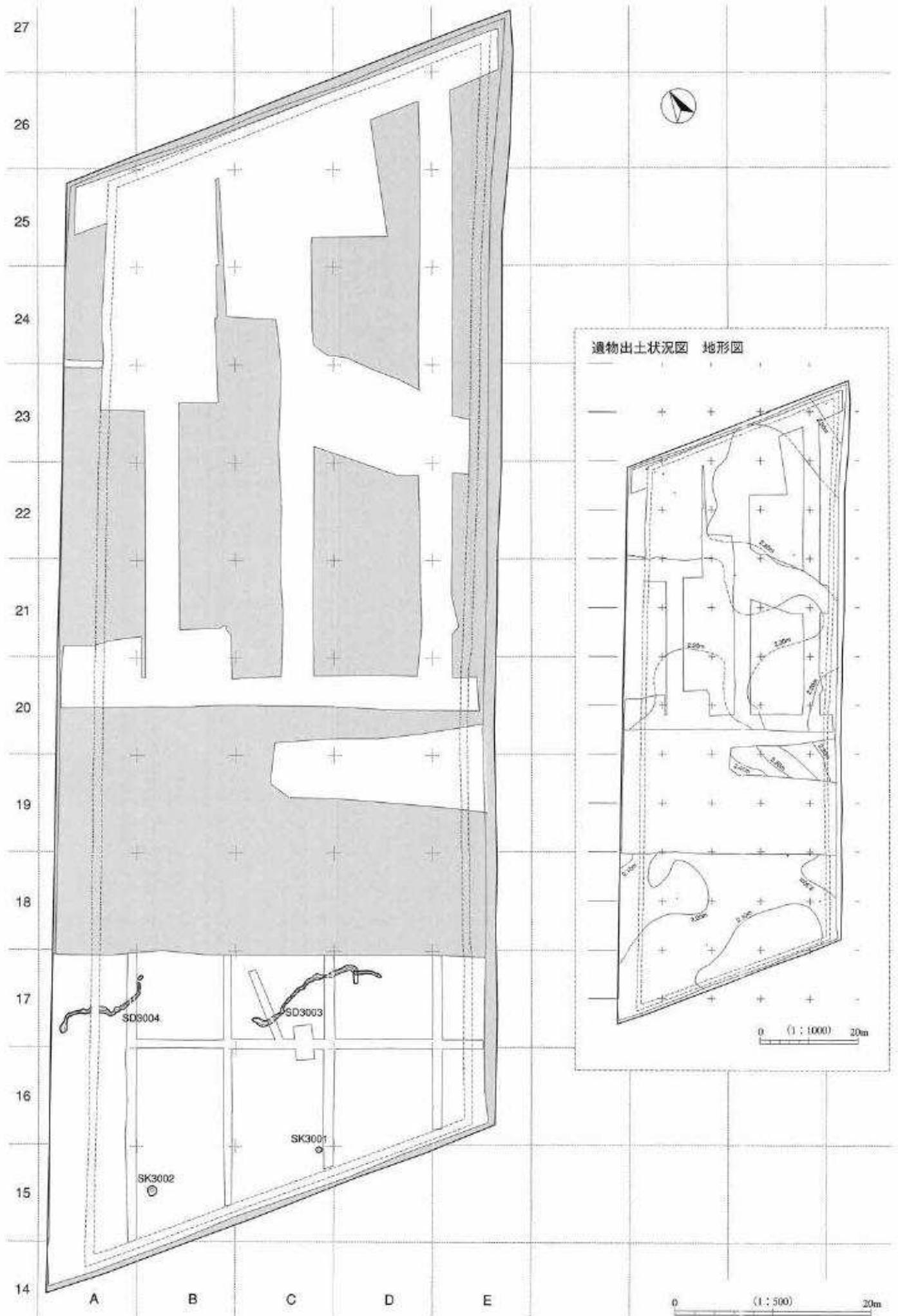


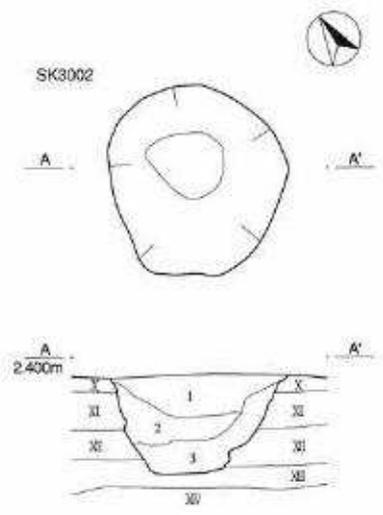
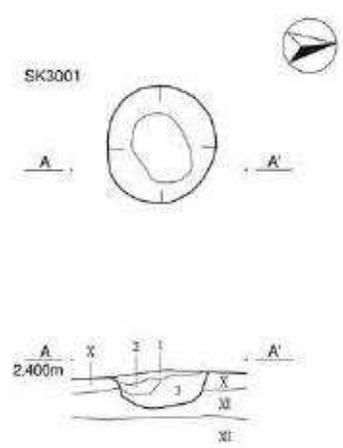
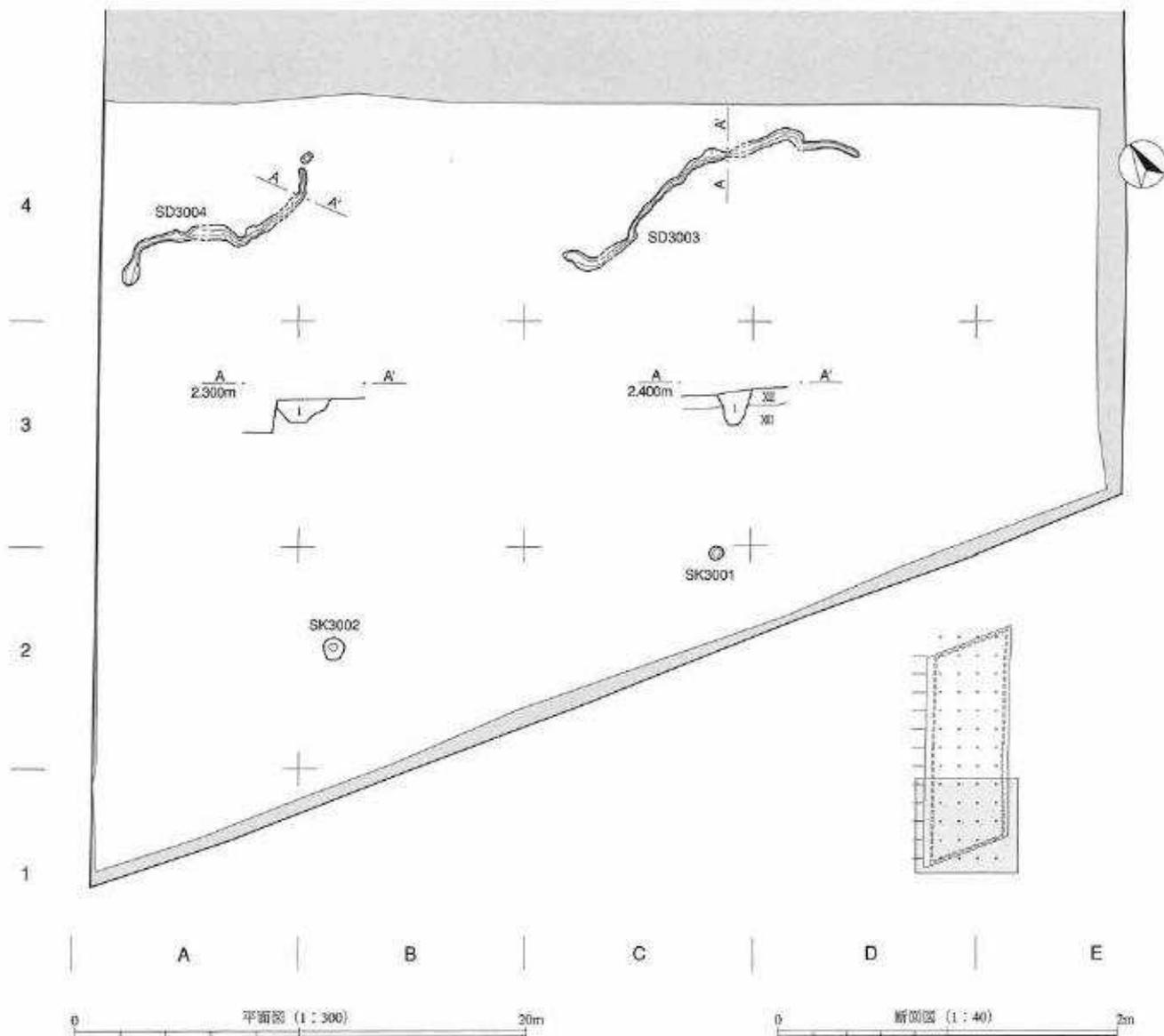
中心線と内面口縁線が
結合しているものは完形品



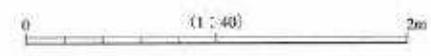


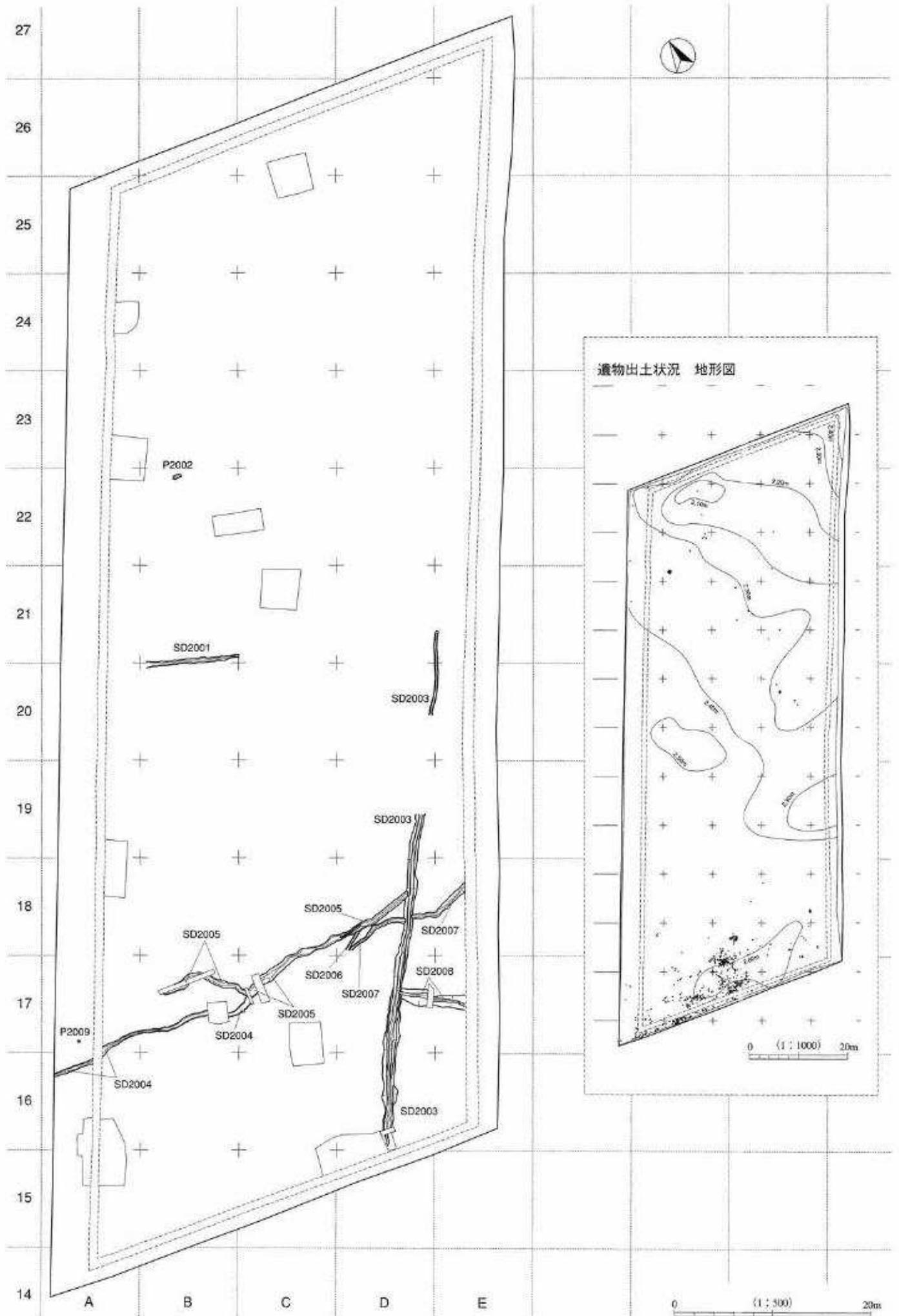




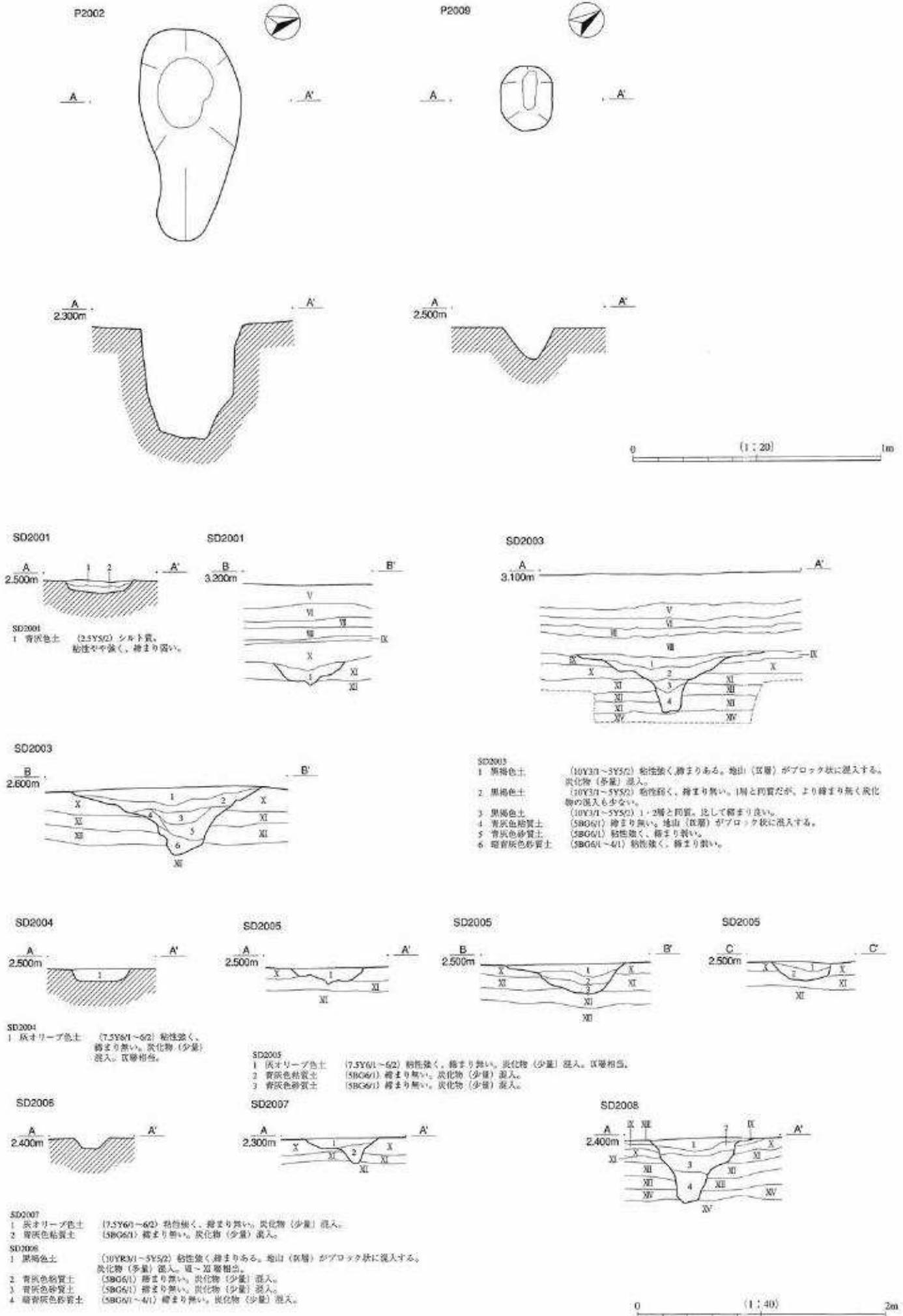


SK3001・SK3002共通
 1 灰黄色土 (7.5V41~42) 粘性強く、締まりある。炭化物(少量)混入。X層相当?
 2 灰黄色土 (7.5V41~42) 締まり無い。X層相当?
 3 灰白色土 (7.5V62) 粘性強く、締まりある。炭化物(少量)混入。X層相当?

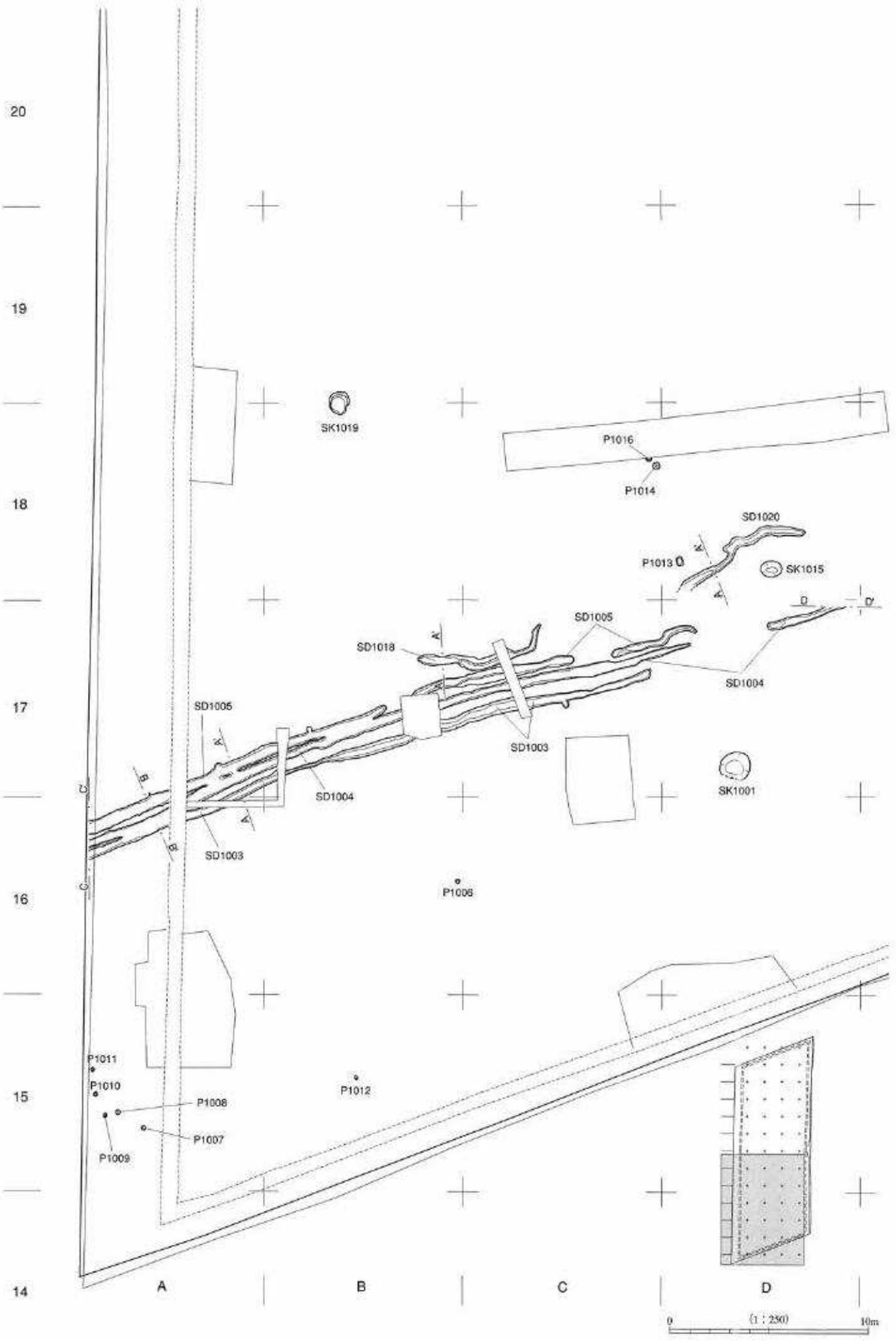


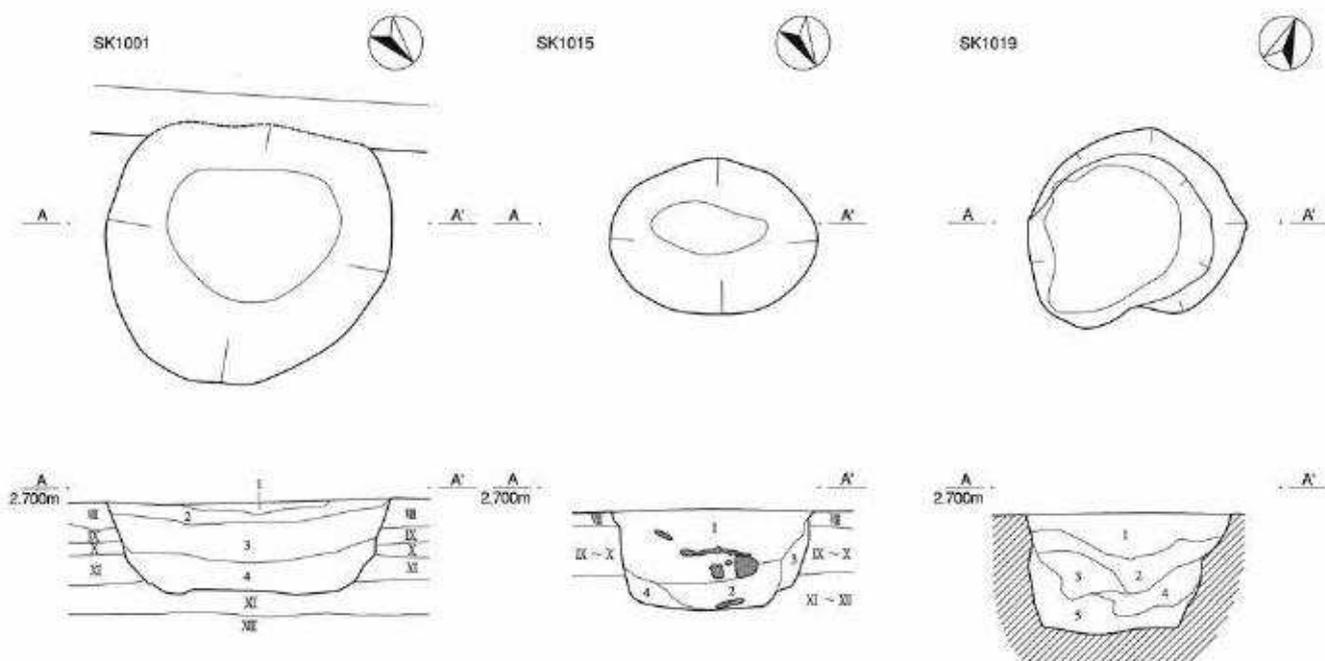








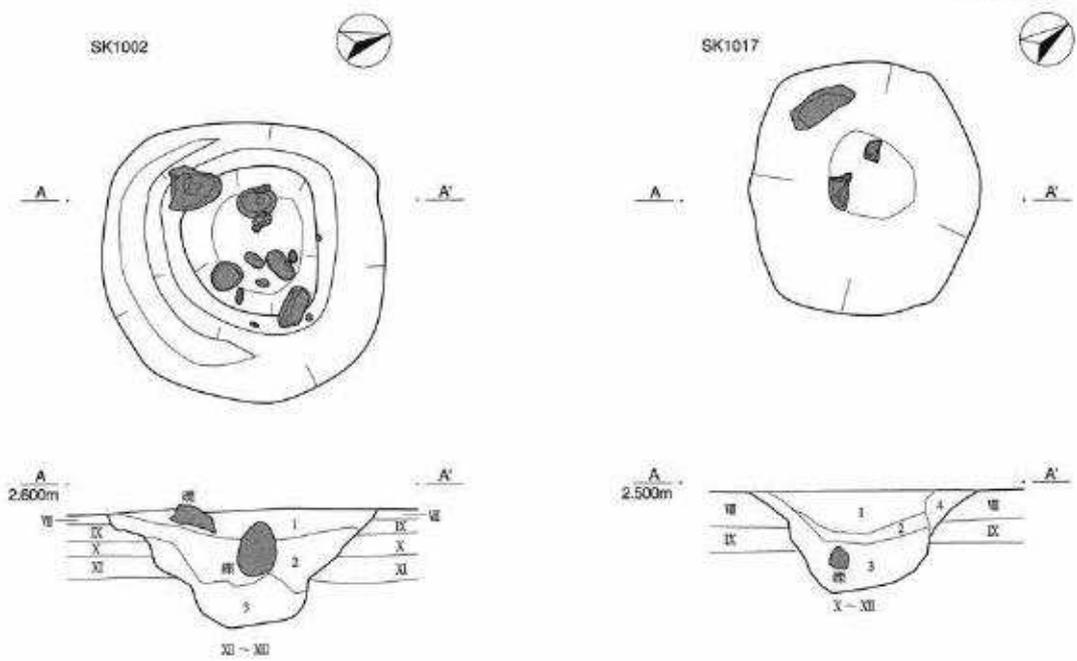




SK1001
 1 灰褐色土 (N7-6) 埴山(瓦層)が粒子状に混入する。炭化物(少量)混入。
 2 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まりある。炭化物(少量)混入。
 3 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まり強い。土層が還元しており、2層に比して色調が青味がかっている。
 4 灰褐色土 (N7-6) 3層に比して更に青味がかっている。

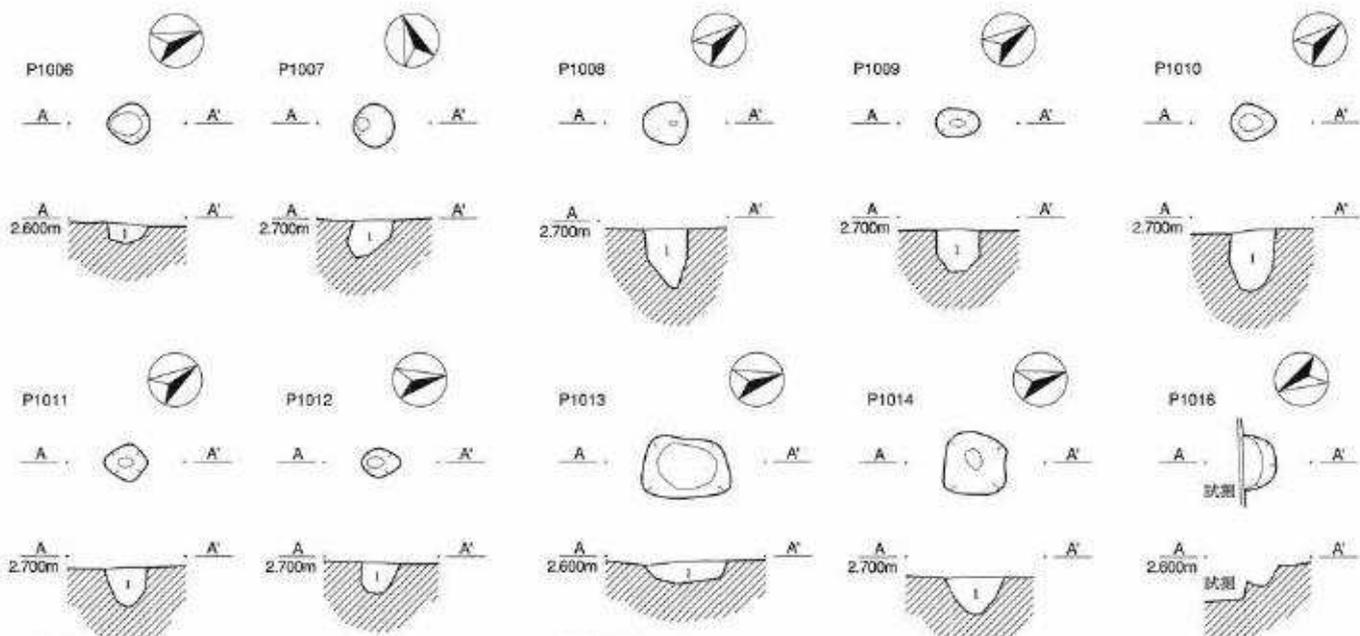
SK1015
 1 SK1002の1-3層と同様
 2 SK1002の1-2層と同様
 3 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まり無い。
 4 灰褐色土 (N7-6) 3層と同質。より締まり無く、炭化物を多く含む。

SK1019
 1 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まりある。炭化物(少量)混入。IV層相当。
 2 灰褐色土 (N7-6) 1層と同質だが土層が還元しており、色調が青味がかっている。
 3 灰褐色土 (N7-6) 2層と同質だが、より還元が進んでおり、より色調が青い。
 4 黒灰色土 (N4-10Y3/1) 粘性強く、締まりある。2-3層が粒子状に多量混入する。
 5 暗青灰色土 (15O5/1-4/1) 粘性強く、締まり強い。4層がブロック状、粒子状に混入する。基本的には1-4層と同質の土層であるが、埴山との異化が進んでおり、一旦すると埴山との見極めが困難な層である。



SK1002
 1 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まり強い。炭化物(微量)混入。
 2 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まりある。炭化物(少量)混入。
 3 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まり無い。土層が還元しており、2層に比して色調が青味がかっている。

SK1017
 1 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まりある。黒灰褐色土(少量)含む。
 2 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まりやや弱い。
 3 黒灰色土 (10Y3/1) 粘性強く、締まりやや弱い。
 4 灰褐色土 (N7-6) 粘性強く、締まりある。

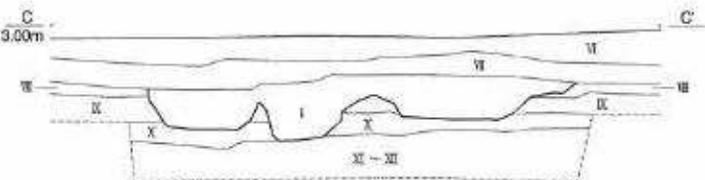


P1006~1012
1 黄褐色土 (2.5Y7/8~7/4) 粘性やや強く、締まり良い。

P1013~1016
1 黄褐色土 (2.5Y7/8~7/4) 粘性やや強く、締まり良い。炭化物(少量)混入。

SD1004・1005

SD1003・1004・1005



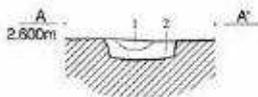
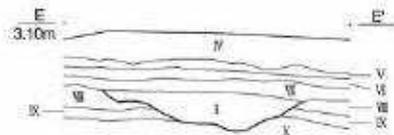
SD1003・1004・1005

1 浅黄色土 (2.5Y7/4) シルト質。粘性弱い。締まりある。炭化物(少量)・骨片の円礫混入。耳簪相当。

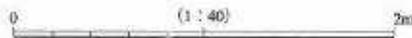
SD1004

SD1018

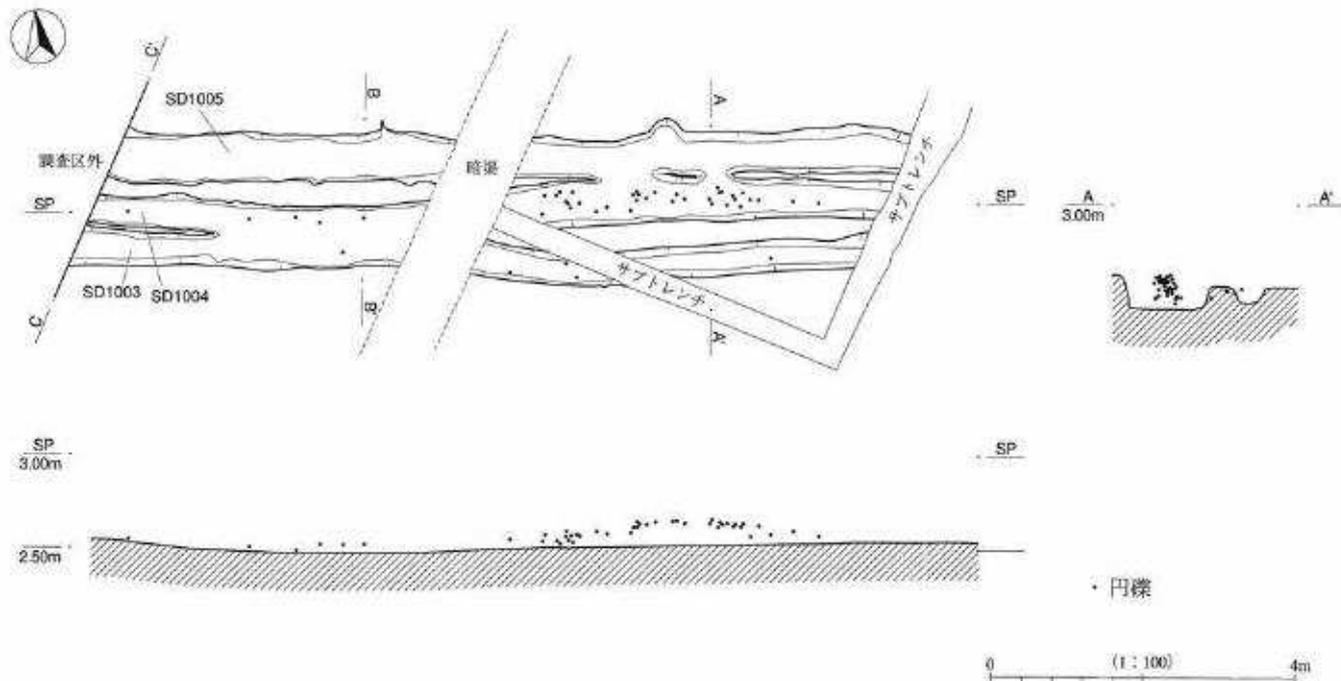
SD1020

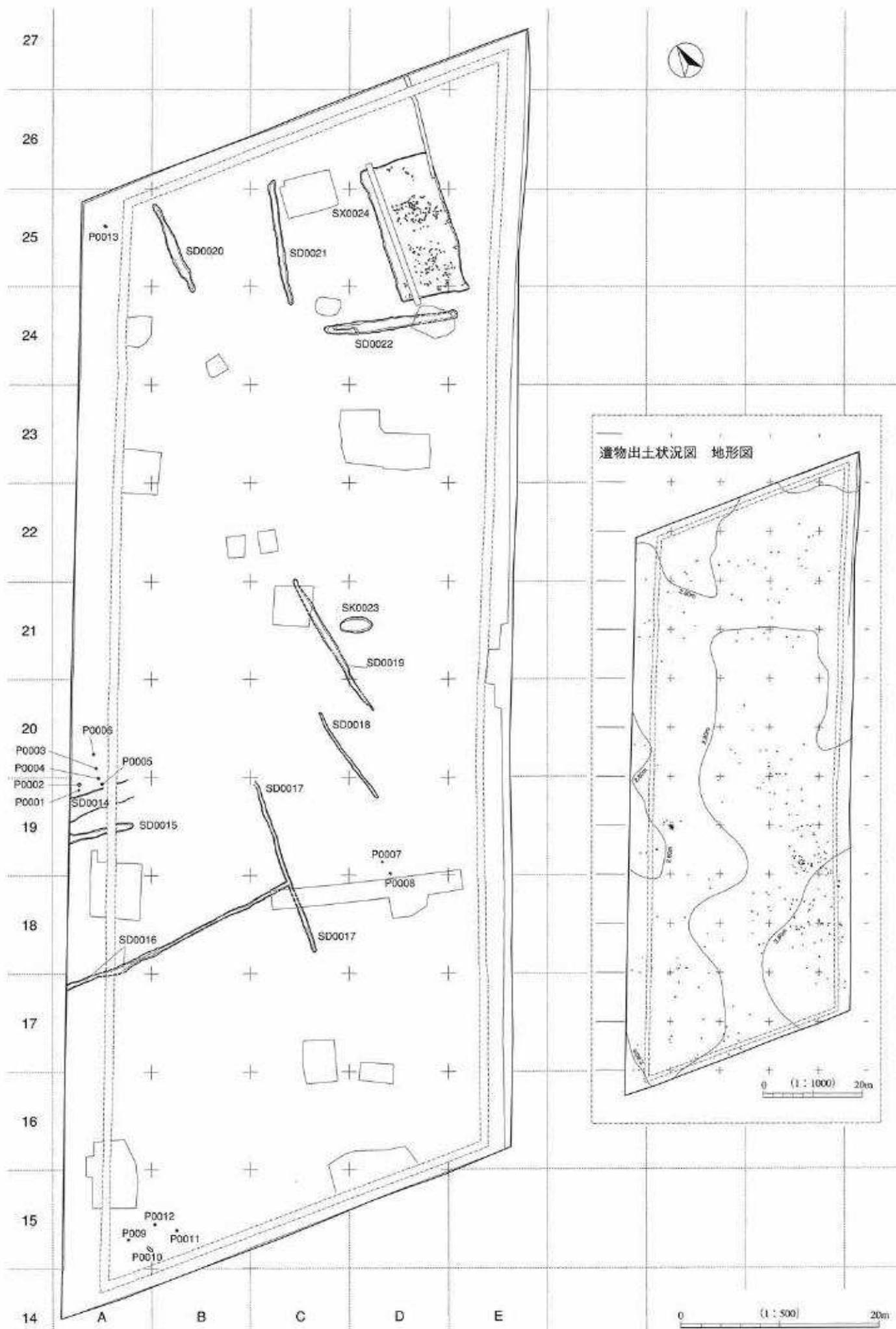


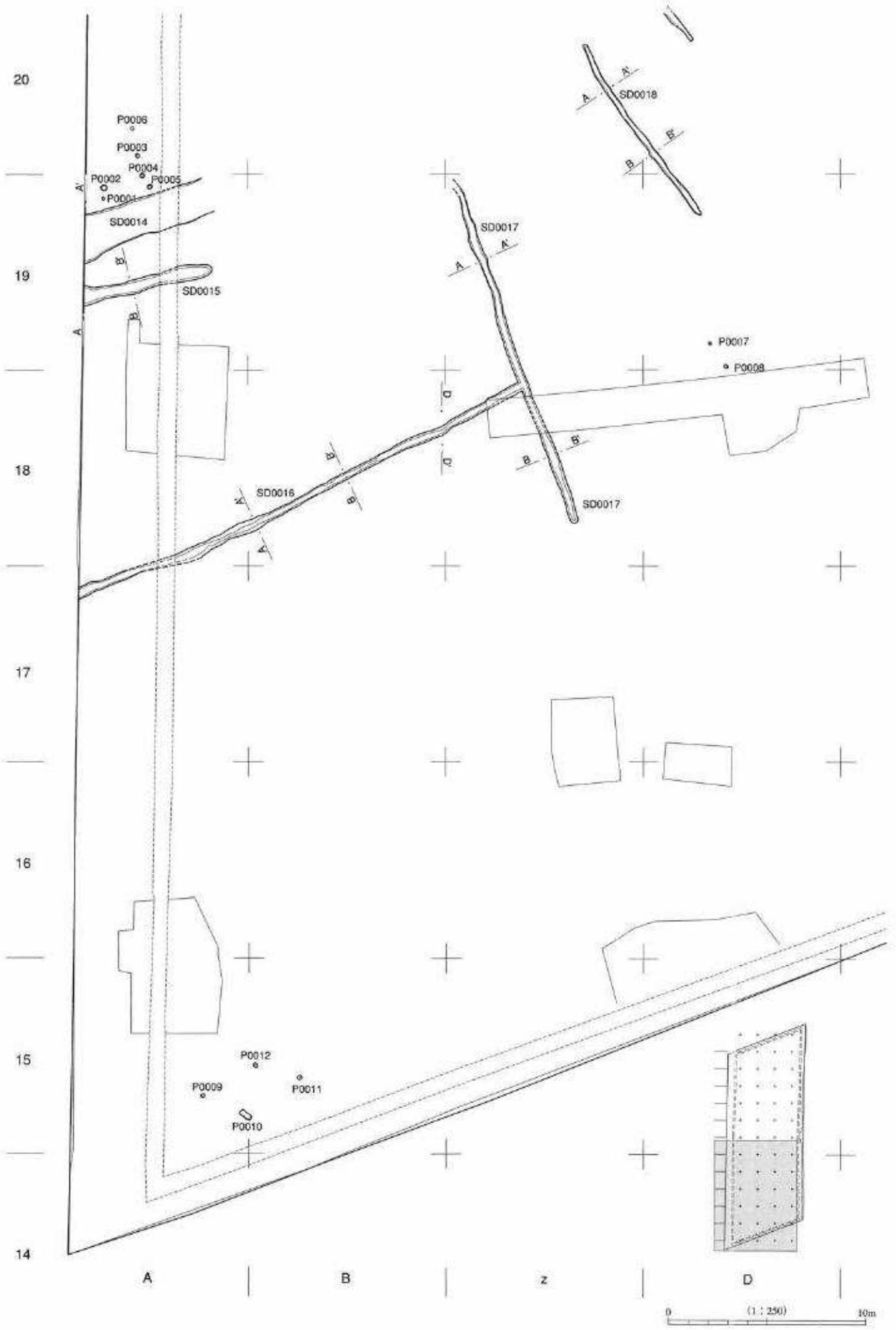
SD1018・1020
1 浅黄色土 (2.5Y7/4) シルト質。粘性弱い。締まりある。炭化物(少量)混入。
2 オリーブ灰色土 (7.5Y3/2) 土質。炭化物等混入。1層が炭化により変化したものと思われる。

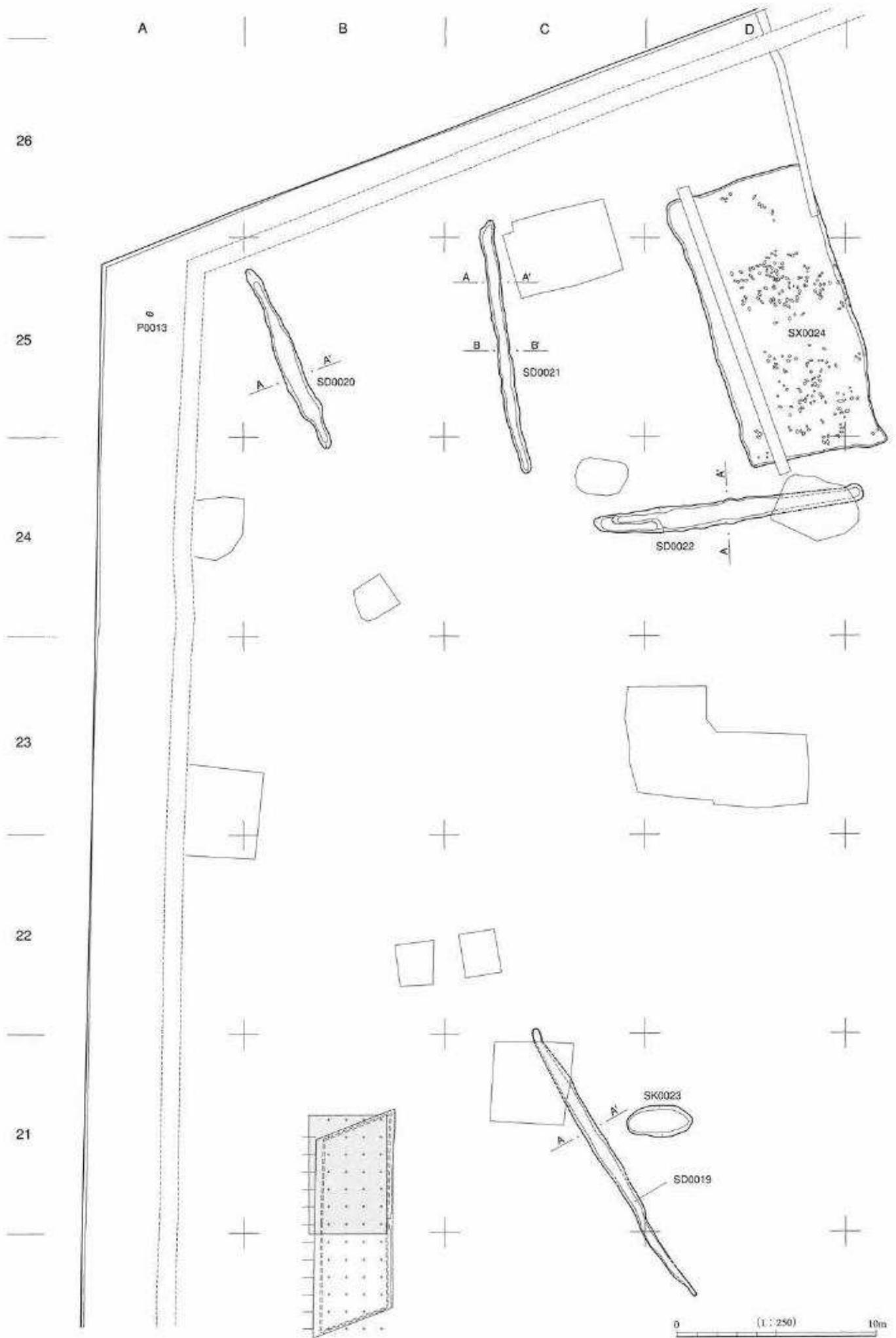


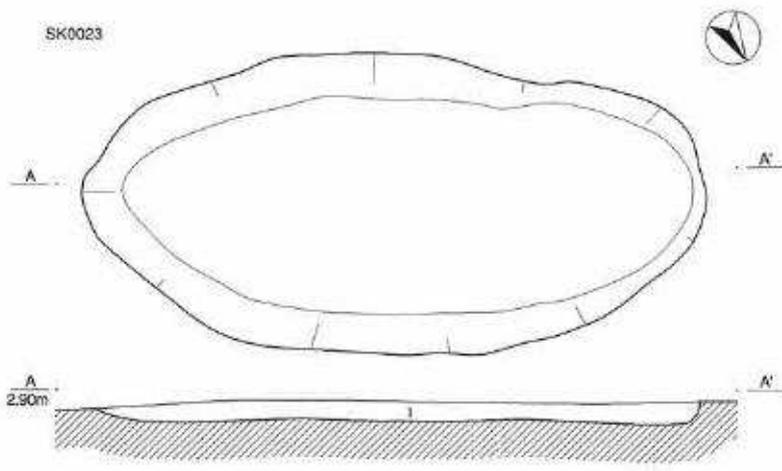
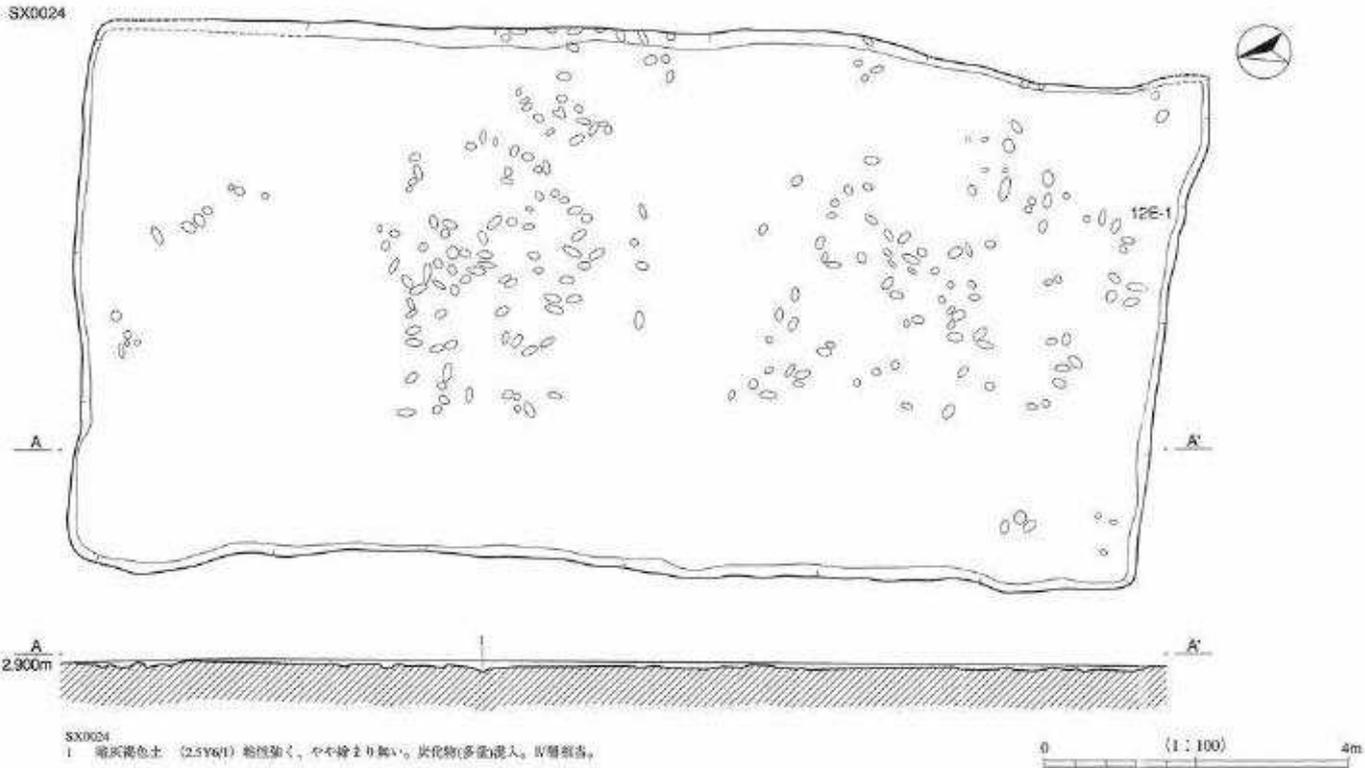
SD1003 1004 円礫出土状況



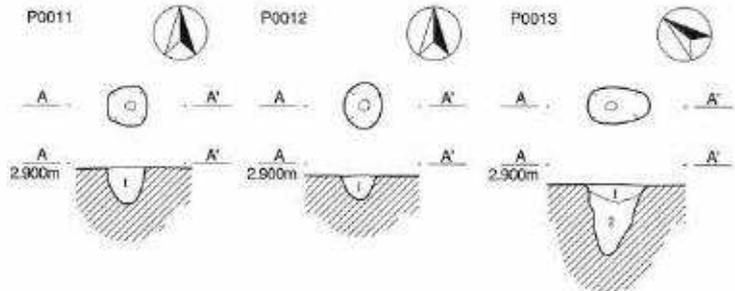
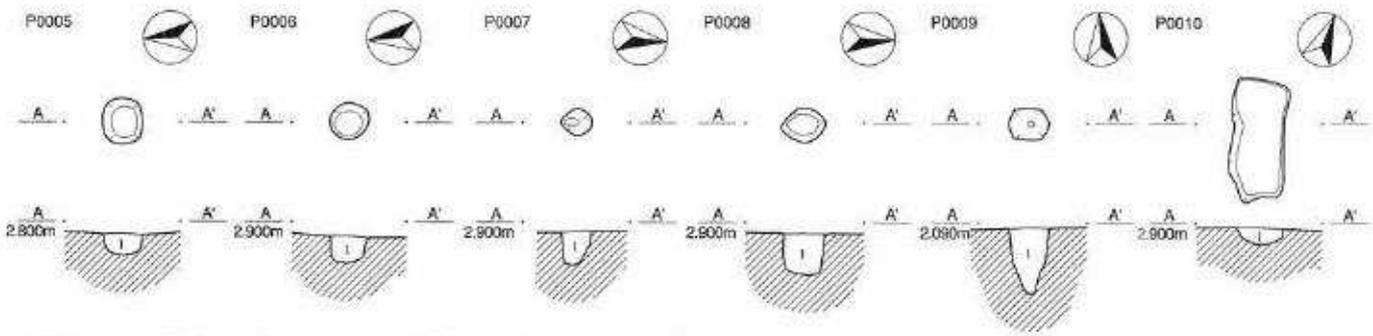
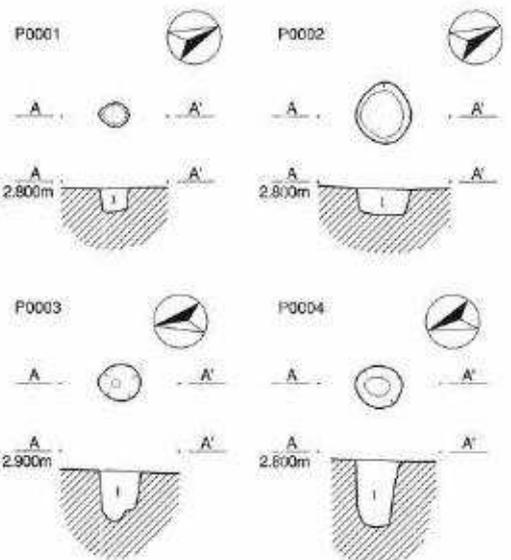




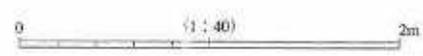




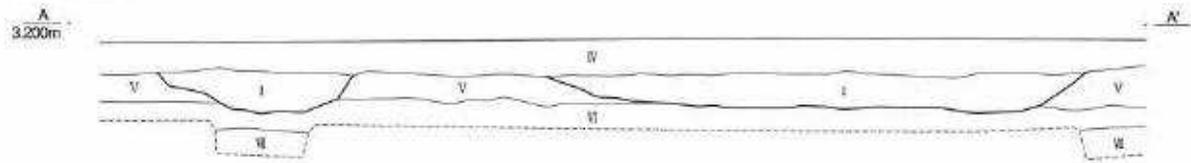
SK0023
1 灰褐色土 シルト質。締まり強い。炭化物(少量)混入。IV層相当。



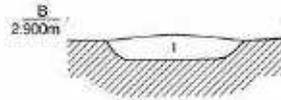
P0001-P0012
1 灰褐色土 (2.5Y5/4~7/4) 粘性强く、締まり強い。炭化物(少量)混入。IV層相当。
P0013
1 灰褐色粘土 (2.5Y6/2) 粘性强く、締まり強い。炭化物(微量)混入。IV層相当。
2 オリーブ灰色土 (7.5Y6/2) 色調以外は1層と同質。1層が埋没したもので。



SD0014 SD0015



SD0015



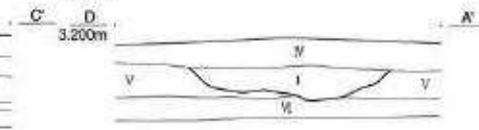
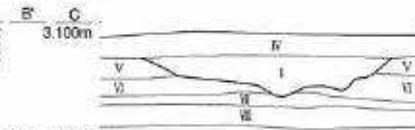
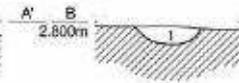
SD0014・0015
I 軽灰褐色土 (2.5Y5/2) シルト質、しまりやや良くない
成山、礫 (灰褐色粘土) と類似するが比して粘性が無く、締まりない。炭化物 (少量) 混入。

SD0016

SD0016

SD0016

SD0016



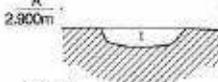
SD0016
I 灰黄色土 (2.5Y6/1) シルト質、粘性強いが締まり悪い。炭化物 (少量) 混入。IV層相当。

SD0017

SD0017

SD0018

SD0018

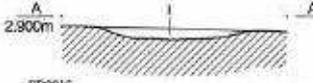


SD0017
I 灰黄色土 (2.5Y6/1) シルト質、粘性強いが締まり悪い。炭化物 (少量) 混入。IV層相当。

SD0018
I 灰黄色土 (2.5Y6/1) シルト質、粘性強いが締まり悪い。炭化物 (少量) 混入。IV層相当。

SD0019

SD0020



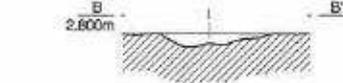
SD0019
I 灰黄色土 (2.5Y6/1) シルト質、粘性強いが締まり悪い。炭化物 (少量) 混入。IV層相当。

SD0020
I 赤褐色土 (2.5YR3/0) しまり全く無い、粘性無い。礫の混入とは覆土全く異なる。

SD0021

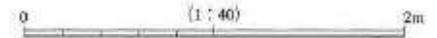
SD0021

SD0022

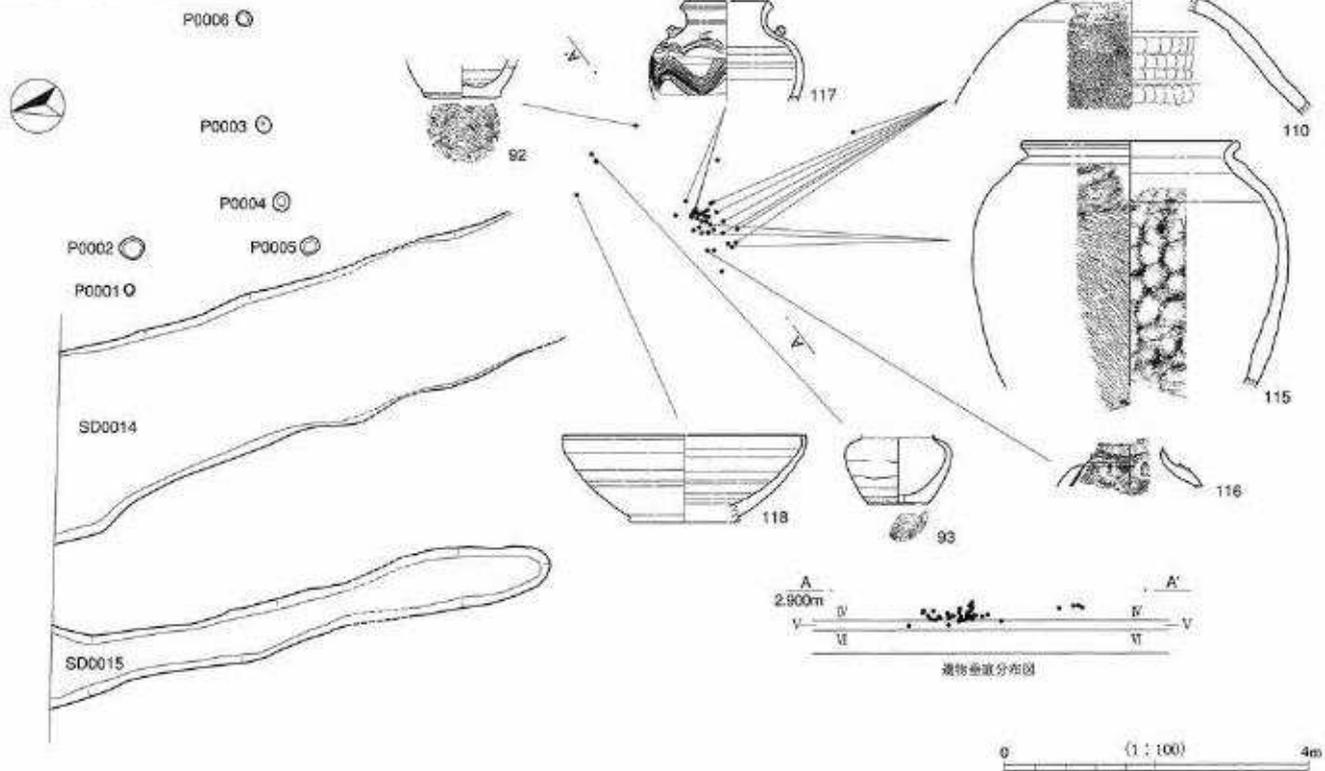


SD0021
I 軽灰褐色土 (5B06/1) シルト質、締まりやや良くない。炭化物 (少量) 混入。IV層相当。

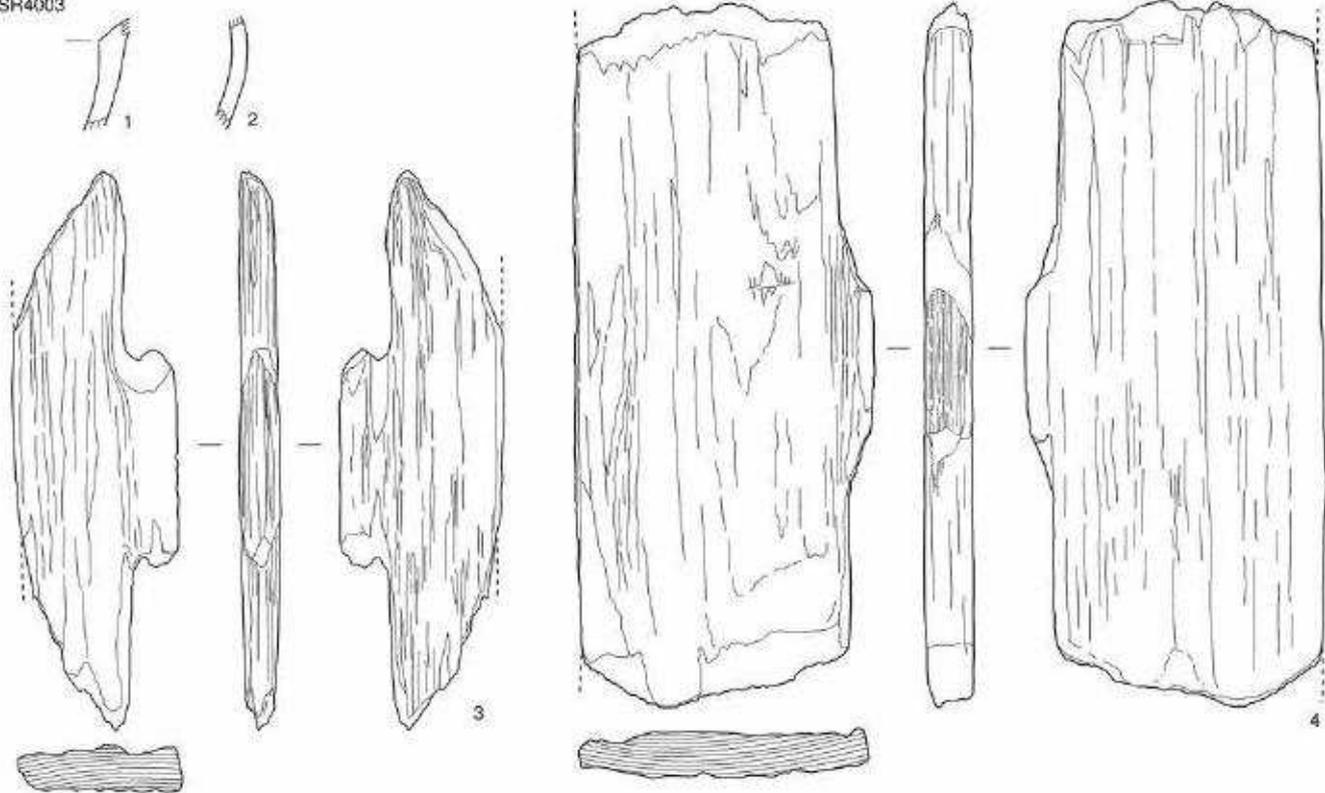
SD0022
I 軽灰褐色土 (2.5Y5/2) シルト質、締まりやや良くない。炭化物 (少量) 混入。IV層相当。



SD0014付近遺物出土状況

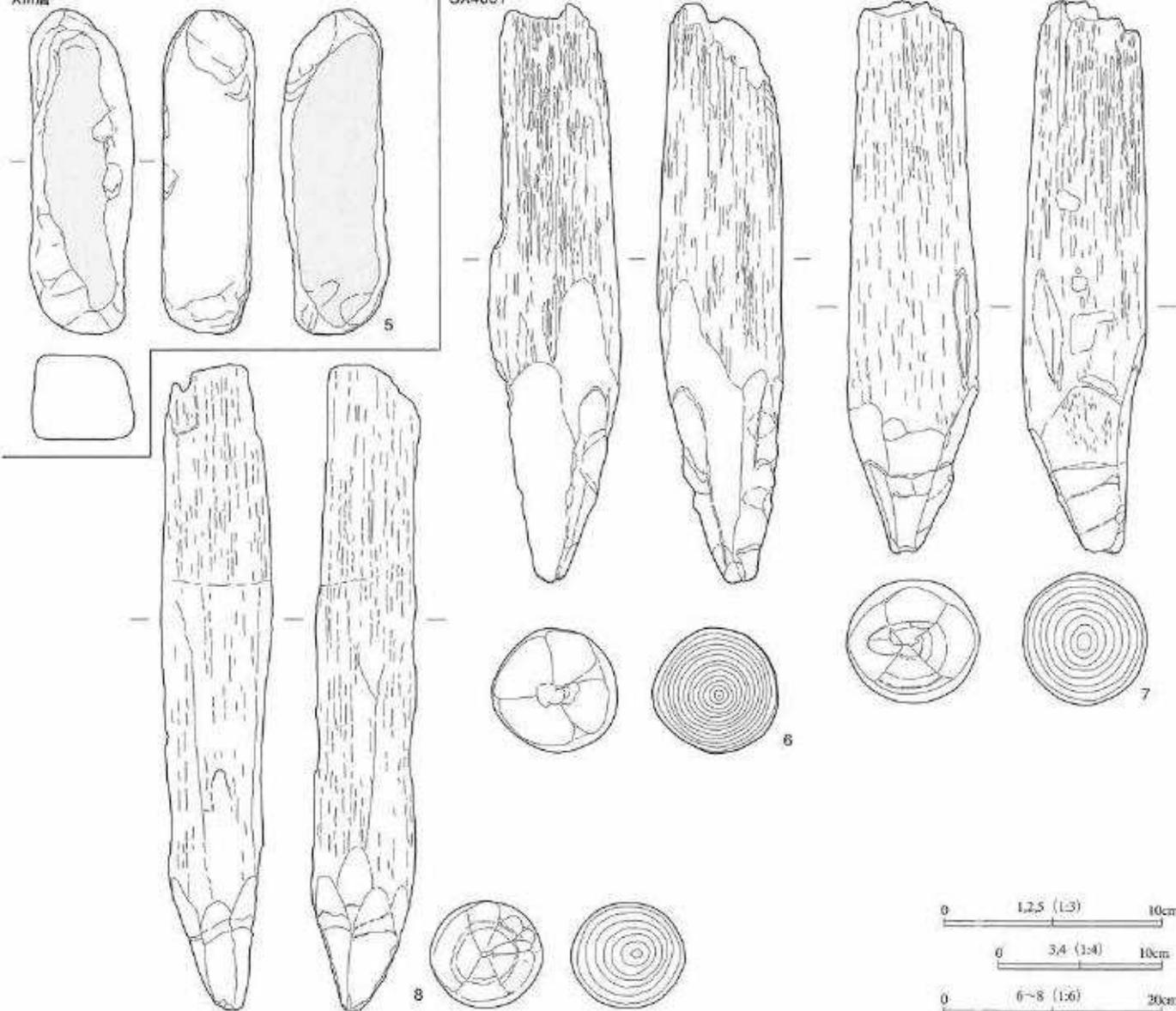


SR4003

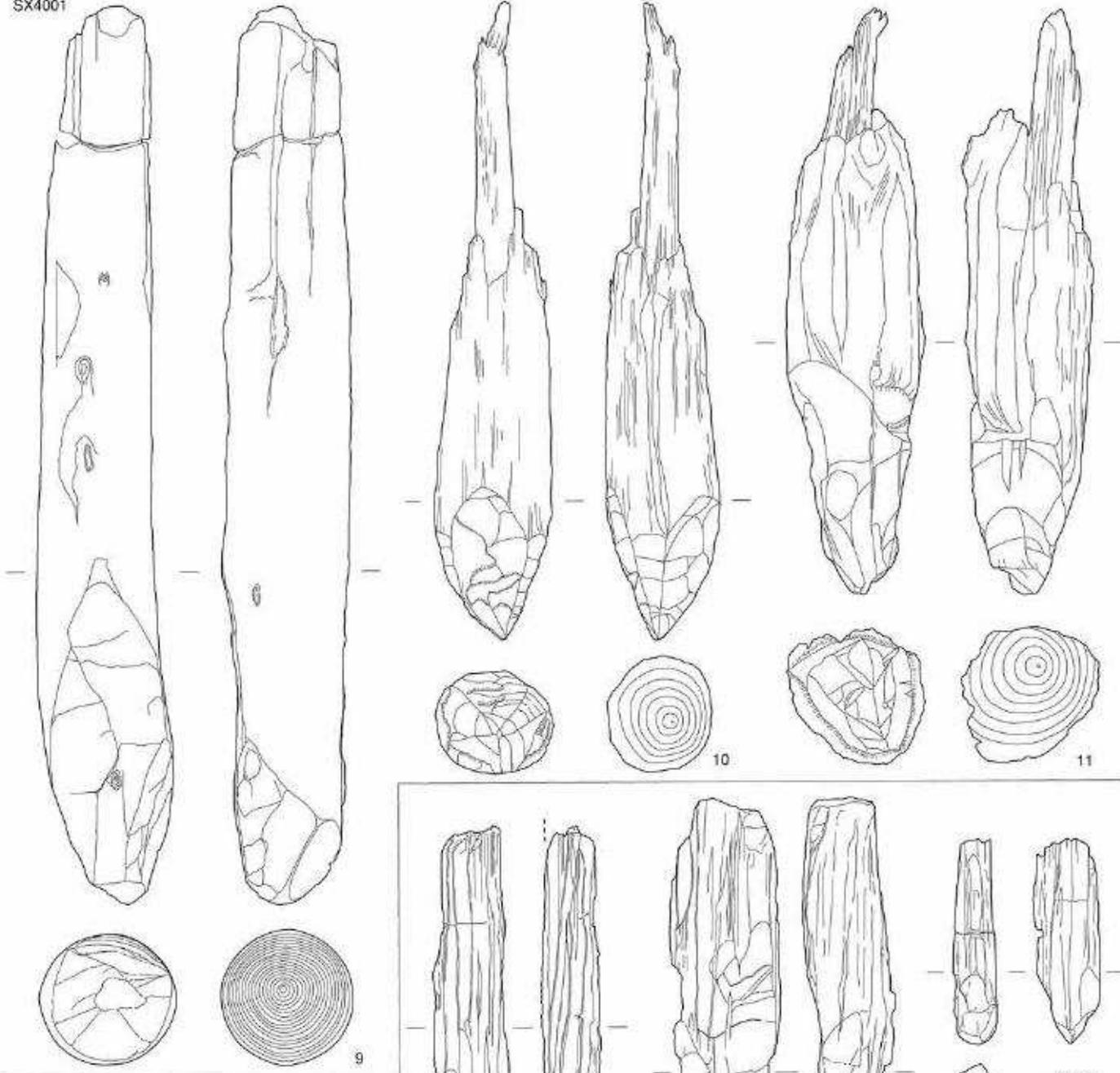


XIII層

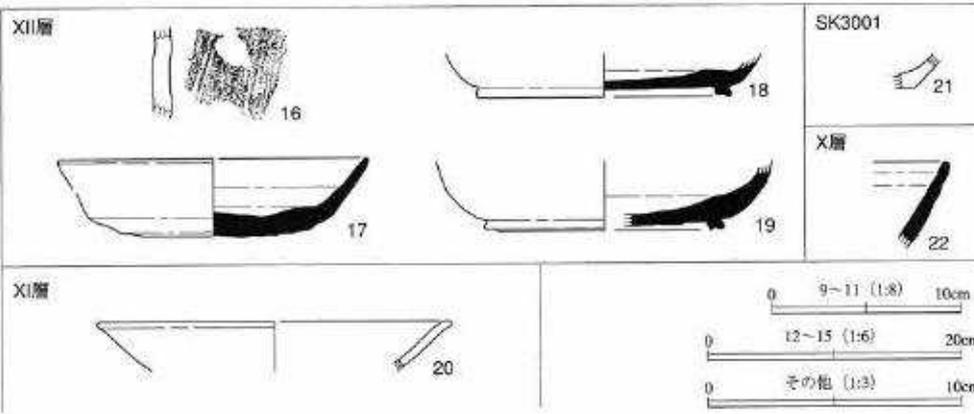
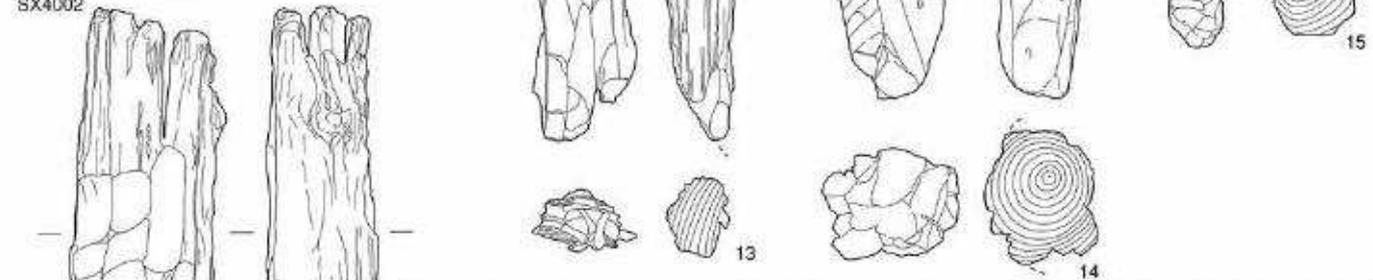
SX4001

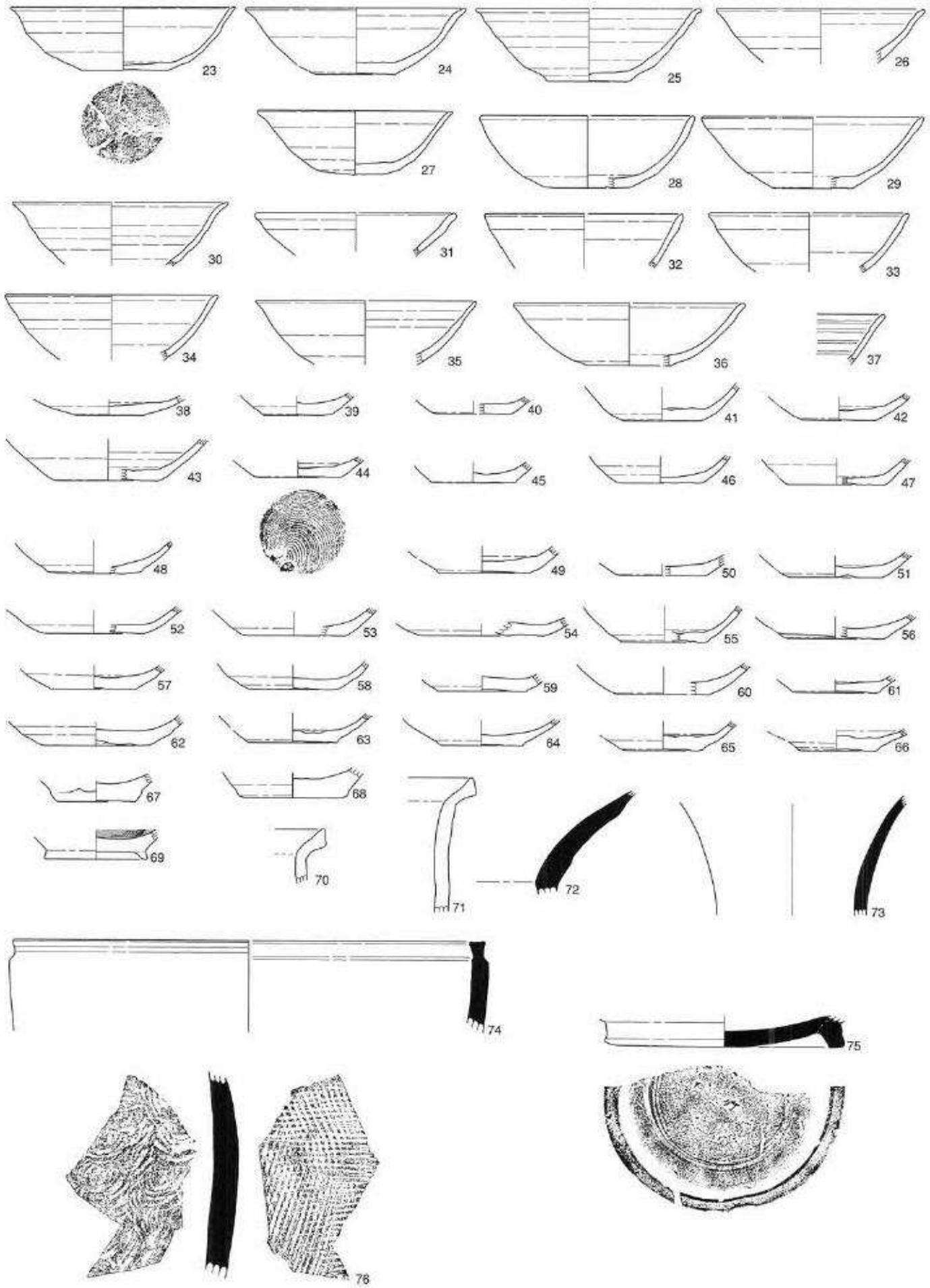


SX4001

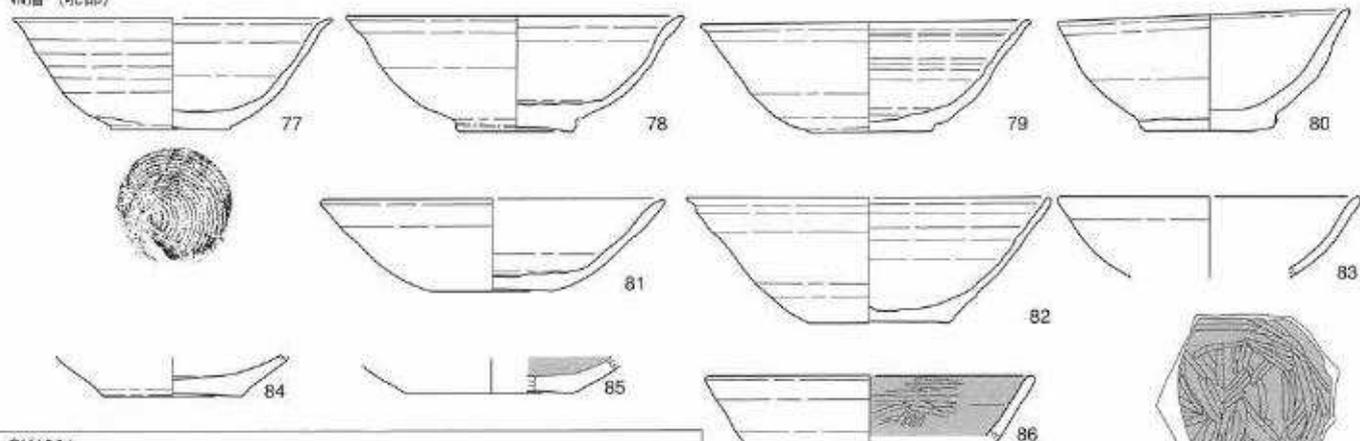


SX4002

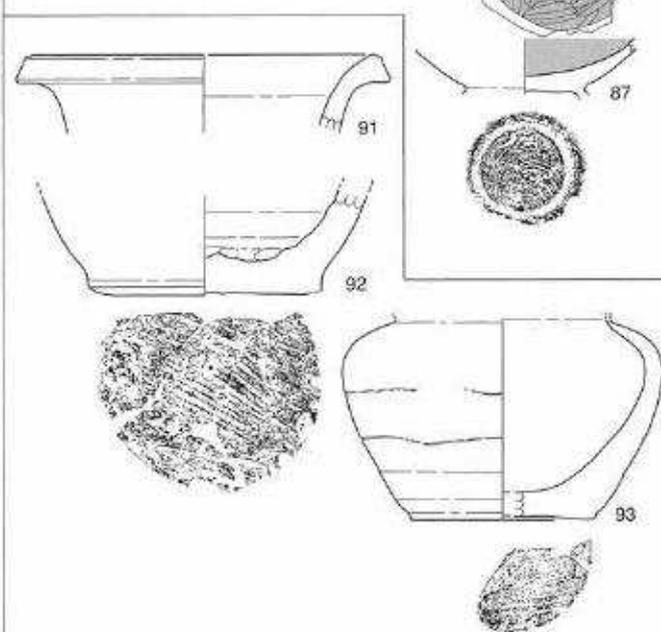
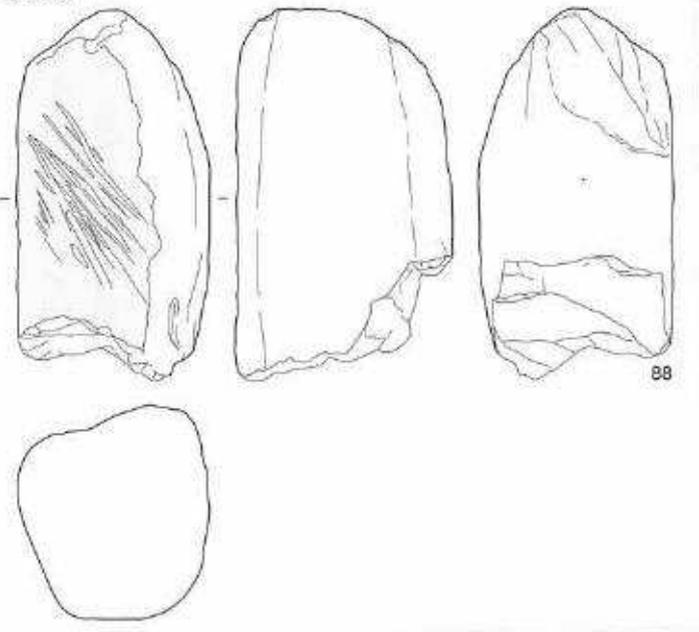




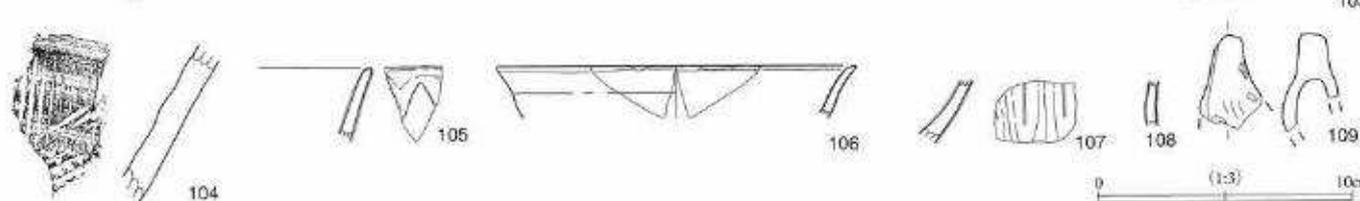
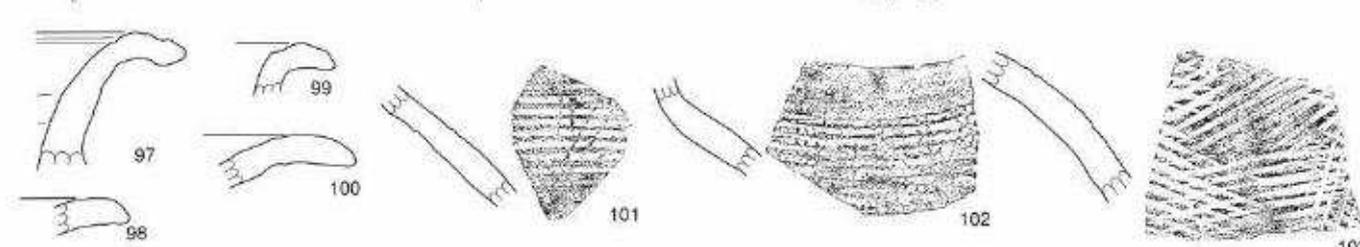
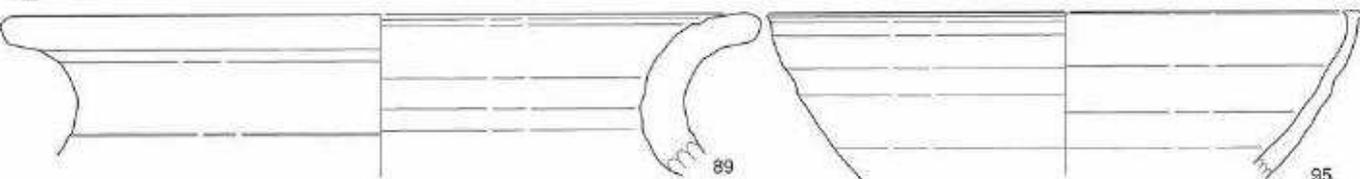
Ⅵ層 (北部)



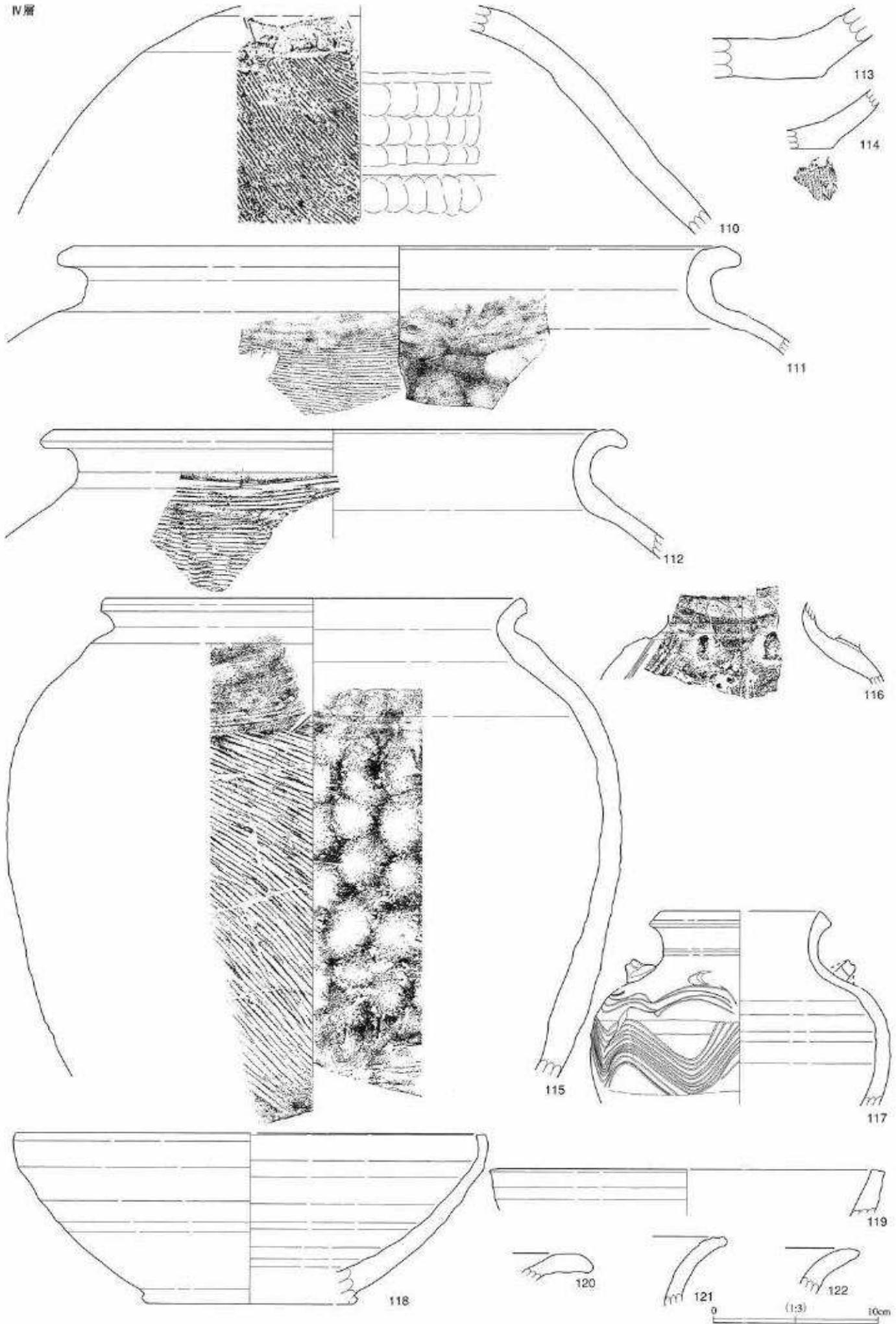
SK1001

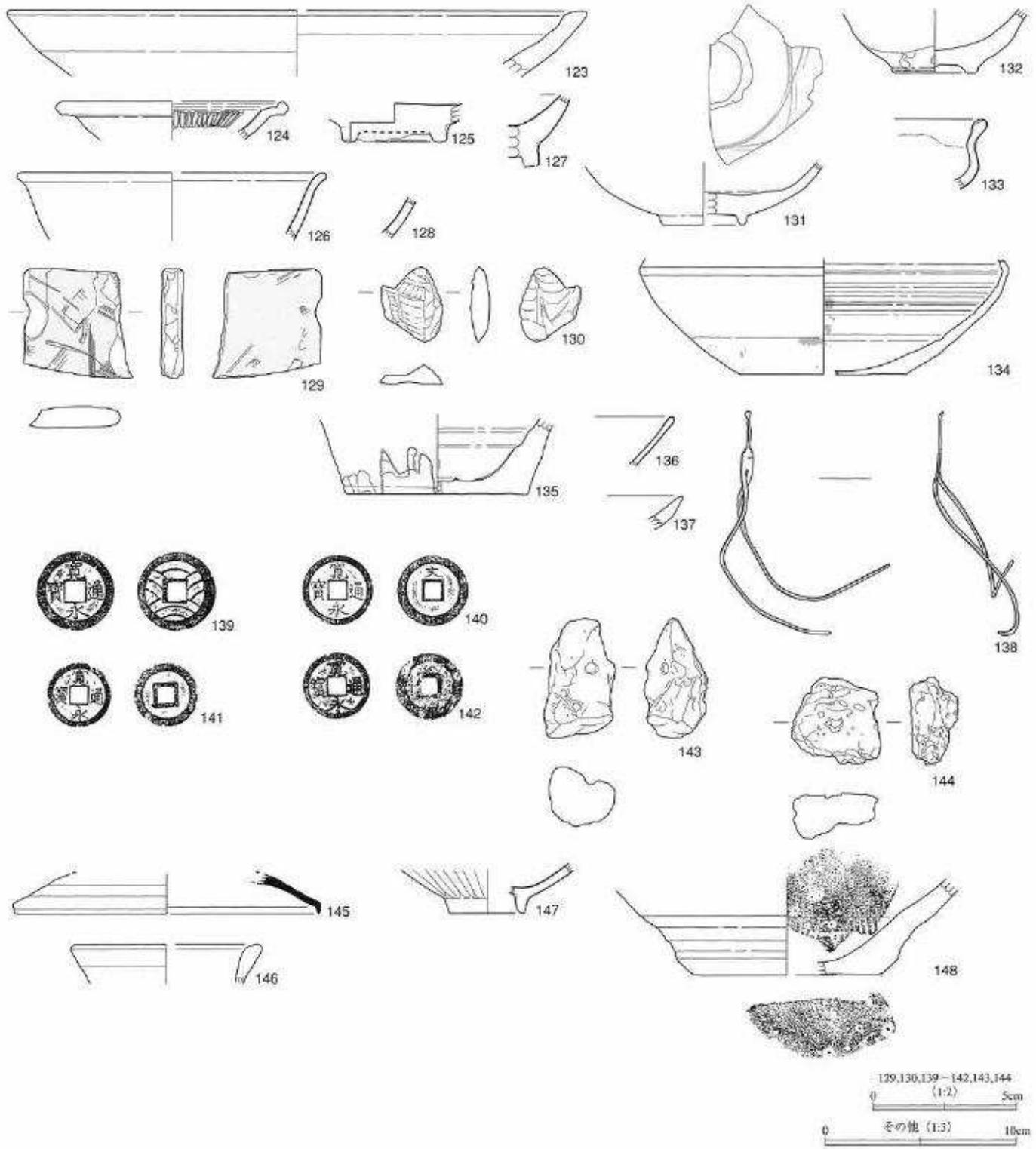


V層



IV層







昭和51（1976）年 荒川河口付近空中写真 「国土画像情報（空中写真）国土交通省」



遺跡近景 IV層（北から、荒川方向を臨む）



遺跡近景 VII層（南から、村上市街地方向を臨む）



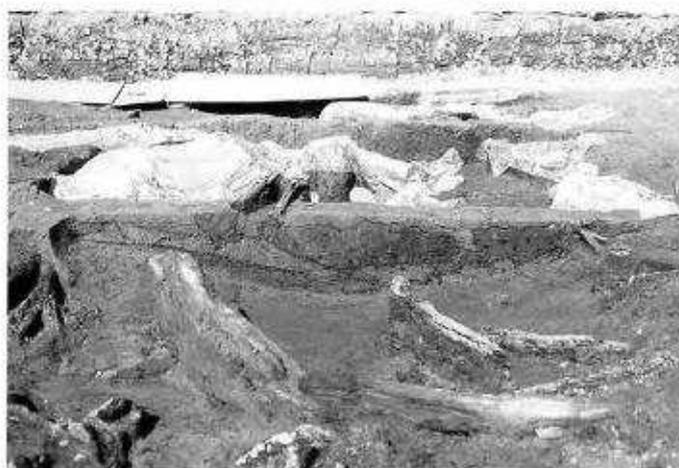
XIII層の調査



SR4003 24B付近 (東から)



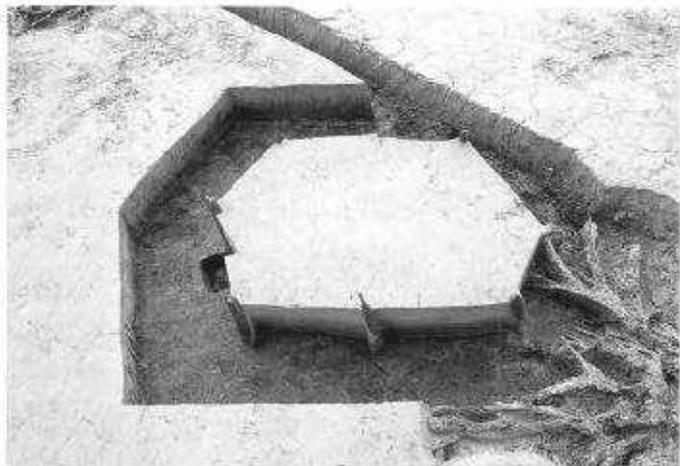
SR4003 24D付近 (東から)



SR4003 セクション 24B (東から)



SR4003 セクション 23C (東から)



SX4001 木杭検出状況全景（東から）



SX4001 木杭検出状況全景（北東から）



SX4001 木杭検出状況（西から）



SX4001-③ 木杭検出状況（南西から）



SX4002 検出状況全景（西から）



SX4002-① 木杭検出状況（南東から）



SX4002-② 木杭検出状況（南東から）



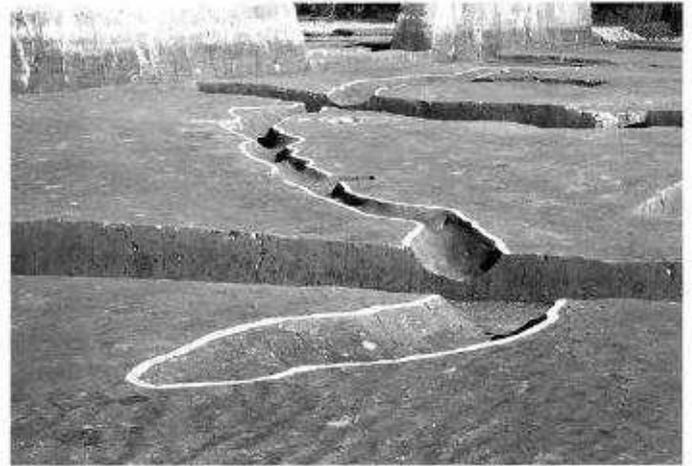
SX4002-③ 木杭検出状況（南東から）



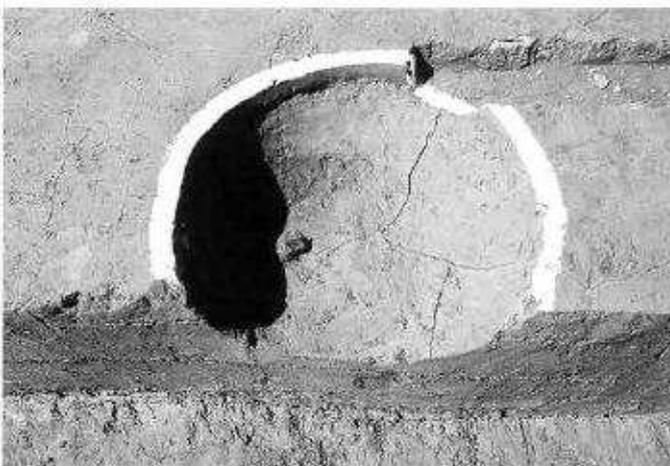
X層の調査



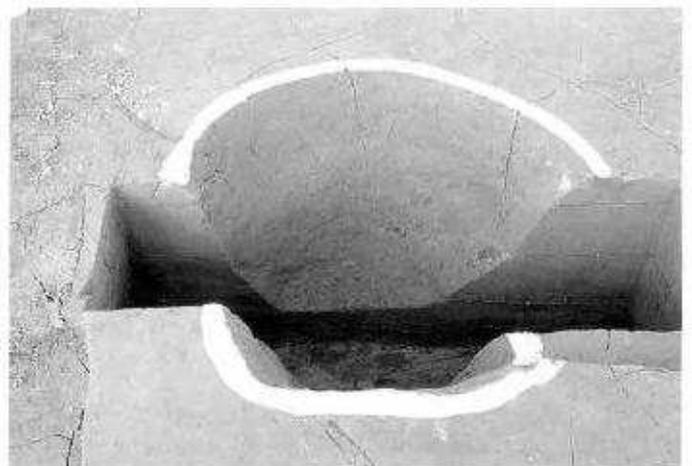
SD3004 完掘状況 17A (西から)



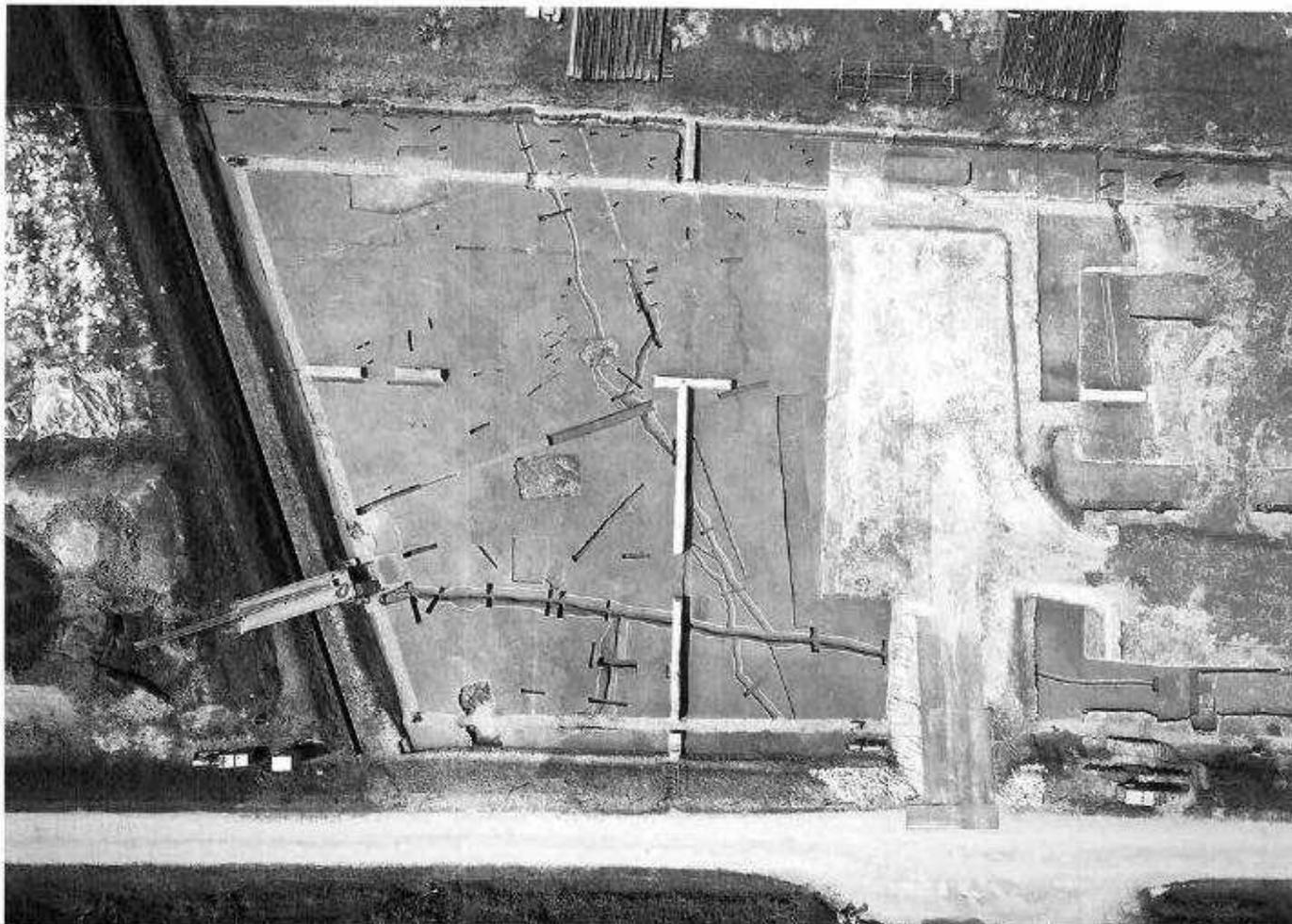
SD3003 完掘状況 17C (西から)



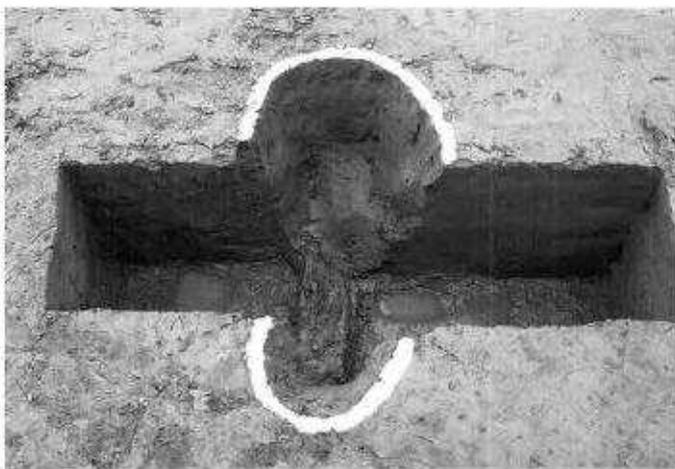
SK3001 完掘状況 (東から)



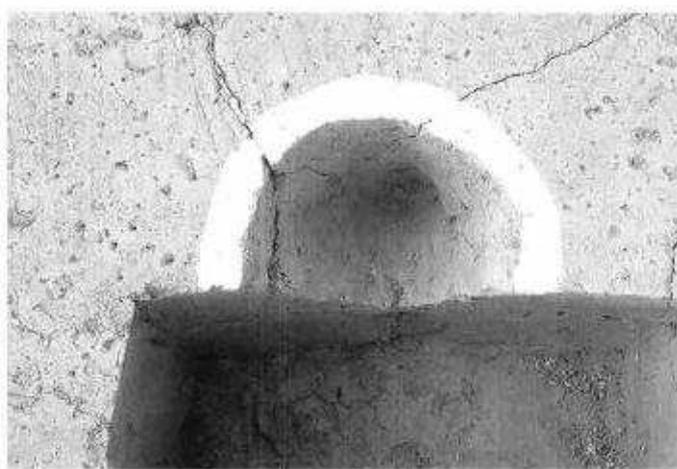
SK3002 完掘状況 (南から)



VII層の調査



P2002 完掘状況 (東から)



P2009 完掘状況 (東から)



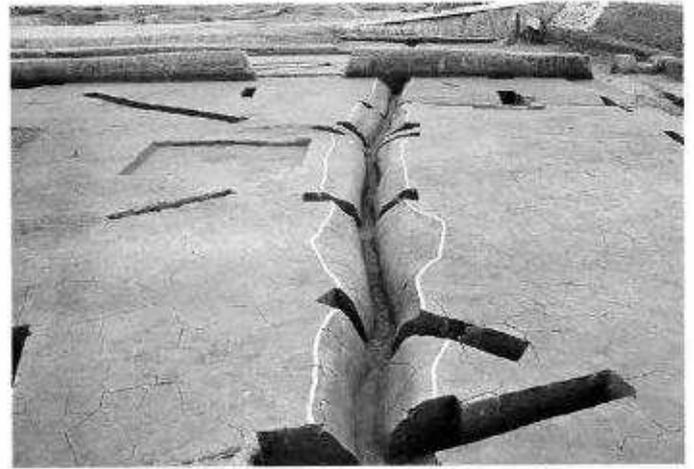
SD2001 完掘状況 (東から)



SD2003 完掘状況 D20付近 (北から)



SD2003 完掘状況 18D付近 (北から)



SD2003 完掘状況 16・17D付近 (北から)



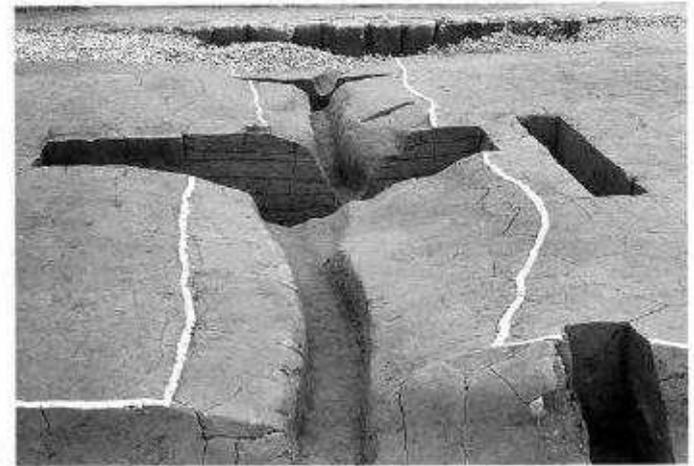
SD2003 土層断面



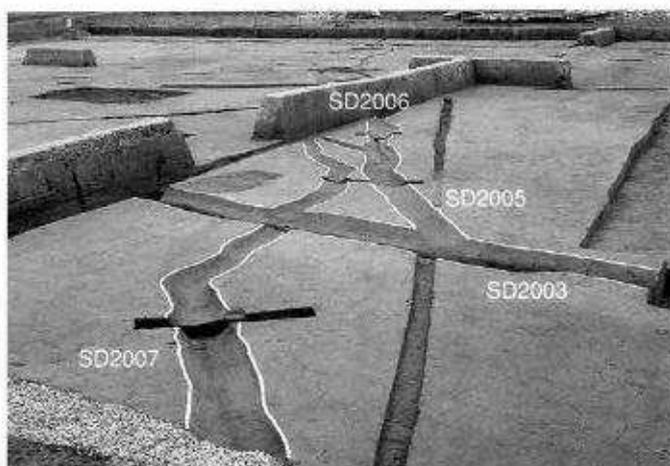
SD2004 完掘状況 (西から)



SD2005 完掘状況 (西から)



SD2008 完掘状況 (西から)



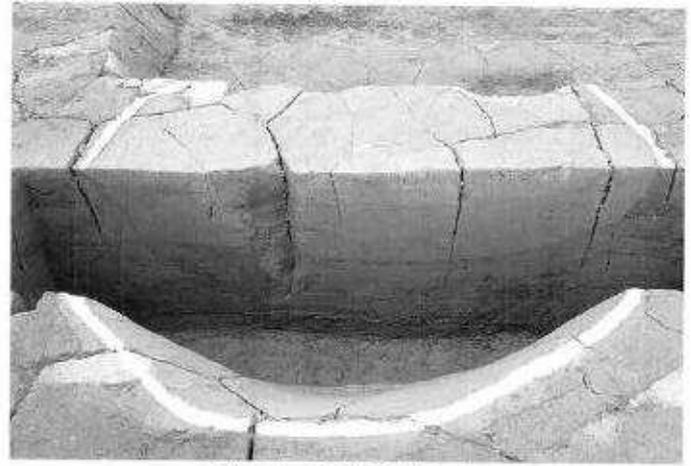
SD2003・2005~2007 完掘状況 (東から)



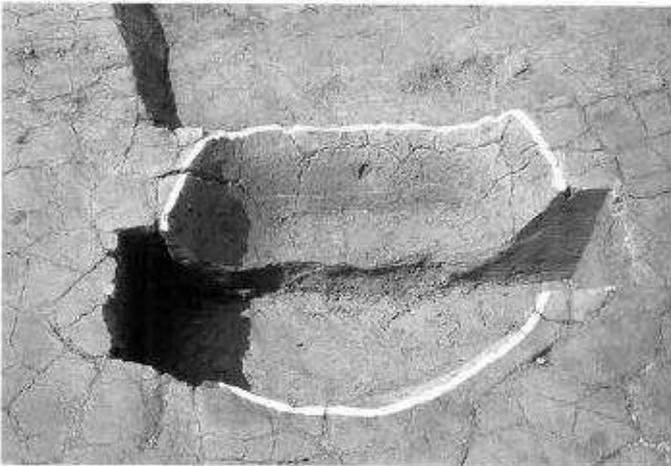
SD2005 土層断面 (西から)



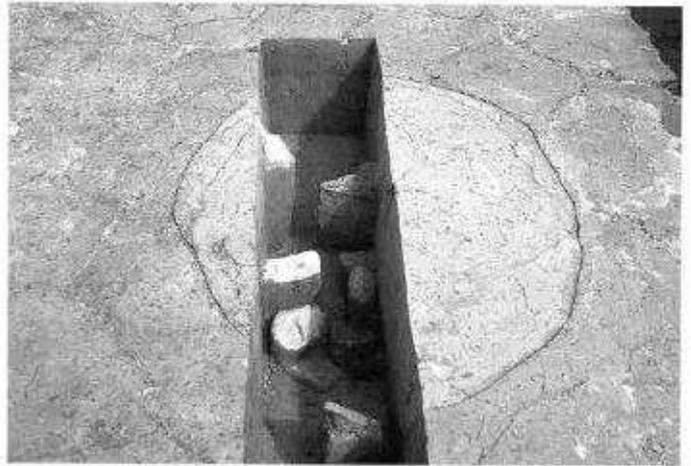
SK1001 発出土状況（北から）



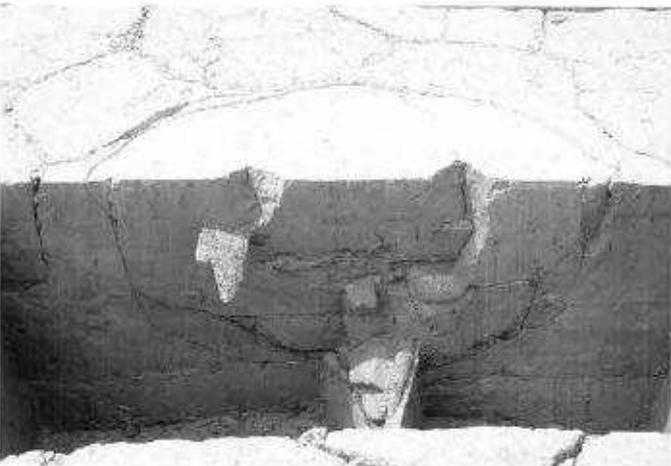
SK1001 土層断面（北から）



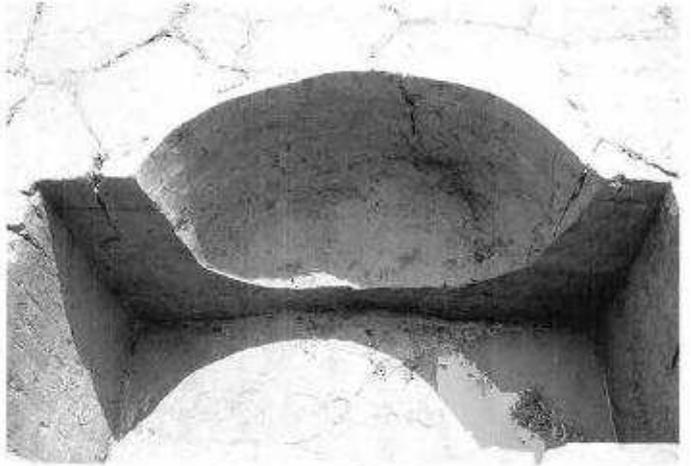
SK1001 完掘状況（北から）



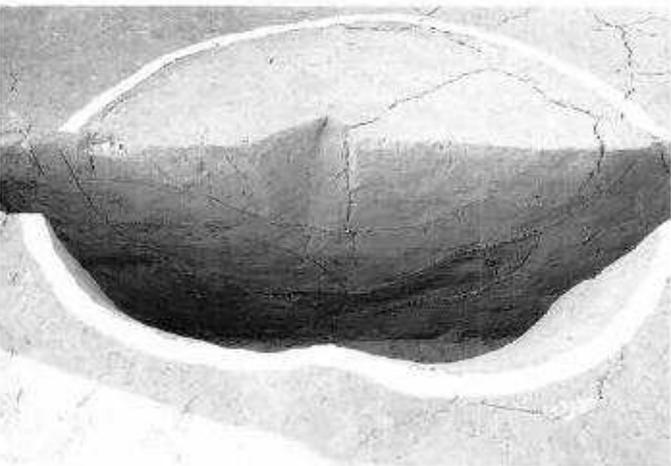
SK1015 発出土状況（西から）



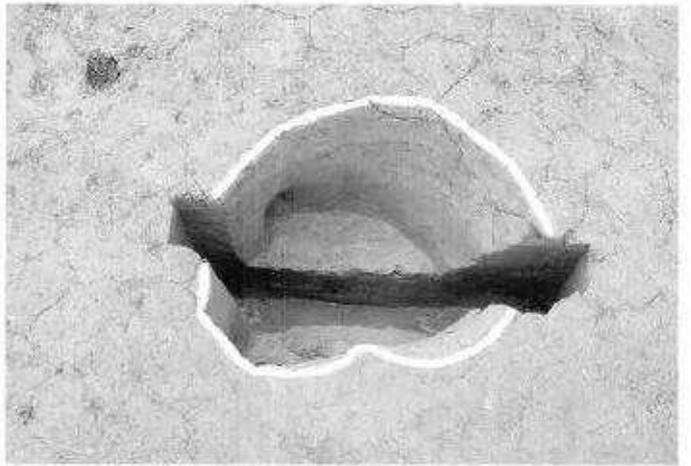
SK1015 土層断面（北から）



SK1015 完掘状況（北から）



SK1019 土層断面（南から）



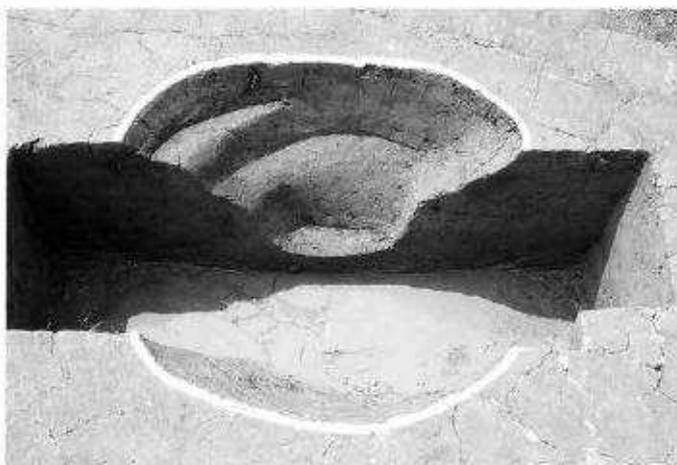
SK1019 完掘状況（南から）



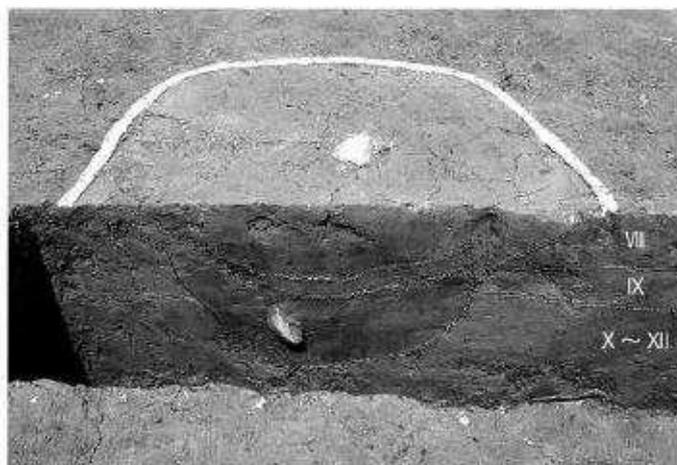
SK1002 発出土状況 (南から)



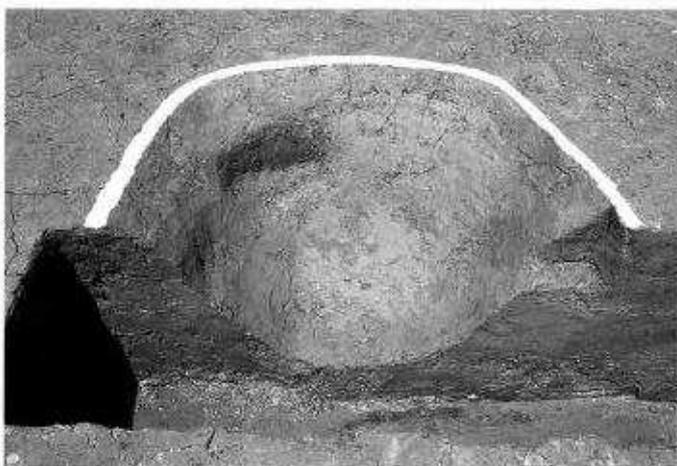
SK1002 土層断面 (東から)



SK1002 完掘状況 (東から)



SK1017 土層断面 (東から)



SK1017 完掘状況 (東から)



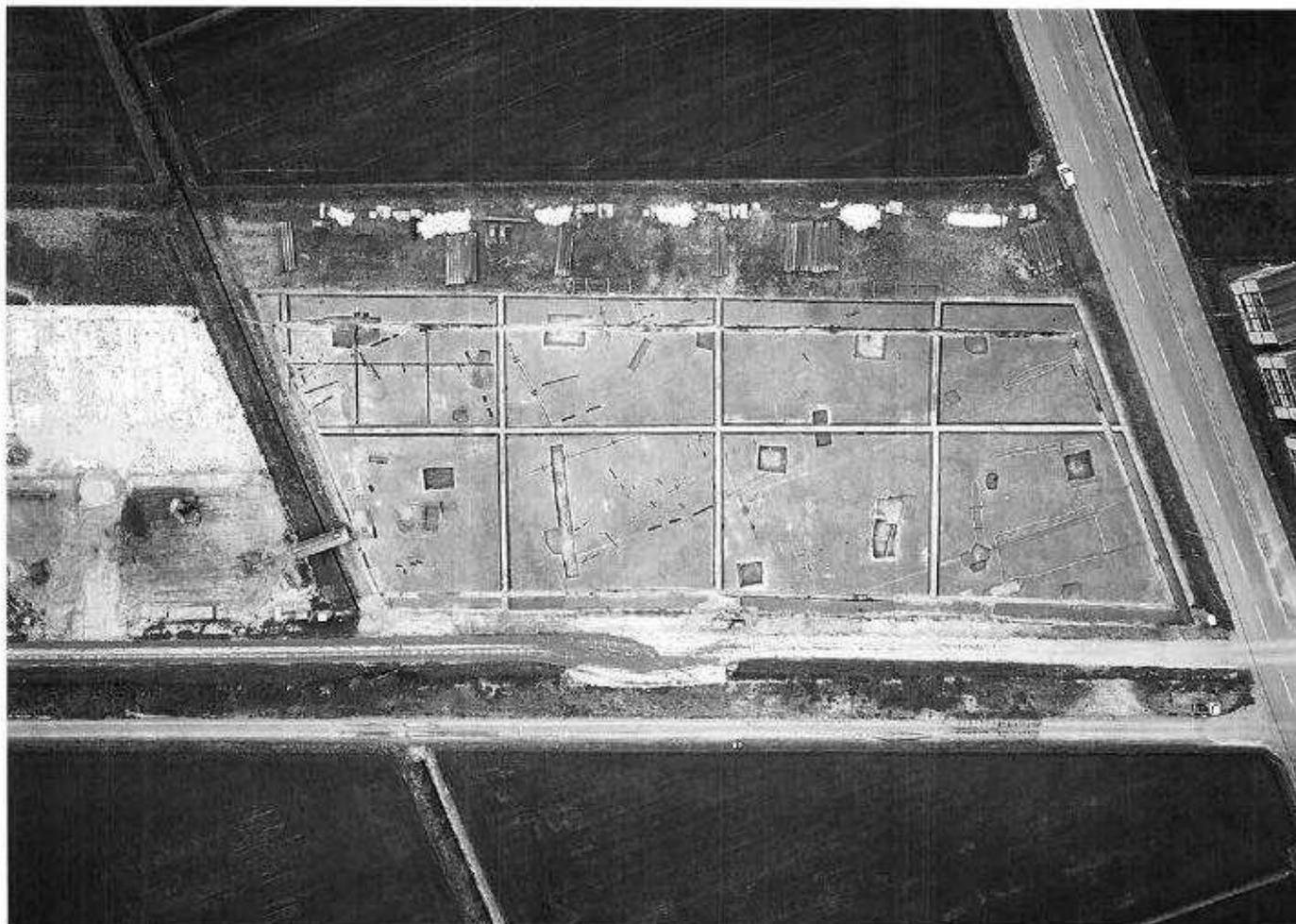
SD1003～1005 円礫出土状況 (東から)



SD1003～1005 土層断面 (東から)



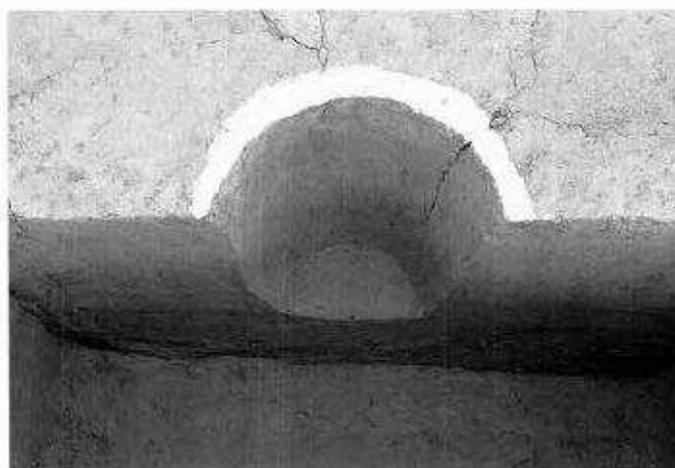
P1011 土層断面 (東から)



IV層の調査



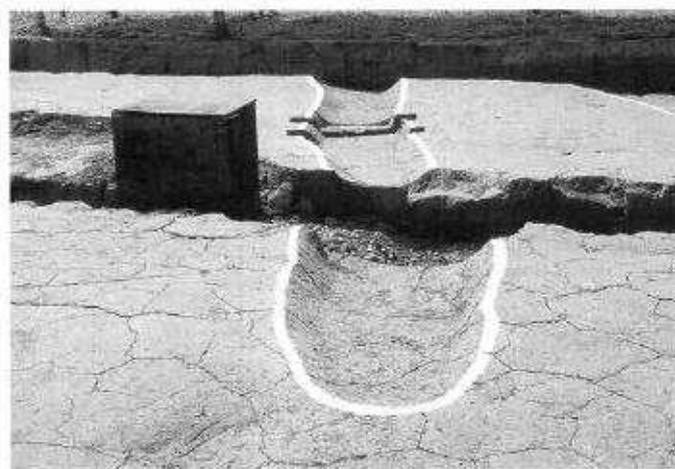
P0004 土層断面 (西から)



P0004 完掘状況 (西から)



SD0014 完掘状況 (東から)



SD0015 完掘状況 (東から)



SD0014 付近 珠洲集中出土状況 (東から)



SD0014 珠洲集中出土状況 (南から)



SD0014 土層断面 (東から)



SK0023 完掘状況 (北から)



SD0016・0017 完掘状況 合流付近 (東から)



SD0020 完掘状況 (南から)



SD0021 完掘状況 (南から)



SX0024 完掘状況 (南西から)



IV層調査 珠洲集中出土状況 20B



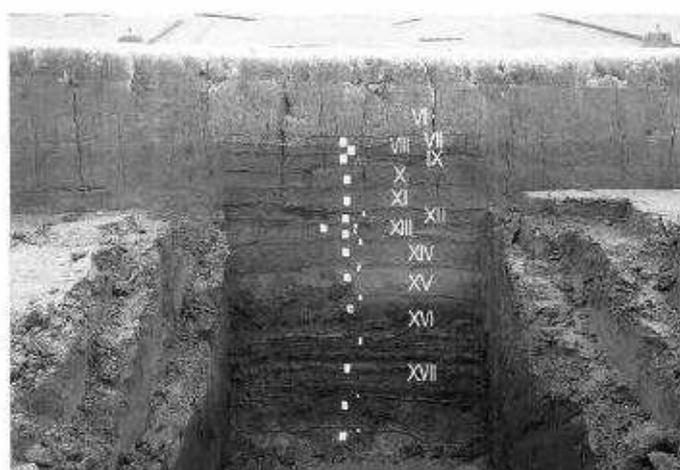
IV層調査 筭出土状況 25B



VI層調査 ロクロ土師器出土状況 12B



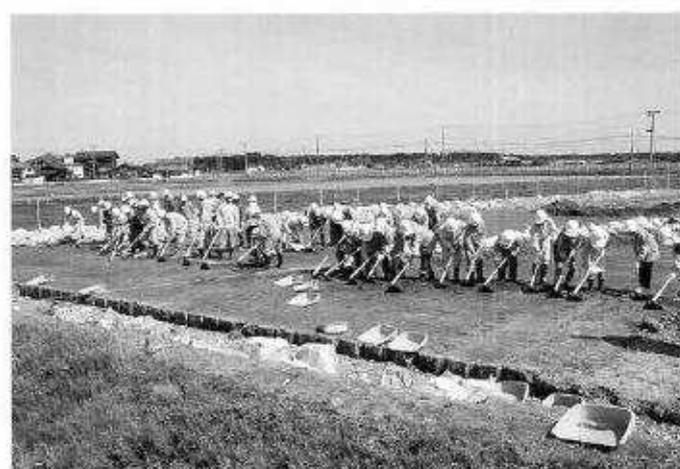
XII層調査 須恵器出土状況 8E



基本層序 16A付近



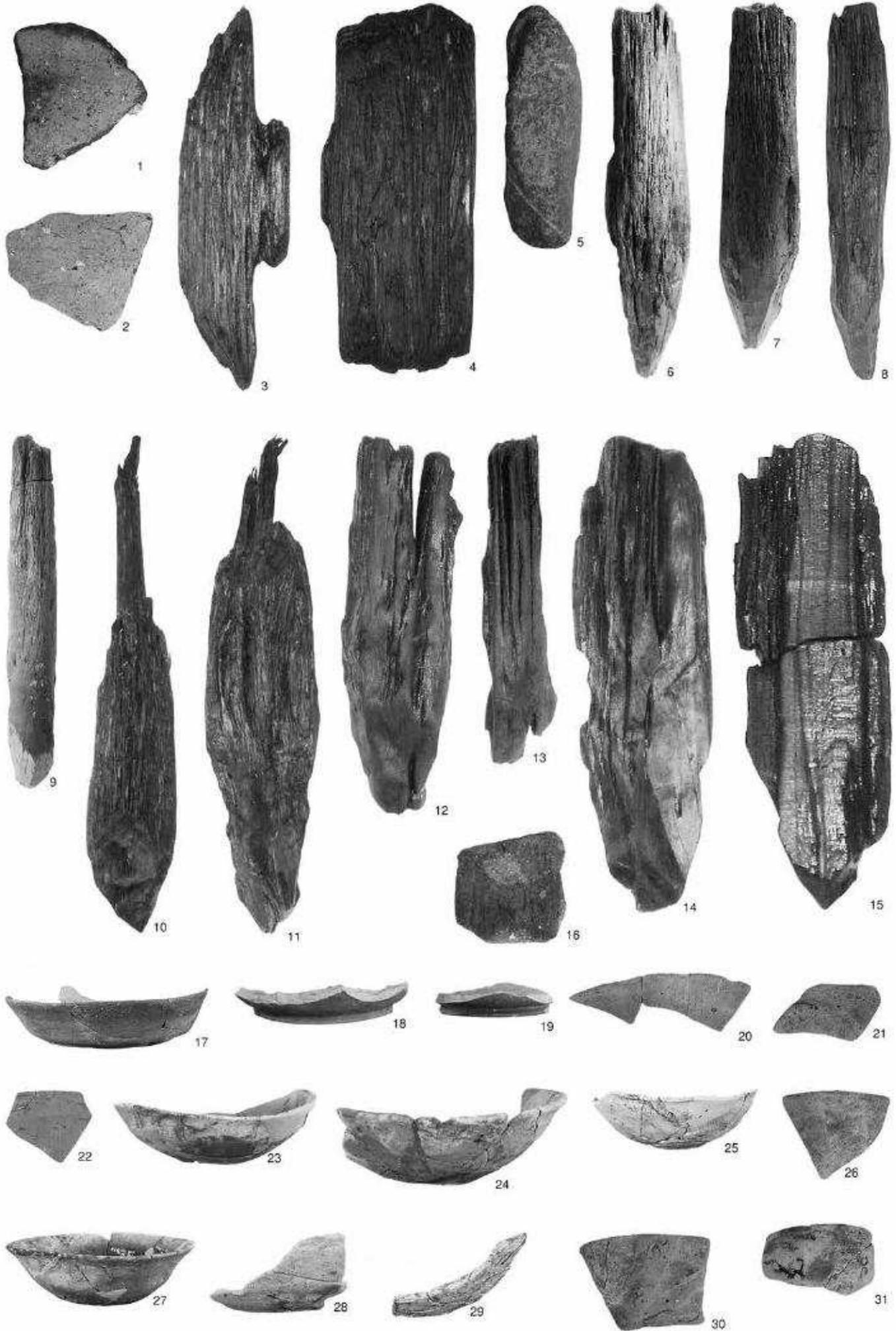
基本層序 23A付近

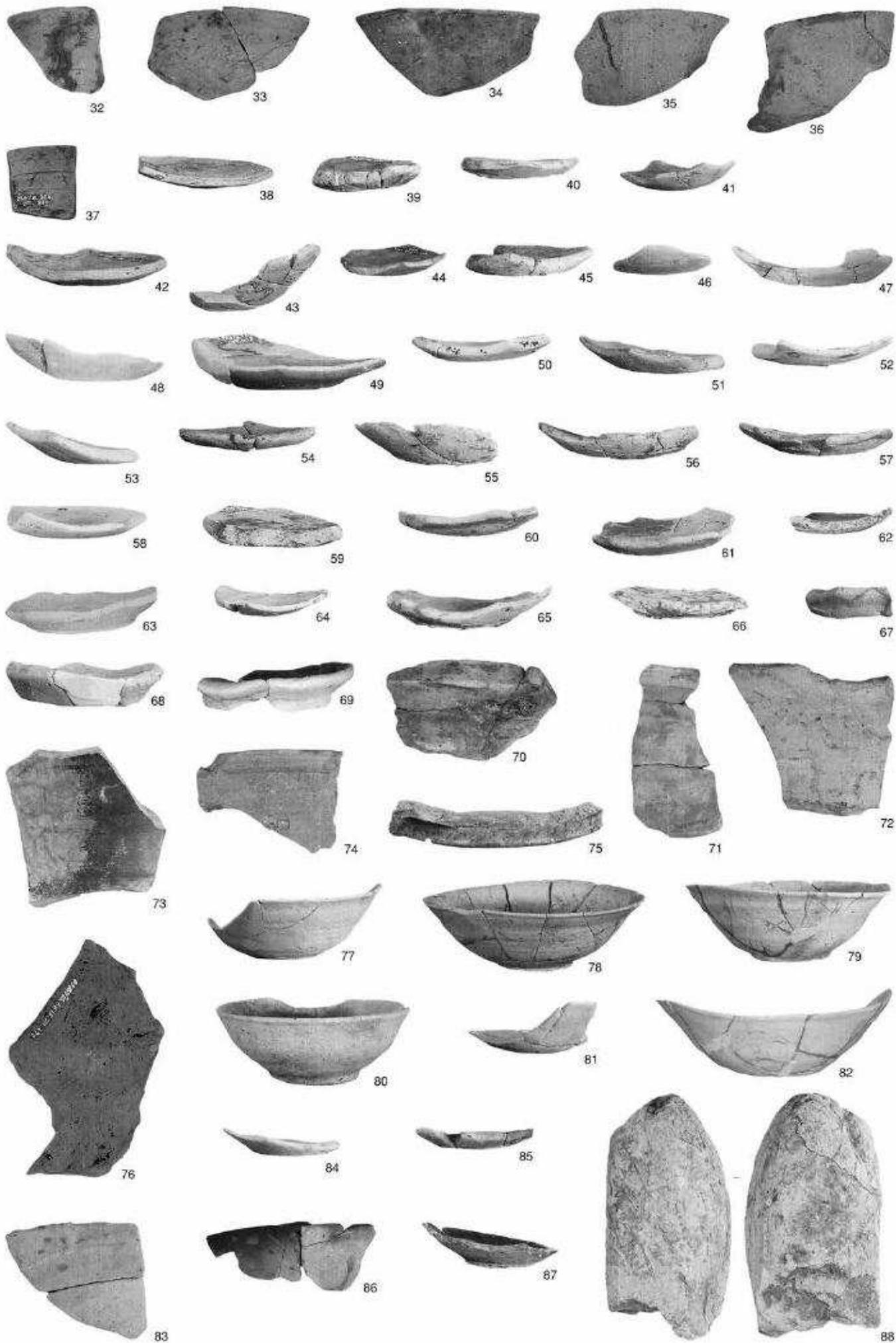


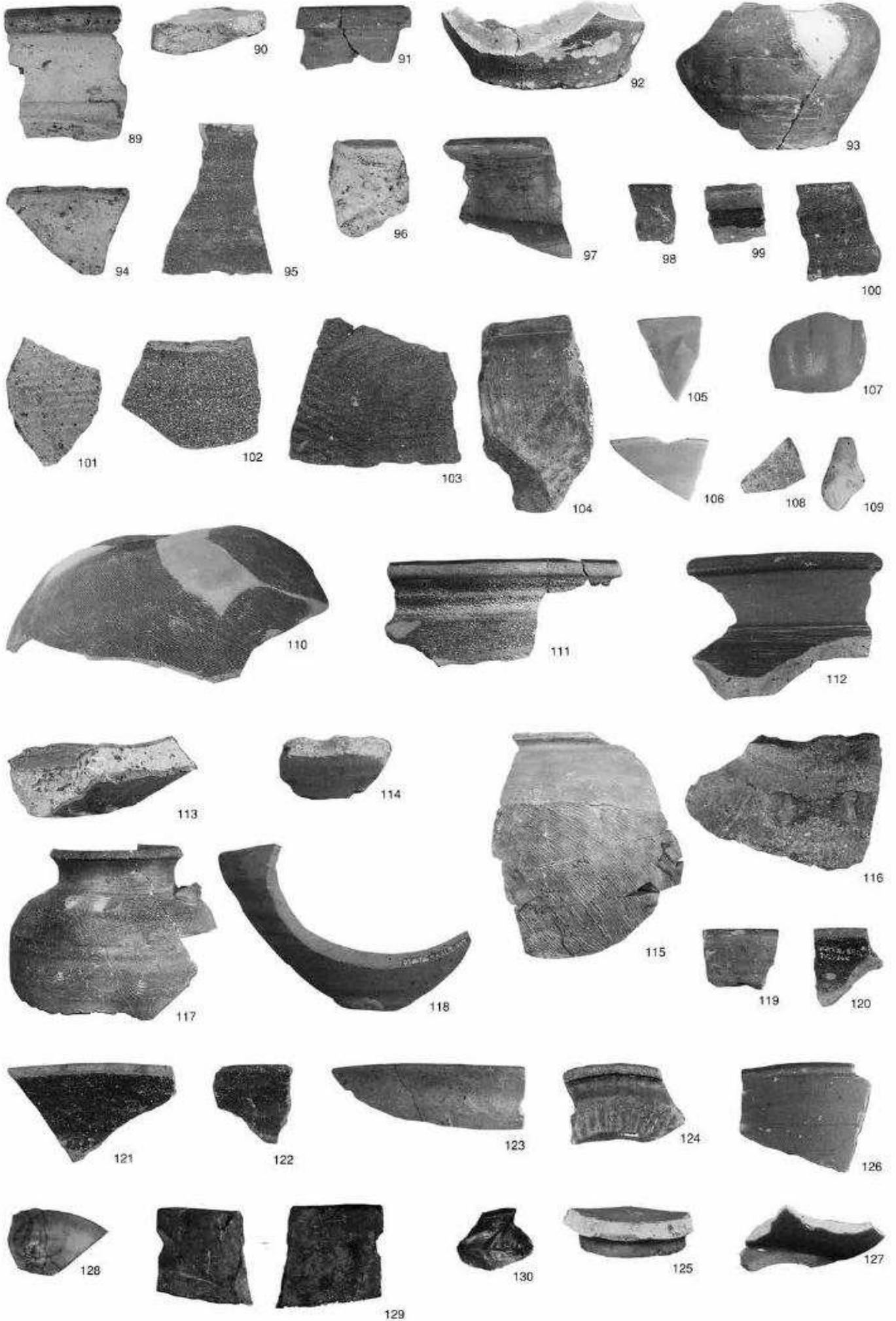
作業風景

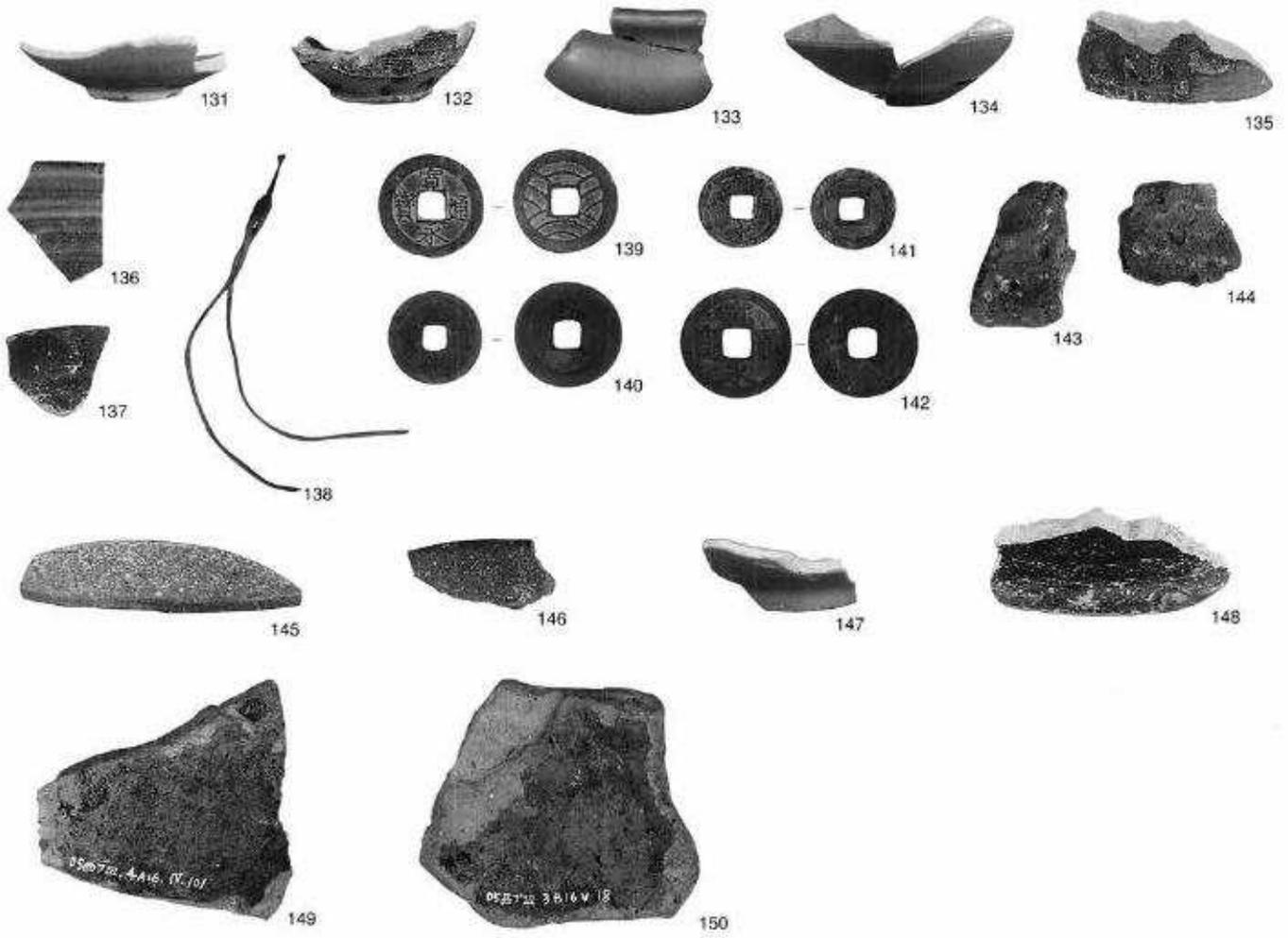


作業風景

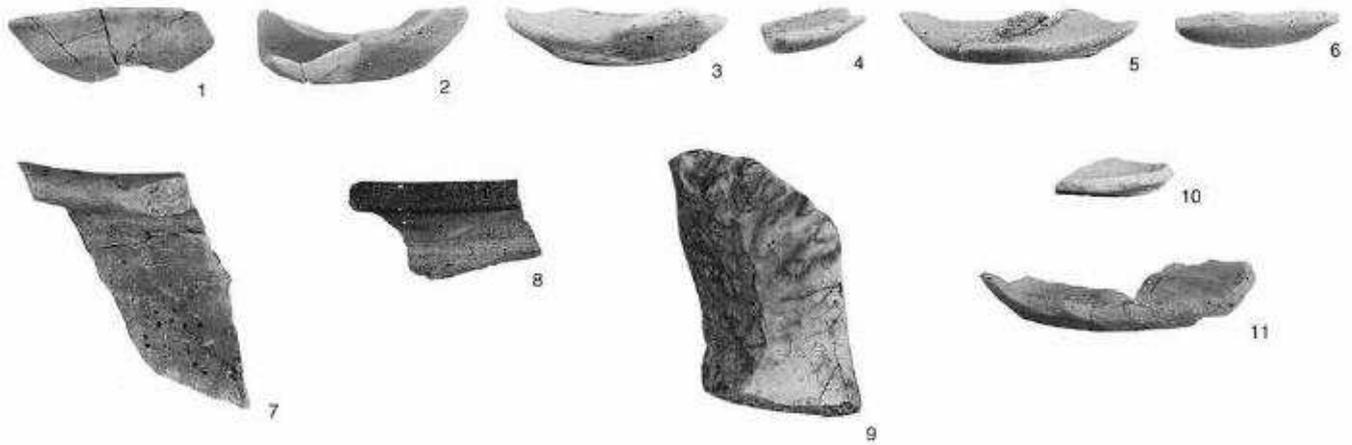




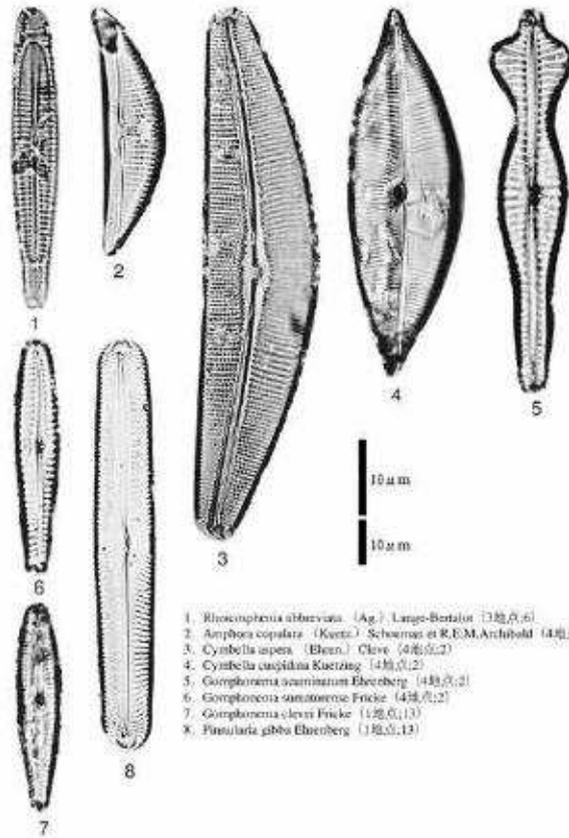




確認調査出土遺物（数字は第4図の遺物番号に同じ）

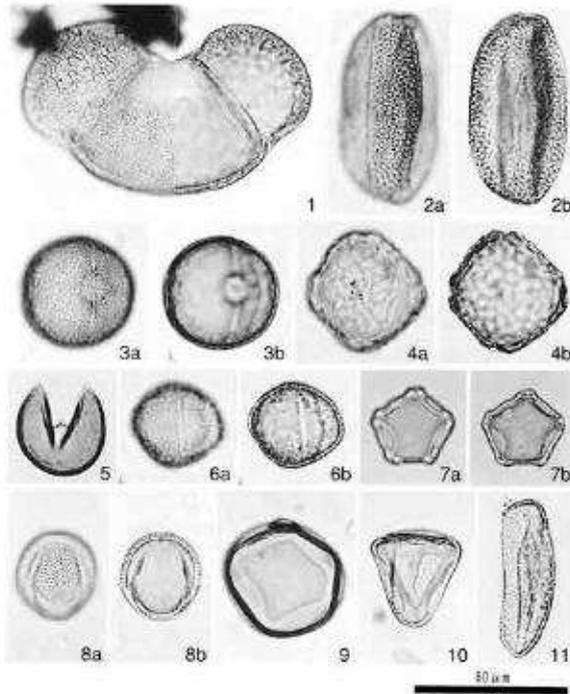


珪藻化石



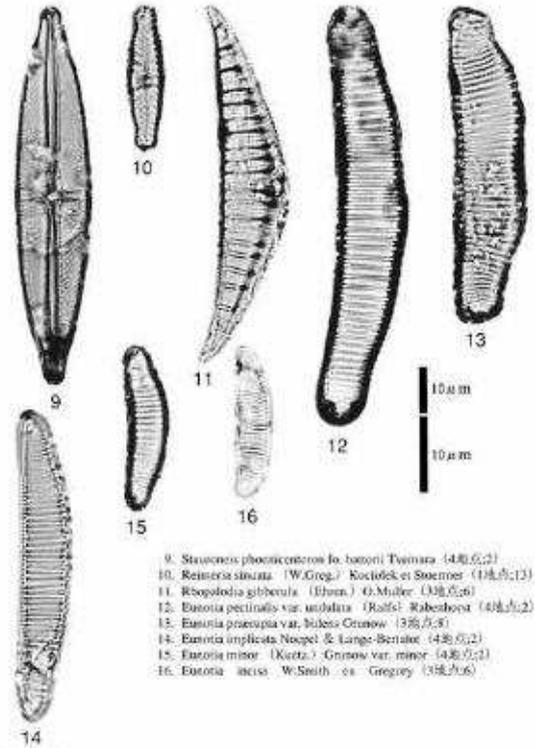
1. *Rhizosolenia abbreviata* (Ag.) Lange-Bertalot (1地点,6)
2. *Amphioxys copulata* (Kuetz.) Schwan et R.E.M. Archibald (4地点,2)
3. *Cymbella aspera* (Ehren.) Cleve (4地点,2)
4. *Cymbella cuspidata* Kuetzing (4地点,2)
5. *Gomphonema aurantium* Eberberg (4地点,2)
6. *Gomphonema samstovense* Fricke (4地点,2)
7. *Gomphonema clevei* Fricke (1地点,13)
8. *Pinnularia gibba* Eberberg (1地点,13)

花粉化石



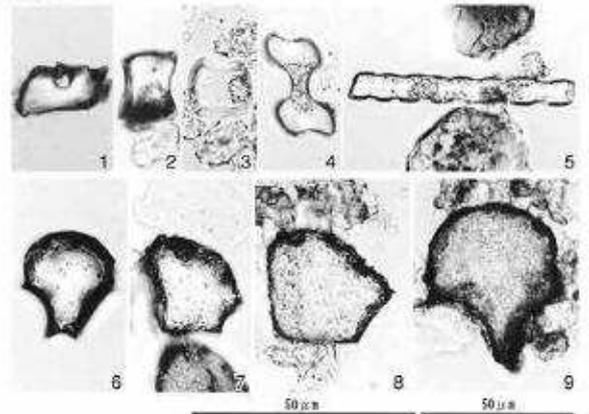
1. マツ属 (1地点,3)
2. ツバ属 (2地点,1)
3. フナ属 (1地点,3)
4. ニレ属-ケヤキ属 (1地点,3)
5. スギ属 (3地点,1)
6. コナラ属-コナラ属 (1地点,3)
7. ハシノキ属 (1地点,3)
8. トネリコ属 (4地点,2)
9. イネ科 (3地点,1)
10. カヤツリグサ科 (3地点,1)
11. シズアオイ属 (3地点,1)

珪藻化石



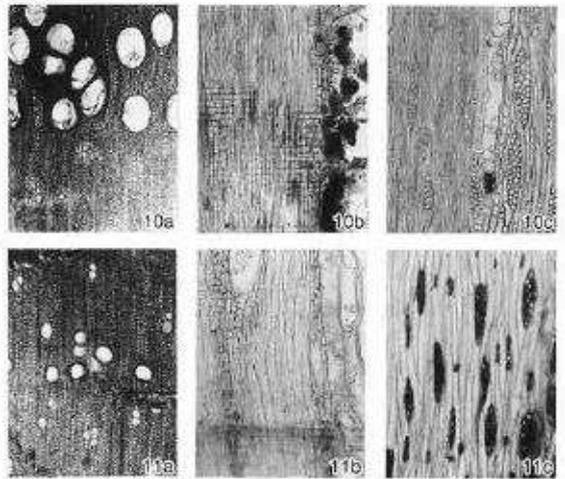
9. *Striatonema phoenicenteron* fo. *basori* Taira (4地点,2)
10. *Reinertia sinata* (W.Greg.) Kociolek et Stoermer (1地点,13)
11. *Rhegiodia gibberula* (Ehren.) G.Müller (3地点,6)
12. *Emuria pectinatis* var. *umbilata* (Ralfs) Rabenhof (4地点,2)
13. *Emuria praecipua* var. *minuta* Grunow (3地点,3)
14. *Emuria implexata* Noepel & Lange-Bertalot (4地点,2)
15. *Emuria minor* (Kuetz.) Grunow var. *minor* (4地点,1)
16. *Emuria incisa* W.Smith ex Gregory (3地点,6)

植物硅酸体



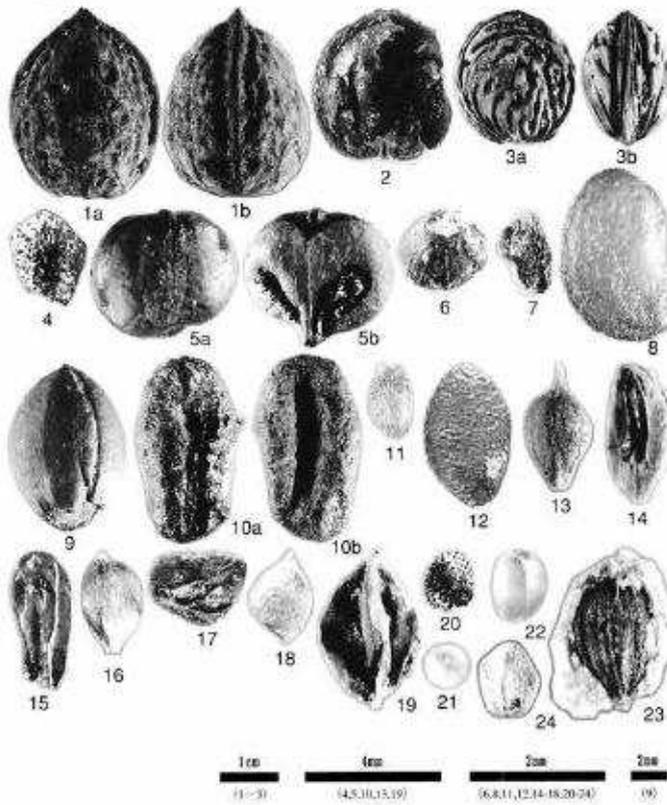
1. ケンギョウ属植物硅酸体 (1地点,13)
2. ケンギョウ属植物硅酸体 (3地点,1)
3. コシノボリ属植物硅酸体 (2地点,5)
4. スズキノボリ属植物硅酸体 (3地点,1)
5. イモコブノキ属植物硅酸体 (1地点,13)
6. イモコブノキ属植物硅酸体 (1地点,13)
7. ケンギョウ属植物硅酸体 (1地点,13)
8. ケンギョウ属植物硅酸体 (3地点,1)
9. コシノボリ属植物硅酸体 (2地点,5)

木材 (4)



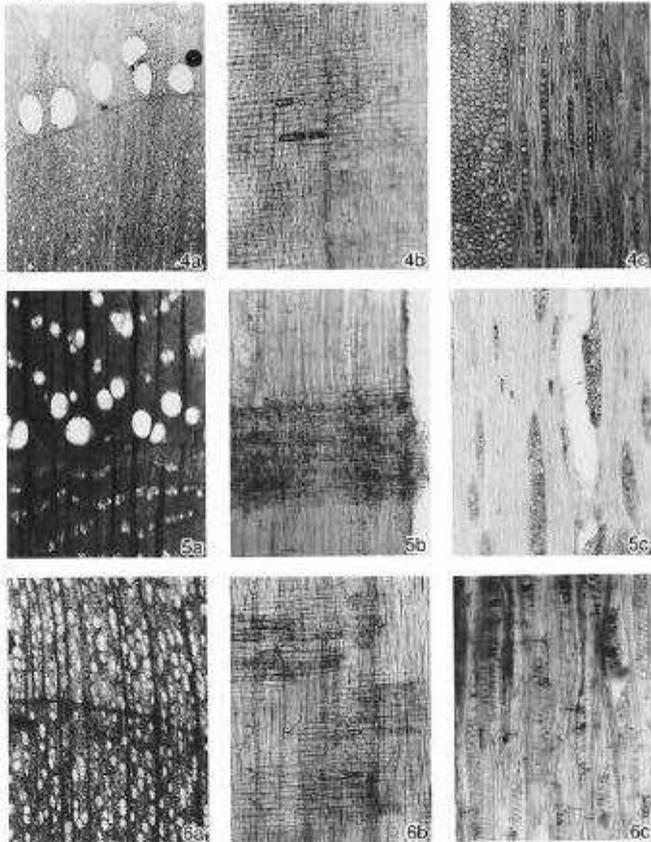
10. トネリコ属 (SR4003; 原木)
 11. トネリコ属<新材> (SR4003; 新材)
- a: 本心, b: 材目, c: 材目

種実実体



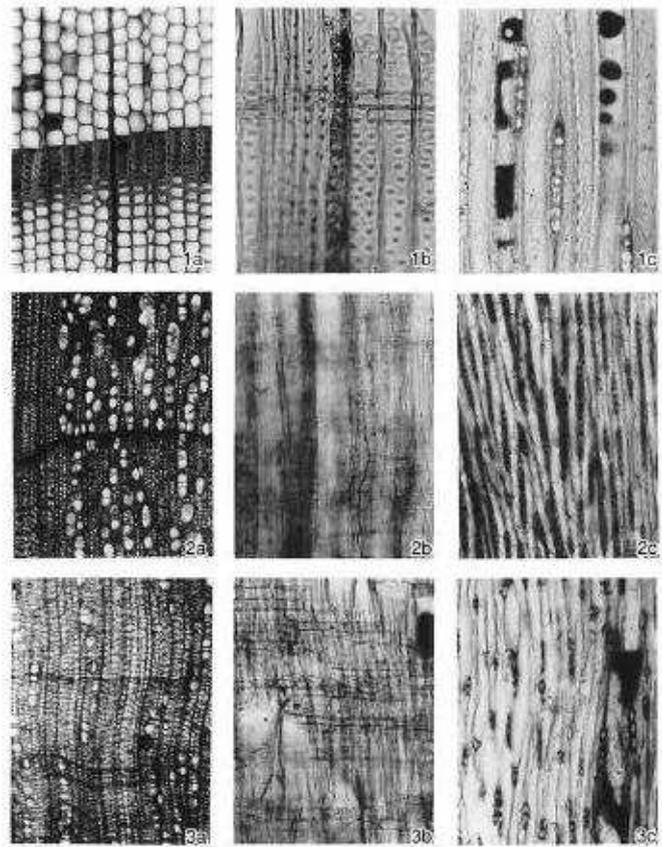
1. オニグルミ 核(遺物番号5085)
2. オニグルミ 核(食前)(遺物番号5081)
3. モミ 核(遺物番号5085)
4. アカメダシグ 種子(4地点,2)
5. イブツク 種子(4地点,2)
6. マツノ科 種子(4地点,2)
7. マツノ科 種子(4地点,2)
8. マツノ科 核(4地点,2)
9. エゴノキ属 種子(遺物番号5085)
10. オマズミ 核(4地点,2)
11. オニツツク 種子(4地点,2)
12. ニワトコ 核(4地点,2)
13. ヨモギ 果実(4地点,2)
14. ヨモギ 果実(4地点,2)
15. ミツバネ 果実(4地点,2)
16. カサネツツク 種子(4地点,2)
17. イボクサ 種子(4地点,2)
18. ケンカ 果実(4地点,2)
19. ケンカ 果実(4地点,2)
20. ナツコ 種子(4地点,2)
21. ナツコ 種子(4地点,2)
22. スミレ 種子(4地点,2)
23. セリ科 果実(3地点,6)
24. セリ科 果実(4地点,2)

木材 (2)



4. コナラ属コナラ亜属コナラ属 (SX4001;枚②)
 5. コナラ属 (SX4001;枚③)
 6. モリス属 (SX4002;枚③)
- a: 木口, b: 板目, c: 板目*

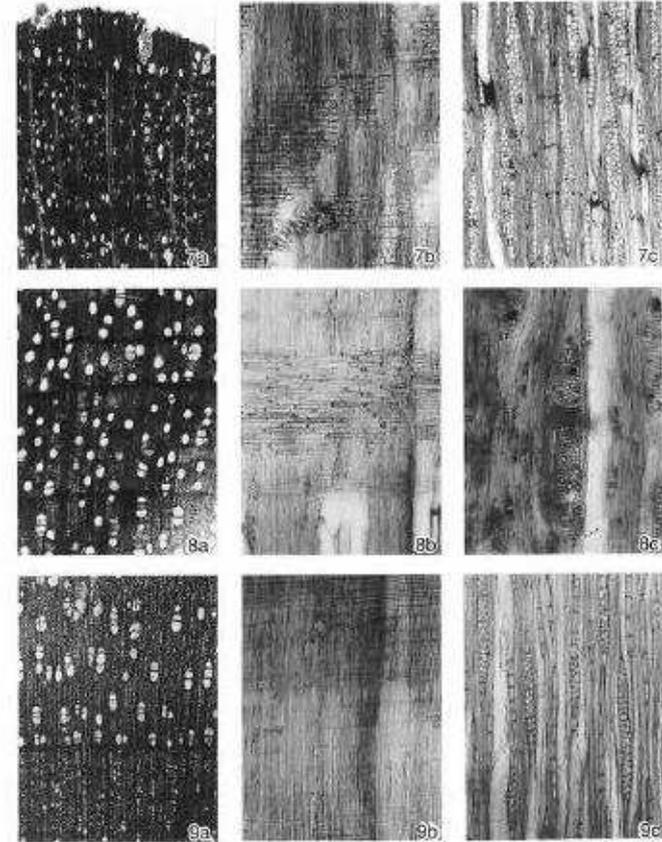
木材 (1)



1. ヌナギ (SR01;155)
 2. ハシノキ属ハシノキ亜属 (SX4001;枚①)
 3. ハシノキ属ハシノキ亜属<板目> (SR4003;枚3)
- a: 木口, b: 板目, c: 板目*

200 μm
200 μm
100 μm

木材 (3)



7. ササ科属 (SX4001;枚③)
 8. カニヤ属 (SX4001;枚③)
 9. エゴノキ属 (4001;枚③)
- a: 木口, b: 板目, c: 板目*

200 μm
200 μm

報告書抄録

ふりがな	せいぶいせきさん							
書名	西部遺跡Ⅲ							
副書名	日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書							
巻次	Ⅵ							
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第163集							
編著者名	鈴木俊成（財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団） 吉田 寿・作田一耕・小林貴郎（大成エンジニアリング株式会社） 酒井久美子（株式会社加速器分析研究所）・宮武頼夫（関西大学） 辻本崇夫・伊藤良永・斉藤崇人・馬場健司・松本美由紀・高橋 敦（パリオ・サーヴェイ株式会社）							
編集機関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団・大成エンジニアリング株式会社							
所在地	〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒162-0045 東京都新宿区馬場下町1-1 TEL 03 (5285) 3155 大成エンジニアリング株式会社							
発行年月日	西暦2006（平成18）年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
西部遺跡	新潟県岩船郡 神林村大字 牛屋1025 番地ほか	15583	112	38度 09分 04秒	139度 26分 02秒	20050413 ） 20051031	20,155㎡ （ V層： 5,107㎡ Ⅷ層： 4,904㎡ Ⅸ層： 4,904㎡ Ⅺ層： 2,620㎡ Ⅻ・Ⅼ層： 2,620㎡ ）	日本海沿岸 東北自動車 道建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
西部遺跡	散布地	中世 (12～14世紀)	溝14条、土坑6基、 ピット23基		珠洲、渥美・常滑、青磁、 瀬戸、越前、石製品		遺構確認面2枚 中心時期12世紀	
	散布地	古代 (7～10世紀)	杭列2基、土坑2基、溝9条、 ピット2基、自然流路1条		土師器、須恵器、砥石、 木枕		遺構確認面3枚 中心時期10世紀前半	

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第163集	
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書Ⅵ	
西部遺跡Ⅲ	
平成18年3月30日印刷 平成18年3月31日発行	発行 新潟県教育委員会 〒950-8570 新潟市新光町4番地1 電話 025 (285) 5511 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団 〒956-0845 新潟市金津93番地1 電話 0250 (25) 3981 FAX 0250 (25) 3986 印刷・製本 株式会社セピアス 〒970-8026 福島県いわき市平字作町1-3-11 電話 0246 (22) 6209 FAX 0246 (22) 6218

頁	位置	誤	正
図版30	左列 上から3枚目	(西から)	(南東から)
図版30	右列 下から1枚目	(西から)	(東から)
図版31	左列 上から1枚目	SK1001・(北から)	SK1002・(東から)
抄録	北緯	38度09分04秒	38度09分06秒
抄録	東経	139度26分02秒	139度26分04秒